
俺さあ、人間じゃなくなったみたいなんだ

緋薇鶴 夢月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺さあ、人間じゃなくなつたみたいなんだ

【Nコード】

N7754W

【作者名】

緋薇鷺 夢月

【あらすじ】

なんかさ、俺、食人鬼になつたみたいだけど、人間に戻れんの？

正義の敵は悪なのだろうか？　しかし正義と悪など、どう判断する？　これはい

巫の後をついていく。

痛みはもうない。ここら辺は便利だな。

だからって怪我したくねえけどな。

つか、どこ行くんだ？

さっかから全く人氣がねえんだけど。こんな場所あったか？

【零君、どうかした？】

【いや、さっかから全く人氣がねえなあと思って】

【それは人避けの結界張ってるからだよ。オルトロス捕まえるのに、人間がいたら邪魔だしね】

なるほど。そりゃそうか。

しばらく歩いて、いきなり巫が手を振った。

見てみると、誰かがこっちに歩いてくる。

人に見えるけど、漂ってくる匂いから人じゃないと分かる。

それか、巫と同じ被い師とか？

近くに來ると、身長がすげえ高え。厳つい顔に、胸まで伸びた髪。少し怖え。

【やあ、すまないな。手伝わせてしまつて。こっちが、君の言つた食人鬼か？ははあ。本当にお主が使役して自我を与えた訳ではないのか？それか、誰かが使役してる可能性は？】

【違う違う。本当に使役も何もしてないよ。ちゃんと記憶も持つてるし、自我もはっきりしてるし、誰かに使役されてもない】

何言ってるのかさっぱり分かんねえ。
使役とかどういうことだ。

【あ、零君には後で詳しく説明するよ。で、こっちは雷往^{らいおう}。地獄の鬼。地獄にいる“オ二”の管理をしてるんだよ】

地獄の鬼……。だから顔が厳ついのか。

【管理をしている身でありながら逃がしてしまうとは、とんだ失態だな。まさか閻魔の鎖を噛み千切って逃げ出すとは思わなんだ。鎖の力が衰えとったんだろな。新しい閻魔の鎖を用意してきたぞ】

腰に下げていた鎖を見せる。
かなり重そう。

【食人鬼。名は？】

いきなり訊かれた。恐る恐る答える。

【狩真 零、だけど】

【零、か。我がオルトロスを押さえるがゆえ、鎖を首に巻きつけるのを頼むぞ】

思わぬ事態が浮上しました（前書き）

え？何が思わぬ事態だって？

読めば分かる。まだちょい先だな

つかさ、王族だとか血の効力だとか、俺に責任はねえぞ！

俺は一応でも被害者だ！

食人鬼なんて大っ嫌いだ！

思わぬ事態が浮上しました

巫の後をついていく。

痛みはもうない。ここら辺は便利だな。

だからって怪我したくねえけどな。

つか、どこ行くんだ？

さっかから全く人気がねえんだけど。こんな場所あったか？

【零君、どうかした？】

【いや、さっかから全く人気がねえなあと思って】

【それは人避けの結界張ってるからだよ。オルトロス捕まえるのに、人間がいたら邪魔だしね】

なるほど。そりゃそうか。

しばらく歩いて、いきなり巫が手を振った。

見てみると、誰かがこっちに歩いてくる。

人に見えるけど、漂ってくる匂いから人じゃないと分かる。

それか、巫と同じ被い師とか？

近くに來ると、身長がすげえ高え。厳つい顔に、胸まで伸びた髪。少し怖え。

【やあ、すまないな。手伝わせてしまつて。こっちが、君の言つた食人鬼か？ははあ。本当にお主が使役して自我を与えた訳ではないのか？それか、誰かが使役してる可能性は？】

【違う違う。本当に使役も何もしてないよ。ちゃんと記憶も持つてるし、自我もはっきりしてるし、誰かに使役されてもない】

何言ってるのかさっぱり分かんねえ。
使役とかどういうことだ。

【あ、零君には後で詳しく説明するよ。で、こっちは雷往^{らいおう}。地獄の鬼。地獄にいる“オ二”の管理をしてるんだよ】

地獄の鬼……。だから顔が厳ついのか。

【管理をしている身でありながら逃がしてしまうとは、とんだ失態だな。まさか閻魔の鎖を噛み千切って逃げ出すとは思わなんだ。鎖の力が衰えとったんだろな。新しい閻魔の鎖を用意してきたぞ】

腰に下げていた鎖を見せる。
かなり重そう。

【食人鬼。名は？】

いきなり訊かれた。恐る恐る答える。

【狩真 零、だけど】

【零、か。我がオルトロスを押さえるがゆえ、鎖を首に巻きつけるのを頼むぞ】マジっすか？俺がオルトロスの首に、その鎖巻きつけるんすか？

【俺が巻きつけんの？マジで？】

【制御なしで怒り狂つとるからなあ。いくら我でも、押さえつけながら両の首に鎖を巻きつけるのは難儀でなあ。なあと、巻きつける

のは簡単に済む】

だといけどな。

さつきから獣の唸り声が近づいてる気がするの、気のせいでいいのか？

【ほれ、持っておけ。あちらから来よったわ。探す手間が省けた】

鎖を渡された。見た目ほど重く感じねえ。

よく見ると細かい奇怪な文字が、びっしりと刻まれてる。

勿論、読めねえ。

心の準備が出来てねえのに、唸り声がすぐ近くに聴こえてきた。

【さあ、来よった。準備はいいか？】

全くよろしくありません。

出来れば家に帰って寝たいです。

まあ、無理だけどな。

【グヴウウウ……】

右の角から、姿を現した。

滅茶苦茶でけえ。像くらいのでかさはある。

ふたつの頭はどっちも俺達を見る。

目は真っ赤に染まって、ギラギラと襲う気満々に輝いてる。

一番不気味なのは、鬣の無数に生えた蛇だけど。

蛇も襲う気満々で目が血走ってるし。

【グルルルル……】

うわぁ……、滅茶苦茶臨戦態勢に入ってるし。

【少し下ガッテ。幻影ヲカケルカラ】

白銀が少し前に出る。白銀の目を見ると、黒く染まってる。幻影をかける時、目が黒くなるのか？

オルトロスの視線に、白銀が視線を合わせる。

その途端、オルトロスが動揺したように慌て出す。せわしなく、ふたつの頭と蛇が動き回る。

なんか、小さな虫を追い払おうとする動きに似てるな。

【ゆくぞ】

雷往が地響きをさせて、オルトロスに向かって走り出した。

でかい身体でふたつの頭と蛇を羽交い締めにする。

すげえ光景……。なんて言ってる場合じゃなかったな。

鎖を持つてオルトロスの背にまたがる。またがったはいいものの、なかなか鎖を巻けねえ。

かなり暴れて揺れるし、鬣の蛇が邪魔して鎖を首に通すのも、かなり難しい。

しかも、蛇が威嚇してくるし。

今にも噛みついてきそう。

【何をしておる。さっさと巻かんか。食人鬼が情けない】

【悪かったな！なりたくてなった訳じゃねえんだ！つい何日か前まで普通の人間だったんだ！無茶言っなー！】

自棄だ、自棄！蛇の中に手をつ突っ込んで、右の首に鎖を巻きつける。鎖を巻きつけた途端、右の首がくたつとなる。

目は開けてるけど力が出ないのか、だらんとたるそうに首を下げた。

【いつでええええっ！】

噛んだ！蛇め、噛みやがった！どんだけ噛むんだよ！

【ぐえっ】

妙な声出しちまった。だって、尻尾の蛇が首に巻きついてきたんだもん。

かなり締めつけてくる。俺が食人鬼じゃなかったら、今頃首をへし折られてあの世逝きだな。

【くそ、この、噛むなあー！】

鬣の蛇に噛まれるわ、尻尾の蛇にも噛まれるわで、腕と腹が噛み傷だらけ。

地味に痛え。

引き離そうとするけど、首に巻きついた蛇がなかなか離れねえ。胴体を掴んだら、腕をかなり深くガブリと噛まれた。

【ぎゃああああ！マジ痛え！離せって！】

引き離したら、腕の肉までごっそりと抉られた。

しかも、抉られた肉を蛇が食べたのを見ちゃった。

もう泣きそう。泣いていいですか？

【ぬっ……！？】

雷往が奇妙な声を出した。

そういえば、あんなに暴れてたのに、動きが止まってるやがると、言うより、痙攣してる……？
首に巻きついた蛇も、小刻みに震えてる。

【ガアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝッ！！】

苦しそうな声を出した途端、俺は勿論、雷往まで弾き飛ばされる。

【何が起こった！？】

【分かんねえ。なんだよ、あれ……】

目の前で信じられないことが起こってる。

オルトロスは苦しそうに息をして地面を引っ掻く。

ふたつの首の間から、ボコボコと音をさせながらみつつ目の首と蛇の鬣が生える。

そして、尻尾の蛇が二股に分裂する。

ボコボコという音が止んだ途端、鎖が弾け飛んだ。

みつつの頭で俺を見る。

その目には、自我を感じられない。オルトロスの目に、さっきまであった自我を感じられない。

目は虚ろに爛々（らんらん）と赤く輝いてる。

あの目、見覚えがある。

俺を襲ってきた、あの食人鬼の目と似てる。虚ろだけど、本能が剥き出しになった目と、そっくりだ。

【ガアアアアアアアッ！！】

みつつの頭が同時に吼える。

声が衝撃波となって、突き抜ける。

【グヴウゝウゝウゝウゝ】

空を見上げたかと思ったら、跳躍してビルの屋上に登って、そのまま姿を消した。

俺も雷往も、声が出ない。

【うゝん、困った。非常に困った。まさかだね。本当にまさかだよ】

沈黙を破ったのは、巫の緊張感の欠片もねえ声。

【なんなんだよ、あれっ！あんなことになるって聴いてねえぞ！】

【そりゃそうだよ。僕だってあんなことになると思わなかったもん。率直に言っと、零君のせいだよ】

はあ？俺のせい？

【俺は何もしてねえぞ！】

【言い方を変えると、零君に流れてる食人鬼の血のせい。蛇が零君の腕の肉を食べたでしょ。あれが原因】

あれが原因って言われても、俺には分からねえ。どうということなんだよ。

【零君に流れてる食人鬼の血の力が、オルトロスを変質させて自我のない本能だけの化け物にしたんだよ】

【巫よ。いくら食人鬼とはいえ、そこまでの力を持っているように

見えんぞ。もしや、こやつ、王族の血族に噛まれたのか？】

【そうとしか考えられない。王族の血族に噛まれたとしか。でも、余計分からなくなった。なんで、零君は王族の血族に噛まれて、自我を保っていられる？】俺を見て、真顔でそんなこと言われても、俺にそんなこと分かる訳ねえだろ。

【なあ、説明してくれよ。王族ってなんだ？】

【王族はそのままの意味だよ。食人鬼の王。気の遠くなる遙か古いにしえから存在してる、大きな力を蓄えた“オ二”】

【じゃあ、血族は？】

【血族はその王達が自分達の種族を増やすために作り出したんだよ。つまりは下僕。ほとんどの食人鬼は、血族が血族を作り出したんだ。失敗したけどね】

失敗？種族を増やせたんだから、成功じゃねえのか？
露骨に疑問が顔に出たのか、説明してくれた。

【作り出した血族に自我がなかったから、失敗。王族は本能だけの血族はいらないんだよ。欲しいのは、自我があって自分で行動出来る血族。その点、零君は彼等から見たら、かなり魅力的な存在なんだよ】いや、そんなことで魅力的って言われても、全然嬉しくねえ。めっちゃ迷惑。

【なあ、俺がその王族の血族に噛まれたとしたら、何か問題あるのか？】

【問題大有りだね。確実に零君は王族の血族に噛まれてる。もし王族が零君の存在を知ったら、確実に零君を狙ってやって来る。食人鬼の王族は、僕ら被い師にとって厄介すぎる敵なんだよ】

厄介すぎる敵って……。しかも、俺の存在を知ったら俺を狙ってやって来る？
嫌すぎる。

【もし、俺が王族に誘拐されたら、どうなるんだ？】

【王族に引き込まれることになるだろうね】

マジっすか？

うわぁ……切実に人間に戻りてえ。

【王族の中でも彼らの頂点に立つ王が、確実に零君を欲しがるよ】

そんなもんに狙われたら俺、逃げ切れる自信ねえわ。
誘拐されたらすみません。

【まあ、零君の存在をうまく隠せるかどうかな。気になるのは、零君が王族の血族に噛まれて自我を保っているのかだよ】

【そんなもん知るかよ】

【うーん、考えられるのは零君の先祖が、食人鬼の王族相手でも互角に渡り合える被い師だった、くらいしか思い付かないんだけど、先祖が妖怪退治してたとか聞いたことない？】

【いや、全くねえ】

【んー、そつかあ。調べる必要ありそうだね。もしかしたら、零君の先祖は有名な被い師で、末裔の零君まで力が衰えずに受け継がれていて、その被い師の血の力のおかげで、食人鬼の血に自我を破壊されずに済んだのかも、と思ったんだよ】【でも、そんな話マジで聞いたことねえぞ】

【うーん、結構昔に滅びたと思われてた被い師の一族の末裔が生き延びて、子孫を残したって可能性もあるんだよ。滅多にないけどね】

俺が被い師の子孫ねえ。

あり得ねえ。てか、子孫だったとしても、被い師なんてぜってえやりたくねえ。

怖いもん。

【話の途中悪いが、オルトロスのことを忘れとらんか？】

【忘れてないよ。ちゃんと考えてるよ。いい案が浮かばないだけで】

俺も考えた方がいいのか？

何も思い付かねえけど。

【うーん、零君が血の力を使えたからなあ】

【はっ？】

血の力？なんだそりゃ。

【だからね、食人鬼としての力を零君が使えたからなあって思った

んだよ】血の力？魔法だとか、そんなんか？

【血の力って例えば？】

【今のオルトロスはいわば、零君の血族だからね。オルトロスの中に存在する食人鬼の血の力を追跡して、使役出来ないかと思ったんだよ】

うん？オルトロスが血族？

まあ、確かに俺の血でああなったのは理解出来た。けど、追跡やら使役やら、意味分かんねえ。

【追跡って言うけど、巫がやった方がいいんじゃないの？それに、使役ってことは従わせるってことだろ。今まで管理してた雷徃がやった方がよくねえか？】

【確かにね、追跡も使役もある程度は出来るよ。でも、完璧じゃないんだ。悪魔で、ある程度。集中力途切れて“糸”が切れちゃえばそこで終わり。完璧に追跡して使役して、制御出来るのは零君だけなんだよ】

【……俺だけ！？】

声の上擦った。

【そう。零君だけ。追跡も使役も、本来はすごく高度な術なんだよ。“オニ”でも人間や他の種族の“オニ”を自分の血族にして、使役することが出来るのは食人鬼と吸血鬼くらいなんだよ】吸血鬼って血を吸うあの吸血鬼か？

【吸血鬼ってあの吸血鬼？】

【あの、かは知らないけど吸血鬼。吸血鬼と食人鬼はどちらも最強クラスの“オニ”で、昔っから仲が悪いんだよ】

へえ。仲が悪いねえ。

てか、食人鬼と吸血鬼、どう違うんだ？

食人鬼だって、人間の血を好んで食べるぞ。

現に俺だって、人間食べるの嫌だなあ、なんて思いながら人間の肉と血はうまくて、食べ出したら止まんねえもん。

吸血鬼は血だけを食べるのに対して、食人鬼は肉も食べたりするところが違うのか？

まあ、どうでもいいや。

【吸血鬼は血族を全て使役するのに対して、食人鬼は自我のある血族は使役出来ないんだよ。使役出来るのは、自我のない血族だけ。だから、いくら王族でも自我のある零君は使役出来ないって訳】

つまりオルトロスは今、俺の血族な訳で自我がないってことは、俺でも使役出来るってことか？【なあ、追跡とか使役って、どうやるの？】

そう言ったら、珍しく、と言うか初めて困った顔をした。

【こればかりはねえ、教えられないんだよ。教えて、出来るものじゃないんだよ。零君が、自分で感覚を覚えるしかないんだ】

はい？なんですと？感覚で覚えるしかない？

いやいやいや、それこそ無理だろ。

やり方も分かんねえのに！

【やり方くらい教えるよ】

【ん、敢えて言うなら、追跡は自分と同じ力の波動を探るんだよ。使役は、自分が主人だってことを示したらいいだけ】

悪い、余計分かんなくなっただわ。

【まさか、今から追跡すんのか？】

【ん、今からはちょっと無理かな。結界を張るために使った霊符の効果が、もう少ししたら切れるから。まさか、こんなことになるとは思わなかったから、一番力の弱い霊符を使っちゃったんだ】

つまり、人避けの効果がなくなるから、人が集まってくるって訳だな。

今この瞬間、野放しになってるオルトロスは人を襲ってんのか？「あー、疲れた」

マジで疲れた。あんなことになるなんて思わねえもん。

しかも王族がどうかさあ。

俺、ホントにどうなんのかなあ。

ちなみに雷往は地獄に帰った。

びっくりだよ。どこからともなく槍を出したと思ったら、地面に槍を突き刺して、槍の先から黒い霧もやのような空間が現れたんだよ。

【ではな】だけ言って黒い空間に飛び込んで、雷往の姿が消えた瞬間に黒い空間も一瞬で消えた。びっくりだ。

【僕ガワザワザ幻影力ケタノモ、無駄ニナツチャッタネ】

う、それを言うなよ。

【そういえば、どんな幻影かけたんだよ】

【無数ノ百足ガ身体中ニ群ガツテ、身体中ヲ噛マレル幻影】

百足？あの、足が百本近くある、噛まれると痛いあの百足？
地味に怖えよ！【だから必死に振り払おうとしてたんだな】

【マア、オルトロス八頭弱イカラネ。アンナ簡単ナ幻影ニモスグ引
ッカカルンダヨ】

【俺も下手したら引ッかかりそうだけどな】

なんかマジで引ッかかりそうだ。

【幻影、カケテアゲヨウカ？】

ニヤリ、と悪魔の笑みを浮かべて俺を見た。
嫌です。そんな怖い思いしたくありません。
本当に死ぬ。

【お前、俺を殺す気か？】

【嘘ダヨ。零ガ怖ガリナノ知ッテル】

【うん。マジでやめて】

いきなり、窓がガラリツと勢いよく開いた。

巫だ。窓壊す気が、この野郎。

【全く、どこ行ってくれたのかな、オルトロスは】

【やっぱり見つからなかったのか？】

【うん。見つからなかった】

あの後、巫だけオルトロスを探してどっか行ってたんだよ。
見つからなかったってことは、俺が探さなきゃいけないんだな。

【グヴヴウウウウ】

犬の唸り声。走る音。そして、

「いやああああ！」

女の叫び声。何かに追われてる。

みつつの頭を持ち、蛇の鬣を持った怪物に。

目に自我はなく、虚ろに赤く、爛々と輝いてる。

怪物が女に飛びかかる。

女は押し倒され、必死に抵抗するが、全くの無駄。

怪物は無駄な抵抗を続ける女を嘲笑うかのように、足で突つつく。

そしてみつつの頭で、女にかぶり付く。

一口で、女の身体が肉片の一欠片もなく、少量の血を残しただけで
跡形もなく食われる。

【グウ、ウ、ウウウウ】

まだ食い足りないというように唸る。
みつつの頭が左を向く。

女が三人、歩いている。」「――！」

びっくりして飛び起きる。

今の夢、間違いなくオルトロスだった。

あれが現実なら、あの女、食われたってことだよな。

あの三人も。

必死に逃げたけど、三人共最後には食われた。

三人目が食われたところで、目が覚めた。

巫に言った方がいいよな。

布団を捲る。

何俺の足に腕を巻きつけて、気持ちよさそうに寝てんだよ。

なんかム力ついたから、腹を蹴って起こす。

「ぶおふああつ！」

奇妙な声を出して起きた。

「零君酷い……。食人鬼の強い力で蹴って起こすなんて……」

「黙れ変態。そんなことより、話したいことがあんだよ。オルトロスのことで」

「え？オルトロスのことで？」

反応早え。さっきまでのだるそうなのはどこいった。

「さ、話して」「へえ、夢ねえ……。夢かあ……」

夢の内容を話終える。

夢ねえ……。ってしみじみと言うことか？

「零君それ、夢じゃないよ。現実」

「やっぱりか……」

頭を掻く。やっぱりあの四人、食われたのか。
野放しなんだから、きっと食われた人数増えてやがるだろうな。

「それにしても、零君呑み込み早いねえ」

「早い？何が？」

呑み込みが早い？夢見ただけだぞ。

「オルトロスを夢で見るのは、零君とオルトロスの感覚が繋がってるからなんだよ。零君は無意識の内に、オルトロスと感覚を繋がたって訳。今も繋がってる筈だから、意識的に感覚を重ねられれば、オルトロスの居場所が突き止められる」

俺、責任重大じゃん。「でさ、感覚を重ねるってさ、どうやんの？」

それが分かんねえと話になんねえぞ。

「えっとね、自分の中にある、自分のものとは違う感覚の系を見つけて、それを辿っていくって感じかな」

言ってることは分かる。けど、出来るかどうか別問題だぞ。

自分のものとは違う感覚の系を見つける？

集中すれば見つけられんのか？

「まさか、それを今からやれって言うんじゃないやねえだろな？」

「朝や昼より、食人鬼にとって力を最も出しやすい夜にやった方がいいよ。だから、今はまだいい」

「ふーん。まあ、確かに夜が一番気分いいもんな」

夜だとホントに不思議なくらい気分がいい。

化け物の相手をさせられるのを除いたら、だけどな。

そんなことより、今日は昨日以上に大変そうだよなあ。

【お兄さん、大変だね】

奈央人がひよつこりと顔を出してきた。

【ホント大変だよ】

猫の手も借りたいって、こういうのを言うんだろな。あの後、とりあえず話は終わって、大学に来て、さっきテストが終わった。

「零、大丈夫だったか？」

「毎回毎回、そんなこと訊くなよ。祐司、お前俺がそんなに出来ない奴だと思ってるのか？」

「少し」

ショックだ。十のダメージを受けた。

それより、右目がずっとおかしいんだよな。

痒いような痛いような、よく分かんねえ感覚がずつとしてんだよ。

さつきから、変な感覚が強くなってる気がする。
右目を擦る。

「零、さつきから右目擦ってばっかだけど、どうかしたのか？」

「いや、痒いだけ。今日ちょっと用事があるから、先帰るわ」

別に大して用事はないけど、右目の異常が気になる。
巫に訊いてみるか。

「分かった。また明日な」

「おー、じゃあな」

祐司に手を振ってさつきと学校を出る。
なんだか右目の変な感覚が強くなってきた。

「つつ……」

痛くねえのに、痛い。よく分かんねえ。
なんだこれ。

右目を掌で強く押さえて、フェンスにもたれ掛かる。

【お兄さん、大丈夫？】

奈央人が心配そうに訊いてくる。

【大丈夫……。つつ……】

更に右目がおかしな感覚に襲われる。

これ以上は限界だ、と思った時、右目に、今まで見ていた景色とは違う景色が、写った。右目に、何か風景が写る。目を閉じて、掌で押さえてんだから、見えるはずがない。なのに、右目は確かに風景を見てる。ここじゃないどこかの。

【グウウウウウ……】

唸り声が聴こえる。獣の唸り声。

目の前には人間の残骸。腕や内臓が転がってる。

視線が残骸に近づく。腕を舌で掬い取って、口に運ぶ。

まさか、これ、オルトロスの目線か？

だとしたら、納得がいく。

じゃあ、今、オルトロスが見ているものを、オルトロスの目を通して俺が見てるのか？

オルトロスの感覚が、俺と繋がってるってことか？

あ、やべえ。景色が薄れてきた。

集中しようとしたけど、景色が消える。

俺の集中が足りなかったのか……。

とりあえず帰って、巫に訊こう。家に着く。

驚きの光景が広がってるし。

【雷往、なんでお前が俺ん家にいんの？】

そつ、地獄の鬼であり、地獄に存在する“オニ”の管理者、雷往が堂々と座ってやがる。

てか、窮屈そう。

身長二メートル以上は確実にあるもんな。

そして見事な筋肉。暑苦しい。

そういえば角ってどこにあるんだ？
もっさりした髪に隠れてんのか？

【おお、零。待っておったぞ】

【待ってたって、巫から訊いたのか？】

【そんなもの、力の残り香を辿っていけば、訊かんでも分かるわ】
そういうもんなのか？全く分かんねえんだけど。

【で、俺になんか用？】

【ふむ。巫には知らせたのだから、オルトロスのことだ】

まあ、それしかねえよなあ。

てか、オルトロスがどうしたんだ？
見つかったとか？

【我ら地獄の最高管理責任者が集まり、話し合ったのだが、今のオルトロスは我らでは手に負えん。地獄で管理するのは無理だという判断が成された。よってオルトロスを処分せよ、との決定が成された】

つまり、オルトロスを捕獲しないで殺すってことか？【オルトロスを殺すのか？】

【まあ、そういうことになるう】

確かに、もう何人も人間が食べられてて、地獄でも管理出来ないん

じゃ仕方ねえのか。
なんか、可哀想なことしたなあ。

【そういえば、巫は？】

【巫なら、オルトロスを搜索しておるよ。なかなか残り香を掴めんようだがな。元より、食人鬼の残り香は掴みにくいからのう。自我のない血族なら、余計掴みにくいだろうて】

【へえ……】

その時、窓がバァンツと開いた。
勿論、巫だ。

窓から入ってくるのは諦めた。何度言っても無駄だ。
けど、窓を壊す勢いで開けるのはやめてくれ。
壊したから、問答無用で修理代払わせるからな。

「全く、わんこのくせに手間取らせてくれるよ。うるちよると」

オルトロスをわんこ呼ばわり。
巫の被い師の腕は一流らしい。
全く伝わってこねえけど。

「なあ巫。右目にオルトロスが見たかもしれねえ景色が写ったんだけど」

全員が俺を見る。なんか怖え。

「なんだって？」

「だから、右目にオルトロスが見たかもしねえ景色が写ったんだよ」

「本当に？」

「嘘ついてどうすんだよ」

「だね。そっかあ。なるほどねえ。それは好都合。零君、オルトロスを探して」【よし、日も暮れる頃だし、学校に行こう】

展開早えな！もう行くのかよ！

俺、全く心の準備出来てないんですけど！？

【相変わらずせっかちなことよ】

厳つい顔が苦笑いしてる。

【そうと決まれば白銀も呼ば】

そう言う^三と懷から杖を出して息を吹き掛ける。
でかくな^三った杖を床に立て、とんとと鳴らす。

【我が契約者、白銀をこの場に召喚せよ！】

巫が叫んだ瞬間、杖の先から魔方陣（？）が白い光を発しながら床一面に広がる。

人の形をした白い光が現れる。

光が収まった瞬間、白銀がそこにいた。

不機嫌そうな顔をしてる。

【ナンデ毎回毎回、食事シテル時二喚ブカナ？イクラ君ト契約シテルカラッテ、限界ツテモノガアルヨ？】

かなりご立腹らしい。瞳が黒くなりかけてる。いつそのこと幻影かけちゃえばいいのに。本人には言えねえけど。

【さて、行きますか】

巫がまた杖を鳴らす。

【術者、以下三名転移させよ！】

魔方阵がまた現れる。その途端、視界が真っ白に覆われた。【うわっ……！？】

視界が真っ白に覆われたと思ったら、浮遊感に襲われる。

そして、引っ張られるような感覚。

しばらくして引っ張られるような感覚がなくなり、足に何か触れる。目を開けると、目の前に小学校。

周りを見ると、巫も白銀も雷徃もちゃんという。

てか、着いた先がなんでグラウンドなんだ？

オルトロスは屋上にいんのに。

【零君、この学校で間違いないよね？】

【間違いねえけど、なんでグラウンドなんだ？】

【だって、いきなり屋上に行ったらオルトロス暴れちゃうでしょ？まだ教師や生徒が残ってるだろうし、被害を出さないように準備し

ないと】

なるほどな。確かに。

【てか、巫って魔法とか使えたんだな】

そう言ったら、巫が不思議そうな目で見てきた。

【魔法？ああ、さっきの術式のこと？あれは魔法みたいに見えるけど、魔法じゃないんだよ。また後で詳しく教えてあげる】

教えてくれんのか。魔法とか興味あるな。教えてもらうとするか。

【さて、この学校を隔離しようか】

【隔離？】

【術式でオルトロスが逃げないように隔離するんだよ。後、学校に残ってる人間を眠らせて、建物の中を指定隔離する】

オルトロスが逃げないように隔離するのは分かる。

指定隔離ってどういうことだ。

眠らせる必要があんのか？【なあ、指定隔離ってなんだ？】

【指定隔離は、隔離した空間の中に、更に隔離した空間を作ることだよ。指定隔離した空間には許可なく入り込めない。オルトロスが学校の中に入って暴れないとも限らないからね。だから、指定隔離して安全な空間を作る訳】

へえ、なるほどな。確かに、学校の中に入って暴れて、人間を襲う

かもしれないもんな。
てか、その可能性大か。

【じゃあさ、眠らせるのはなんで？】

【そりゃあ勿論、僕達のことを見られないためだよ】

あれ？安全のためじゃねえのか？

【“オニ”や僕達被い師の存在は、普通の人間には知られちゃ駄目なんだよ。知られた場合は記憶を消すんだ。なんでかは後で教えてあげる】

まあ、今はオルトロスが先か。

俺、うまくやれんのかなあ……。

巫が杖を地面に突き立てる。

【これより一切の立ち入り禁ずる。人々の記憶から一時的に消去せよ。隔離！】

杖の先から魔方陣が一気に広がる。

学校の敷地を覆い尽くすくらい巨大だ。

そして、白い光が学校の敷地に反って空に向かって伸びる。

更に巫が呪文（？）を唱える。

【建物内に限り、更に許可なく立ち入りを禁ずる。指定隔離せよ。術者、以下三名以外にこの敷地に存在する者を眠らせよ】白い光が学校を包む込む。そして一瞬で白い光は消えた。

【術式完了。これでいくら暴れても大丈夫だよ】

暴れてもって、まあ、暴れてくれそうだなもんな。
捕まえるの大変そうだな。

【僕、戦闘向キジャナイノニ】

白銀が小さい声でボソツと呟く。
御愁傷様だな。

【ふむ。大いに暴れるとするか】

雷往が暴れたら学校が崩壊しそうな気がする。

【ちなみに僕はオルトロスに施す術式の準備するから。零君達には準備が終わるまで、オルトロスを足止めしといて欲しいんだ】

【分かった】

とりあえず、痛い目合う覚悟で行くしかねえな。
屋上を見上げると、かなりご立腹そうなオルトロスが、唸り声を上げながら俺達を睨んでる。

屋上から俺達目掛けて、飛び降りてきた。オルトロスが飛び下りて来て、皆その場から飛んで避ける。
すごい地響きと砂埃が舞い上がる。

【ガアアアアアアアアッ！】

みつつの頭が吼える。声が衝撃波となって飛ばされそうになる。
衝撃波に耐えきれなかったガラス窓が、バァンッ！、と音を立てて砕ける。

俺を見る。吼えながら俺に向かって来る。
滅茶苦茶怖え。でも受け止めるしかねえ！
来いやあああああ！

ドンツと俺に盛大に体当たりしてくる。
かなり身体にびりびり来た。
けど、なんとか踏ん張って、オルトロスを受け止める。
真ん中の頭と蛇をがっしりと抱える。

【おりゃあああああ！】

渾身の力を込めてオルトロスをぶん投げる。
ホントに投げれちゃった。
あ、やべえ。学校に向かって投げちゃったよ！
あんなのぶつかったら大変じゃねえか！

【ギャンツ！】

バチッ！と音がしたと思ったら、オルトロスが学校の壁から弾き飛ばされる
弾き飛ばされた所をよく見てみると、壁がゆらゆらと揺れてる。
結界みたいなやつか？

【グウゝウゝウゝウゝウゝ】

オルトロスが立ち上がる。滅茶苦茶怒ってる。

【零、下がっておれ！】

雷往が俺に向かって叫んできた。
見ると槍を両手で掴んで、地面に突き刺そうとしている。

槍なんて持ってたっけ？

地面に槍を突き刺す。突き刺した瞬間、地面が割れた。地面が一直線に割れる。

【おわっ！？】

地割れが俺にも向かってきた。

雷往の奴、俺まで地割れに落とす気か！？

地割れから何かが這い上がってくる。

なんだ？

這い上がってくる何かが見えた途端、鳥肌が立った。

だって、ちっちゃなミイラみたいな化け物が、わんさかと地割れから這い上がってきてんだぜ！？

ほとんど骨だけの奴がいれば、腐りかけの奴もいる。

ものすごい気持ち悪いし、怖えよ。

ぞわあって一気に鳥肌立つちゃったよ。

ミイラみたいな化け物は地割れを登りきると、オルトロスに群がる。身体を這い上がり、身体に噛みつく。

そりゃもうガジガジと。

当然、オルトロスは痛がって化け物を払い落とす。

けど、また群がる。

あの光景嫌すぎる。

【雷往、なんだよあれ！？】

【地獄の餓鬼共だ。さぞかし餓えておるだろうて、オルトロスに食いつくのをやめはせんぞ】

あんなのに食われるなんて嫌すぎる。死んでも嫌だ。
あれ？白銀どこ行っただ？

見渡すと、いつの間にかオルトロスの背中に乗ってる。

てか、大丈夫なのか？

不思議なことに、餓鬼はオルトロスだけに食いついて、白銀には群がらない。

地獄に住む“オニ”だけに食いつくのか？

【思エバサ、君サエ逃ゲタリシナキヤ、僕ガコウイウコトシナクテモヨカッタダヨネ】

白銀の瞳が黒くなっていく。

幻影をかける気だな。

てか白銀さん、かなり凶悪な笑顔を浮かべていて怖いです。白銀とオルトロスの視線が一瞬交差する。

目が合った瞬間、オルトロスが怯えたように吼えて、暴れ出す。

白銀は素早くオルトロスから飛び下りる。

どんな幻影見せられてんだ？

まあ、ろくな幻影じゃねえだろうな。

オルトロスは何かから逃げようとして、けどその何かに阻まれて逃げ出せずにいるように見える。

めっちゃ怯えてる。

切なげにキューンッて言ってるよ。

てか、いつの間にか地割れが閉じて餓鬼もいなくなってる。

雷往が何かしたのか？

いきなり地響きがした。

雷往がオルトロスに向かって走るのが原因か。

地響きがするって、雷往というか、地獄の鬼ってどんだけ体重あんの？

雷往がオルトロスの身体をがっしりと抱え上げて、地面に叩きつけた。

ギャンッて断末魔みたいな声を上げてるよ。

ひとつ思う。餓鬼なんか呼ばなくても、雷往が戦えば一瞬で終わるんじゃない？

オルトロスが吼える。

【ぬおっ！？】

不意をつかれたのか、雷往が吹っ飛ばされる。

そして、オルトロスが走る。巫に向かつて。

かなりヤバイ。巫は術式とかの準備で今動けないんじゃない、オルトロスに殺られちゃうじゃん！

オルトロスを追いかけるけど、間に合わねえ！

オルトロスが巫を切り裂こうと、爪を振り上げる。

【止め。拘束せよ】

巫がボソツと呟く。

その瞬間、バヂツという音と共に爪が弾かれ、オルトロスの動きが止まる。

巫がふふん、と不敵な笑みを浮かべてる。

【わんごごときが、僕を食べようなんて一万年早い。百戦錬磨のこの僕をなめるなよ】すげえ。オルトロスの動きが完全に止まってるけどさ、なめるなよって、そのふざけた性格してたらいくらすぐくても、全然伝わってこねえんだけど。

【さてさて、術式完了。発動せよ】

バチンツと音が響く。オルトロスの足下に、白い光を放ちながら巨大な魔方陣が現れる。

【縛れ】

魔方阵から鎖が飛び出して、オルトロスに巻き付く。
暴れて千切ろうとするけど、びくともしねえ。

【縛れ。拘束せよ。魔力を拘束し、対象に自我を取り戻せ。封印！】

瞬間、一際強い光が視界を包む。視界が白い光に埋め尽くされる。
白い稲妻が縦横無尽に飛び散る。

【ガアアアアアアアアアアっ！】

オルトロスが苦しそうな声を上げる。
飛び散る稲妻が一層激しくなって、オルトロスの姿が少しずつ小さ
くなっていく。

オルトロスの姿が小さくなるにつれ、稲妻も収まっていく。
鎖が魔方阵から切れたかと思うと、オルトロスの身体に巻き付いて
すうっと透明になって見えなくなった。

最後に凄まじい光を放って、魔方阵が消える。

【……………】

魔方阵が消えた後に残されてるのは、ミニチュアダックスフントく
らいの大きさの……オルトロス？

オルトロス……だよな。頭みつつあるし、鬣の蛇があるし。
けど、相変わらず唸ってる。

【なあ巫、どうすりゃいい訳？】

【ん？手懷けて】

【どうすりゃいいんだ？】

【おすわりって言うてみれば？】

ふざけてんのか？ふざけてやがるのか？

そうか、ふざけてんだな。

ぶっ飛ばしてえ。でも、俺も鎖で縛られそうだな。

ちっ、やめとくか。

それよりも手懐けるのが先だよ。

癪だけど、いい方法が思いつかねえ。

仕方ねえ。

【おすわり！】

言っちゃった。だって仕方ねえじゃん。

いい方法思いつかねえんだもん。

オルトロスが俺を見て、ちよこんと地面に座った。座ったよ。素直に座ったよ。

試しに近づいてしゃがんで、オルトロスの目の前に手を出す。

【お手】

ちっちゃい右足を俺の手に乗せる。

巫を見る。

【うん。術式成功だね。もう大丈夫だよ】

【てかさ、何したんだ？】

【魔力封印の術式を施したんだよ。大きすぎる力のせいで自我をな

くしたからね。だから、その力を抑えて自我を呼び戻したって訳】

【へえ……】

オルトロスが足にすり寄ってくる。

頭を撫でてやると、気持ちよさそうな顔をする。

犬だ。普通の犬だ。オルトロスが可愛く見えてきた。

【さて、とオルトロスが壊した窓直さなないとね】

そういえば、盛大に全部の窓が割れたんもんなあ。

直せんのか？まあ、窓ガラス直すくらい簡単なのかも。

あんなもん見せられたしな。

巫が杖をとんと鳴らす。

【修復せよ。時間を戻せ】

学校のすぐ上に、空中に魔方陣が現れる。

魔方陣が内側と外側で、逆方向に回転し始める。

回転し始めた途端に、割れたガラスがふわふわと浮き始めた。

浮いたガラスが次々と窓枠に嵌まっていき、亀裂が塞がっていく。

最後の窓が直つたと同時に魔方陣は回転をやめ、ふっと消えた。

めっちゃすげえ。窓ガラス完璧に直ってるよ。

【修復完了。一部の術式を解除】

学校を囲んでいた白い光が跡形もなく消える。

【さて、行こうか】

【おう。さつきみたいに術式ってやつで帰らねえの？】

その方が楽そうなのに。

【やだ。霊力消費する。めんどくさい】

めんどくさいのか。歩く方がめんどくさそうだけだな。

何はともあれ、一件落着か？けたたましい目覚ましの音で目が覚める。

腹が、重い。

見ると、オルトロスが俺の腹の上で気持ちよさそうに寝てる。

地味に重い。小さいからといっても、体重はそのまんまだからな。

今は魔力封印で魔力を制限されていて、魔力の量に合った姿になってるらしい。

でも体重は魔力に関係ないからそのまんま。

見た目は小さいけど、体重だけは元のままな訳だ。

所謂、質量保存の法則ってやつだな。

横を見ると、相変わらず巫という名の変態野郎が腰に腕を巻きつけて寝てやがる。

オルトロスを腹から退けて、巫を蹴って離す。

「ぶあはっ！」

奇妙な声を上げてやがるけど、気にしない。

オルトロスが起きて、とろんとした目で欠伸をする。

こうして見ると、普通の犬だよなあ。

なんとなく立ち上がって、カーテンを開ける。

で、窓を開けて空を見上げる。

そしたら――

「なんだ、あれ……？」

「零君？どうしたの？」

「巫、あれ見てくれ」

俺が指を指した方向に、視線を向ける。

「あれは……まさか……」

巫が驚いてる。なんか嫌な予感。

「どうやら一難去ってまた一難、みたいだよ。今回の方が結構大変になるだろうね」

マジっすか？うつわ、やだなあ。

空をもう一度見上げる。

空には不気味な、ブラックホールのような漆黒の空間が、広がってる。

異世界と遭遇しました？

「今回の章はエブリスタのクリエイター仲間しろさんの小説、魔法の調べとのコラボだってよ」

【魔法の調べってサ、アノ人気ファンタジー作品ダヨネ？】

「そうそう。カテゴリー十二位に入ったようなね」

「そんな人気作品とよくコラボしようと思ったよな、作者」

【マア、イインジャナイ？】

「それはそうと、話脱線しまくる気がする」

「……………」

【……………】

「えっと、簡単なあらすじ言った方がいいのか？」

「あらすじ？あらすじは、魔法学園アルビオンを舞台にした魔法学園系ちよいギャグ青春ファンタジーってとこだね」

「滅茶苦茶簡単にまとめたな、と言うよりパクったな」

「いいじゃん。どういう物語かは原作を読めば分かる」

「まあ、そうだけどさ。あ、言い忘れるとこだった。魔法の調べの

本編には関わりはないから、注意してくれ」

「それじゃ、始まるよ」

- ハルの目線 -

「クーレ！起きろ、クーレ！」

大声を出してドアを何回もノックしてるのに、部屋の主は出てこない。

先に行ったのか？

いや、あり得ねえな。あいつが先に行ってるなんてあり得ねえ。

「クーレ！授業に遅れちまうぞ！」

カチャリ、と音がした。やっと起きたか。

「ハルちゃん……おはようございましゅ……」

寝惚けてやがる。呂律が回ってない。

しかも寝間着はくまさん。

それに萌えてしまった俺は、駄目な奴か？

「早く着替えろ。授業遅れるぞ」

「ふあい……着替えてきまふ……」

ドアを閉めてしばらく待つ。

あいつ、二度寝してないよな？

不安になつてきた。

「クーレ！」

ドアに近づく。その瞬間、ドアが開いた。
鼻にドアの角がぶつかる。
地味に痛え……。

「ハルさん！？大丈夫ですか？」

クーレがおろおろと俺の鼻を触ってくる。
痛いからやめてくれ。

「大丈夫……。ちょっと痛いだけだから。行こうか」

「はい……」

ちよつと落ち込んで。まあいいか。いつものことだ。
教室に向かう。
その途中でクーレがふと窓の外を見る。

「ハルさん、あれ、見てください」

「ん？」

言われて窓の外を見る。

「なんだあれ？」

空に黒い雲みたいなのが、拡がってる。

いきなり雲が、バチバチといいながら拡がり始めた。

「先生、呼んだ方がよくないですか？」

「うん。そうだよな」

クーレに言われて先生に呼びに行こうとした瞬間、雲みたいなものから光が発せられた。

視界が、真っ黒に染め上げられる。今日はテスト最終日。で、さっきテストが終わった。

なんとなく椅子にもたれて天井を見上げる。
にゅっと、天井から何か出てきた。

「……………!!」

よく見たら奈央人だ。そうだった。空にまだブラックホールみたいなやつがあるのか、見に行ってもらってたんだった。
思わず叫び出すとこだったよ。あぶねえ。

【奈央人、どうだった？】

【まだあったよ。なんかね、少し大きくなってる気がする】

奈央人が俺の肩にじゃれついてくる。

あの後、巫にブラックホールみたいな……めんどくせえや、ブラックホールでいいよな。

作者が打つ時めんどくせえって言ってたし。

とにかく巫に訊いたら、また後で教えてあげるって言って、どっか

行っただよな。

大方、ブラックホールを調べてるんだろうけど。

重い鞆を肩に担ぐ。

何故かオルトロスが鞆に入っていて、学校まで付いてきやがった。

どつりで鞆が重かった訳だよ。

ちなみに今は、鞆からみつつの頭を出して周りを興味深そうに見る。さて、帰るか。「祐司、帰ろうぜ」

「悪い。先に帰つといてくれ。やることがあるんだ」

「あいよ。じゃあ、先に帰るな」

「おー、じゃあな」

お互い手を振って別れる。

これからどうすっかな。

とりあえず家に帰ることにする。

空を見上げると、相変わらずブラックホールが浮かんでる。不気味に中心に向かって回転を繰り返す。

確かに奈央人の言う通り、一回りでかくなつてやがる。

空にあんなものが浮かんでて、騒ぎが起らないことを考えると、人間には見えてないんだな。

妙に騒がしいのは、“オニ”達が騒いでるってことか？

空気がざわざわとして、落ち着かねえ。

どこからともなく【珍事じゃ。大変じゃ。時空が開く。皆の者、備えよ】って声が聴こえたし。
なんだっただ、あれは？

その後に【本当か？】【それは大変だ】【俺は隠れるぞ。未知の“オニ”と戦いたくねえ】【今回はどんな“オニ”だろうな】って声が次々と聴こえてきたんだ。

全く意味が分からねえ。帰る途中、白銀と会った。花の匂いを嗅いでる辺り、多分食事中だな。

【ア、零】

【おー、食事中か？】

【ウン。今日ハユツクリ食事出来タ】

満足そうな笑顔だ。まあ、最近巫に色々と邪魔されてるみたいだしな。

そうだ。あの変な声のこと、訊いてみるか。

【なあ、今日さ、変な声聴こえたんだけど、白銀は聴いたか？】

【声？モシカシテ珍事ジャ、大変ジャツテ言ッテタ？】

なんだ。やっぱり白銀も聴いたのか。

【言ッてた】

【ソレハネ、妖精や精霊ノ《声》ダヨ】

【妖精や精霊？】

【全テノ“オニ”ニ関ワルヨウナ異常事態ガ起コル時、妖精や精霊ガ《声》ヲ風ニ乗セテ知ラセテクレルンダヨ。危機ガ迫ッテルコト

ヲ

空に浮かんでるブラックホールを見上げる。

【やっぱ、あれが原因なのか？】

【ウン】

【あれはなんなんだ？】

【アレハネ、《亀裂》ッテ呼バレテル。本来閉ジテナキヤイケナイ、異世界ト異世界ヲ繋グ時空ヲ開イテシマウダヨ】異世界と異世界を繋ぐ？なんかめっちゃ壮大な話だな。

【その時空とやらが開いて、何が問題なんだ？】

【異世界ニシカ存在シナイ“オニ”ガ、コノ世界ニ流レ来ルコトニナルンダヨ。異世界ニハ異世界ニシカ存在シナイ“オニ”ガ沢山イルンダヨ。害ノナイ“オニ”ナライイケド、危険ナ“オニ”ノ方が多インダ。危険ナ“オニ”ガ暴レタラ、ドウナルト思ウ？】

そりゃあ、大変だよな。

中には、太刀打ち出来ない“オニ”がいるってことか？だから大変なのか？

【厄介ナノハ、《亀裂》ガ生マレタノガココダゲジャナイッテコト】

【は？ここだけじゃねえのか？】

つまり、あれがいくつもあるってことか？

【ココダケジャナイヨ。日本全国、何十カ所二渡ッテ同時二《亀裂》ガ生マレテル。シカモ、《亀裂》ヒトツヒトツガ違ウ異世界ト通ジテルカラ、ドンナモノガ来ルカ分カラナイ】

すいません。壮大すぎて理解が追いつきません。

【不思議ナコトニネ、コノ世界カラ“オニ”ガ異世界ニ行クコトハナインダ。イツモ、異世界カラ“オニ”ヤ色ンナモノガコノ世界ニ来ルンダヨ】

つまり、あの《亀裂》とかいうやつは日本全国何十カ所の空に浮かんで、しかもあれは異世界に通じてて、異世界から“オニ”かなんか分かんねえけど、何か来るってことだよな？

もしかしたら、とんでもねえもんが来るかもしれないねえと。そりゃ大変だわな。

でも、この世界から異世界に引き摺り込まれることはねえと。

不思議だ。【“オニ”が来るとして、来た“オニ”は抜うのか？】

【抜ウ場合モアルシ、抜ワナイ場合モアル。害ノナイ“オニ”ヤ人間ハ保護シテ、《亀裂》ガマタ開イタ時ニ返スンダヨ】

《亀裂》がまた開いた時？どういう意味だ？

【《亀裂》がまた開いた時って？】

【《亀裂》ハネ、“オニ”ヤ人間ヲ引キ込ンダラ一度閉ジルンダヨソシテ、三日後ニ開イテスグ閉ジルンダ】

うーん……理解出来たような出来てないような…。

ひとつだけ分かるのは、俺も大変な目に合わされるってことぐらいだな。

【でもさ、中には返すの失敗した“オニ”だっているじゃねえの？】

【イルヨ。タクサン。中二ハコノ世界ニ定着スル“オニ”ダッテル。食人鬼ダッテ、元々ハ異世界の“オニ”ナンダヨ】

衝撃事実だ。食人鬼は異世界の“オニ”でした発言。

【え？マジ？そうなのか？】

【ウン。ダカラ、コノ世界デ種族増ヤソウトシテ、失敗シタんだヨ。コノ世界ノ人間ハ、食人鬼ノ毒ニハ耐エラレナカタカラ】

なるほど。まさかの異世界で種族増やしよう作戦だった訳だな。で、俺はそれに巻き込まれたと。

なんて迷惑な奴らだ。あの後、白銀と別れて帰ってきた。まだ散歩しとくらしい。

オルトロスを鞆から出す。

足にじゃれついてきた。

部屋に入ってびっくりした。

……………掌サイズのちっせえジジイがテーブルに堂々と座ってる。立派（？）な真っ白で長い髭が印象的だ。髪の毛も真っ白で長い。しかも、背中にトンボみたいな羽根が生えてるし。

【零君、おかえり】

【ただいま……………って、誰？】

【妖精の長の齊羅魏^{さいらい}。訊きたいことがあったから、来てもらったんだ】

【へえ……】

齊羅魏とやらが俺を見る。

目力が半端ねえ。ちよつと怖いんですけど。

【お主が、零か？】

【そう……ですけど】

めっちゃめっちゃ嚴つい声だし。

思わず敬語だよ。

この声、どっかで聞いたな。

あ、【珍事じゃ。大変じゃ】って言ってたあの声か。

【ふむ。《亀裂》は全ての“オ二”に関わることじゃ。わしらも戦うがゆえ、お主も戦ってくれ】

齊羅魏が頭を下げた。えっと……俺はどう反応すれば？

【でさ、齊羅魏。《亀裂》はいつ開く？】

巫が緊張感の欠片もない声で遮った。

ある意味すげえ。

齊羅魏が座り直して、巫に向き直る。

【《亀裂》は午後九時に一斉に開く。今回は異常じゃ。空に開いて

いるものだけではない。山にも《亀裂》がいくつも開いておる。今
回ばかりは被い師も“オ二”も関係なく、戦わねばならぬだろう。
いがみ合っておる場合ではない。協力せねば、《亀裂》に滅ぼされ
ることになるうぞ】話がよいよ壮大になってきた。
もう理解放棄しちゃっていいかな。

【そこまで大変なのか。うーん、想定外だね】

【時空間が思った以上に不安定になっておる。小さな《亀裂》は我
が一族を総動員して修復しておるが、追いつかん。これ以上開くこ
とがあれば、時空間に引き摺り込まれることは免れんぞ】

時空間に引き摺り込まれる……？

全く理解が追いつかねえ。

誰か簡単に説明してくんねえかな。

【そこまでとはね。いやはや。僕らも《亀裂》の修復を最優先した
方がよさそうだね。他の一族にも呼び掛けて、被い師に片っ端から
声をかけてくれる？】

【ふむ。分かった。では、我は行く】

音もなく齊羅巍の姿が消える。

消えた瞬間に淡い水色の粉みたいな光が散ったけど、それもすぐ消
えた。

「さてつと零君、これから忙しくなるから、覚悟しといとね」

分かってますよ。とんでもねえ目に合わされることくらい分かって
ますよ。

「なあ、時空間に引き摺り込まれるとか言ってたけど、どういう意味？」

「《亀裂》はね、時空間が不安定になることによって生まれるんだよ。余りに不安定になりすぎると空間を保つために、どこかの空間から世界を引き摺り込み取り込むんだ」

「……つまり？」

「引き摺り込まれたら時空間の一部になるから、消滅するってこと。分かりやすく言うと、日本という国がなくなるってこと。今、時空間が思った以上に不安定なんだ。引き摺り込まれる一歩出前」

それ、大変どころの話じゃねえじゃん。巫はものすごい軽く言うけど、“オニ”だけじゃなくて日本という国そのものの危機じゃねえか。

そんなん聴いたら、やるしかねえじゃん。

「で、俺は何すりゃいい訳？」

「とりあえず、これ着けて」

懐から銀色のブレスレットみたいな物を取り出す。

「左手出して」

左手を出す。俺の腕にブレスレットを嵌める。

カシンツと音がして、腕にぴったりブレスレットが嵌まる。

外そうとしても外れねえ。

「なんだ、これ？」

「それはね、零君が僕の監視下にある証。今回は他の被い師もたくさん動く。ずっと零君に付いてるのは無理だからね。そんな中で他の被い師に会ったら、間違いなく被われる。だから、僕の監視下にある《徴》^{しちう}さえあれば、間違つて被われることはなくなるでしょ。嫌かもしれないけど、着けてて」

着けてます。被われるなんて嫌だもん。おとなしく着けてます。

「後、その《徴》にはね、零君でも簡単に術式が使えるように、術式が施されてるんだ」

「じゃあ、俺でも転移だとか、あんなのが使えるの？」

使えたらめっちゃ便利じゃん。是非使いてえ。

「そりゃ使えるよ」

「なんか呪文みたいなもん必要なのか？」

「術式の呪文は個人によつて違うんだよ。今の零君なら転移とか、自然要素を操るのが限界だろうね。簡単に言えば、例えば炎を操りたいんなら、炎を思い浮かべて、炎よ、とか唱えればいい」

簡単なような簡単でないような。

まあ、実戦あるのみだな。

「じゃあ、行こうか」

懷から杖を取り出す。杖をとんと鳴らす。

【術者、以外一名転移させよ】

視界が真っ白になった。目を開けると、周りには緑ばかり。山の中みたいだ。どの山が分かんねえけど。

「なあ、巫」

「何？」

「いつも思っただよな。戸締りしてねえし、しかもオルトロス置いてきて大丈夫なのか？」

「あ……」

はつとした表情をする。戸締りなんて気にしてなかったんだな。オルトロスのことはすっかり忘れてたんだな。なんかもういいや。

「まあ、いいじゃん。ついて来て」

諦めて黙ってついて行く。

山ん中がやけに静かだ。静か過ぎて、不気味。俺と巫の足音しか聴こえねえ。

風の音とか、そういうのが全く聴こえてこねえ。

あの、《亀裂》とかいうやつのせいかな？

巫が立ち止まる。

「零君、あれ見て」

指差した方を見る。

木と木の間に、《亀裂》のミニサイズが口を開けてる。

「あれ、どうすんの？」

「今から閉じるんだよ」

《亀裂》の前に立ち、持っていた杖を《亀裂》のど真ん中にぶっ刺した。

【修復、閉じよ】

《亀裂》から白い光が漏れる。

杖に吸い込まれるように収縮していつて、パンツと音と共に黒い霧のようなものを残して、《亀裂》が消えた。

「消えた？」

「時空間を修復して《亀裂》を閉じたんだよ。零君には、これもやつてもらいたいんだ」

は？俺に《亀裂》を閉じろと？「……俺に《亀裂》を閉じろと？」

「そうそう」

実に簡単ににこやかに言ってくれるな。

「俺に出来んの？」

「零君の力なら大丈夫だよ。そのために術式施したんだから」

何を言っても無駄だな。結局やらされる訳だし。

「どうやりやいいんだ？」

「他にも《亀裂》があるから、そこで説明するよ。付いてきて」

さっさと歩き出す。慌てて付いていく。

あいつ、俺を置いていく気か？

滅茶苦茶歩くスピード早えんだけど。

「零君、早く」

分かってるよ。お前が早いんだろが。

巫に追いつくと、《亀裂》が当然のように鎮座してるし。これがごまんとあるのか。えげつねえ。

「閉じろって言うけどさ、どうやんの？」

「簡単だよ。左手突っ込んで閉じろって言えばいいだけ」

左手突っ込むの！？あの中に！？

うっわ、やだなあ……。

「ほら、やってみて」

滅茶苦茶軽く言いやがるのが腹立つ。

でも仕方ねえのか…。

《亀裂》の前に立って、恐る恐る左手を入れる。恐る恐る《亀裂》に触る。

中心に向かって不気味に渦を巻いて、気持ち悪い。

指先を少し入れる。引つ張られるような感覚がある。

思いきつて手首まで入れる。

引つ張られるような感覚もだけど、ねっとり絡みつくような感覚が気持ち悪い。

さつさと終わらせてえ。

【えーと……閉じる？】

言った瞬間、《徴》に奇怪な文字が浮かび上がって、漆黒の光を放つ。

いつそ綺麗なほどの、漆黒。

《亀裂》よりも鮮やかで深い、黒。

その漆黒の光が、《亀裂》を喰らうかのように小さくしていつて、音もなく霧散させる。

「……終わり？」

「終わり。よく出来ました」

……俺は幼稚園児か？

「なんか、案外簡単なんだな」

「いや、難しいよ。《亀裂》を閉じれるのは妖精や精霊、一部の“オニ”と実力のある被い師だけ。下手な被い師が《亀裂》を閉じようとしたら、逆に《亀裂》に引き摺り込まれるよ」

それはあれか。自分は実力があるんですとアピールしたいのか？
実力あったとしても、普段が普段だからなあ。すごいとは思えねえ。

「さて、次行こうか」

巫がさつさと歩き出す。

ちよつとは待てねえのか？

溜息を吐いて巫の後を付いていく。「……終わりか？」

ちよつと疲れ気味に喋る。

「終わりだよ。この山の《亀裂》は修復完了」

巫は満足そうな笑顔だ。まあ大体あいつ、いつも笑ってるけど。
あれから十個くらい《亀裂》を修復した。全部俺が。

「疲れた？」

「まあ、そうだな」

「疲れるのは仕方ないよ。《亀裂》を修復するのに、結構な霊力使うからね」

霊力とやらを使ったから、疲れてんのか？

「………そんな説明修復する前に聴いてねえぞ？
説明くらいちゃんとしろよ。」

「とりあえず、この山の修復は完了したから、帰ろうか。九時になるのを待とう」

そういえば、《亀裂》は九時に開くのか。

それまでは休憩ってことか。

家帰って少しだけ寝るかな。「あ、零君、僕はこれから寄らなくちゃいけないところあるから、先帰ってて」

「あいよ」

いけないいけない忘れるとこだった、とか言いながら杖を鳴らして転移する。

転移する瞬間は初めて見たな。

真っ白な光に包まれて、一瞬で跡形もなく消える。

やっぱあれ便利だよな。俺も使えねえかな。

転移ってどうやればいいんだ？

訊いとけばよかった……。

仕方ねえ。歩いて帰るか。

しばらく山を降りていくと、羽音が聴こえた。

鳥とかの羽音じゃねえな。

なんとなく気になって、羽音のする方に行く。

【あっ】

びっくりだ。草むらを分けた向こうに齊羅巍がいた。

【ほう、零か。さしずめ、巫に振り回されとったか？】

【まあ、そんなとこです】

【ほっほ。巫らしいのう。後、敬語はいらんぞ。堅苦しかろう。楽に話せばよい】

じゃあ、楽に話させてもらうか。敬語苦手だしな。

【零よ、お主の名字、確か狩真といったな？】

【そうだけど、それがどうかしたのか？】

【なんにもありやせぬよ。ただ、懐かしい名だと思つての】

……懐かしい名？もしかして、俺の先祖について何か知つてんのか？【俺の先祖について何か知つてんの？】

【知つておるも何も、良き友じゃった。千年も昔の話じゃが】

千年前！？つーことは、その前から生きてるってことだよな。齊羅巍つて何歳……？

まあ、それは置いといてだ。

齊羅巍と俺の先祖が友達だった？

つまり、先祖は普通の人間じゃなかったってことだよな？

まさか、ホントに被い師？

【俺の先祖つて、被い師だったのか？】

【ふむ。まあ、知らぬとしても仕方なからうな。時代の渦に吞まれ、被い師の歴史から抹消された一族だからのう】

【抹消……？】

【昔、狩真一族という、一流の腕を持った被い師の一族がおった。当時は現代以上に被い師と“オ二”の確執が大きかったのじゃ。そして、狩真一族は数少ない“オ二”と心通わせる一族じゃった。我ら“オ二”にとつては、大切な友じゃった。しかし、狩真一族の在り方は、多くの被い師の反発を受けたんじゃ。そして被い師の秩序を乱すとして、一族は皆殺しにされ、狩真一族は存在を抹消されたのじゃ】

【じゃあ、どうして子孫が生き残ってんの？】

【我も聴いた時は驚いたよ。まさか、子孫が生き残っておったとは思わなんだ。あやつがうまく、子供だけでも逃がしたのじゃろう。零よ、お主はあやつに似ておる。

我が友、狩真^{かりま} 蒼^{そう}に】俺を見て懐かしそうに、同時に寂しそうに【似ておる】と呟く。

【そんなに俺、その人に似てんの？】

【似ておるよ。特に目がな】

【その人って、どんな人だったんだ？】

髭を撫でて、懐かしそうに目を細める。

【天真爛漫で自由奔放な人間じゃった。今でいうトラブルメーカーというやつじゃな】

あれ？なんかイメージが……。

昔だから厳格そうなイメージがあるけど、違うのか？

【さて、この話はこれくらいにしとくかの。今は、《亀裂》じゃ】

【あ、うん】

まあ、確かに今は《亀裂》の方が大切だよな。
先祖のことも気になるけど。

【今夜九時、三日間という短く長い戦いの鐘が鳴る。あまり時間はないが、それまで休むがよい】

その後、齊羅巍と別れた。

齊羅巍は小さな《亀裂》を修復しに行くらしい。
抹殺された先祖か……。どんな人だったんだろ。
でも、きつといい人達だったんだろな。「ただいま」と

やっと家に着く。ただいま我が家。

つーか、あの山家から遠いし。三十分も歩いたし。
なんか地味に疲れた。

部屋からオルトロスが嬉しそうに飛び出してきた。
みつつの頭が思い思いに鳴く。

小さいからいいけど、これが元の大きさだったらかなり迫力あって
怖そうだな。

足にじゃれついてくる。

抱いてやるとものすごい喜んできた。

顔をべろべろと舐めてくる。

すんげえべとべとなんだけど……。後で顔洗お。

そつえばオルトロスって何食うんだ？

巫が帰ってきたら訊くか。

少し眠いな。顔洗って寝るか。

オルトロスを床に下ろして洗面所で顔を洗う。

その間もオルトロスは嬉しそうに足にじゃれつく。

【あー、そんなに暴れるなって】

あまりに足にじゃれついてくるから胸に抱いて、部屋に戻る。

巫が帰ってくるまで寝るか。

床に下ろしてベッドに入る。

オルトロスが潜り込んできた。

まあいいか。別に邪魔じゃねえし。

目を閉じる。すぐに微睡みがやってきた。「零くん。零君ってば。起きろー、零君ー」

巫の声が聴こえる。

なんだ、もう時間か。もうちよい寝てたい……。

「もう、起きてよー。仕方ない。雷喚んで痺れさせて起こすか」

ちよつと待て！雷直撃したら普通にショック死するって！

お前は俺を殺す気か！？

食人鬼だから死なねえかもしれないけど、痛覚は人間と変わんねえんだぞ。

もうちよいそこを配慮してくれ。お願いだから。

「起きる！起きるから雷直撃マジやめて！」

「零君がなかなか起きないからだよー」

笑顔でへらへらと言いやがるからムカつく。
なんでこんな奴が俺の監視者なんだろ。
運がなかったんだな、俺。

「早速だけど、行くよ。オルトロスも連れてきてね」

「……あいよ」

布団を捲るとオルトロスがくあゝと欠伸をした。
俺達の話に分かってるのか、行くの？って感じの目で見てくる。

「そつえばどこに行くんだ？あの山か？」

「いや、大学。あの大学の屋上の真上に《亀裂》が開いてるからね
なるほどな。《亀裂》の真下で何が来るか待ち構える訳か。」「さて、
行こうか【術者一名、他二名転移させよ】」

魔方陣が一瞬で拡がって白い光に包まれる。
視界が真っ白になって、浮遊感が訪れる。

浮遊感がなくなって目を開けると、見慣れた大学の屋上にいた。
空を見上げると、夜空より黒い《亀裂》がぱっくりと口を開けてる。
相変わらず不気味に、中心に向かって渦を巻いている。

【白銀？】

屋上の隅に、白銀が立っていた。

あんなとこで何してんだ？

【ア、ヤット来タ。待ッテタンダヨ】

【珍しいね。いつもなら僕が呼ばないと来てくれないのに】

【ドウセ君ニ呼バレルカラネ。ダカラ、自分カラ来タ】

確かに巫なら呼びつけそうだな。納得。

巫が懷から懷中時計を取り出す。

時間を見て、珍しく険しい顔をする。

【零君、覚悟はいい？来るよ】

……………いよいよか。

《亀裂》を見上げる。突然回転速度が早くなった。

バチバチと黒い稲妻を発し始め、拡がり始める。

中心部分がどんどん拡がっていく。

そして一気に収縮して、黒い光が発せられた。

不思議と眩しくない。

光が収まった瞬間、人間が二人、落ちてきた。

俺に向かつて。「えっ…………？」

落ちてきますよ？人間が二人、俺に向かつて落ちてきますよ！？

避けらんねえし！

「ふぎゃんっ！」

どすん！って音を立てて落ちてきた二人に押し潰される。

重くはないけど、床に腰を打ち付けて地味に痛え。

落ちてきた二人は状況が掴めないのか互いの無事を確かめ合い、キョロキョロと周りを見る。

何か喋ってるけど、何を喋ってるか分かんねえ。

異世界から来たから、当然か。

てか、どいてくんねえかな……。うん。いきなり知らない場所に落

とされて、状況が掴めずに混乱するのは分かる。

分かるけど、そろそろどいてくんねえかな？

まさか、人の上に乗ってることに気づいてねえとかないよな？

気づいてねえの？気づいてないんですか？

気づいてないんだな。

「おい……。どいてくれ」

足をつついて気づかせる。

やっと気づいて慌てて俺の身体から離れる。

何か言ってるけど、何言ってるか分かんねえ。様子からして多分謝ってるんだろな。

「なあ巫、言葉分かるようになんねえの？」

「なるよ。今からやるんだよ」

懷から小瓶を取り出す。中に赤い液体が入ってる。

なんか毒々しいな。

床に何か書くように杖を滑らせる。

そこに赤い液体を垂らす。

液体が床に落ちた瞬間、魔方陣が浮かび上がる。

魔方陣が動き始める。魔方陣が分解し、二人の足に巻きつく。巻きつき、すうっと皮膚に吸収されるみたいに消える。

二人はかなり混乱した感じの顔をしてる。

まあ、仕方ねえわな。巫が小瓶の蓋を閉めて懐に入れる。

てかあの懐どうなってんの？いろんなもん詰まってるにしては、膨れてねえよな。

うーん、不思議だ。

「完了。君達、僕の言ってること分かるー？」

二人が驚いたように巫を見る。

「あ……はい」

「わ、分かり……ます」

一人は服装だけ除けば、日本人にいてもおかしくない見た目をしてる。

もう一人は、真っ白な髪が印象的だ。

男の格好してるけど匂いは女なんだよな。何か事情でもあんのかな。まあいいけど。

「君達の名前言ってくれる？」

巫がしゃがんで訊く。

先に真っ白な髪の子が口を開いた。

「僕は、クーレといいます」

慌てたように日本人似の子が口を開く。

「俺はハルです」

「そ。ハルとクーレね。君達、自分の身に何が起こったのか、分かる？」

二人共首を横に振った。「君達はね、異世界に来たんだよ。ここに落ちる前に、あれ見なかった？」

《亀裂》を指差しながら言う。

二人が《亀裂》を見上げる。

「見ました、あれ。そしたら、黒い光がしたと思ったら、落ちたんです。なあ、クーレ？」

「は、はい、そうです！」

クーレっていったつけ？滅茶苦茶緊張してんなあ。

まあ、そりゃそうか。

「君達はね、あの黒いのに吸い込まれて異世界に来たんだ。つまり、ここに。帰るには三日後の午後九時に、ここに来るしかないんだよね。それまでこの世界で、辛抱してもらわなきゃならない。オツケー？」

二人息ぴったしに首を縦に振る。

ホントに分かったのか？

「なあ巫、あれ、一度閉じるんじゃないかったのか？閉じる気配ねえけど」

全く閉じる気配がない。それどころか、さっきみたいに回転し出した。

ヤバくねえか……？

「うーん、まだ来るみたいだねえ。しかも沢山」

沢山！？今沢山って言った！？マジやめて！

「零君、オルトロスの封印解いて」

「……………どうやって？」

いきなりそんなこと言われても困ります。

「オルトロスの首に左手当てて、限定解除って言って。オルトロスの制御は全て、零君に譲渡したから」

つまりそれは、オルトロスは俺が管理しろってことですか？

まあ、仕方ねえのか…。

オルトロスの首に左手を添える。

【限定解除】

その途端、オルトロスの毛が猛烈に逆立った。

黒い光に包まれて、一瞬でライオンくらいの大きさになる。

スゲー……。

「零君、来るよ。気を引き締めて」

《亀裂》から、黒い光が発せられた。黒い光が収まった瞬間、どう見ても化物としか思えない生物がわんさかと出てきた。てかあれ、コカトリスに似てる。

雄鶏の頭と身体に、蛇の尻尾と蝙蝠の翼を持つっていう化物。

てかあれ、コカトリスならヤバくねえ？

息や視線で生き物絶命させるって言っし。

そんなのが四方八方に散らばっていくんだけど。

普通にヤバくないですか？

人間に襲いかかるに決まってるよな？

大学の敷地から出ようとした一匹が、見えない壁に阻まれて弾き飛ばされた。

なるほど、結界張ってるのか。いつの間に？

まあいいか。

【ギャアアアアア！】

俺達に気づいた一匹が迫ってきた。

ちなみに、氷の息を吐いて。

一気に寒くなってくる。

ハルとクーレを見ると、硬直してる。

オルトロスは……迫ってきた二匹目に飛びかかって床に落としたし。なんか、猫がネズミで遊ぶみたいに、コカトリスを爪で引っ掻いたり噛んだりしてるし。

氷の息を吐いて抵抗するけど、無意味だ。

みるみるうちに、コカトリスの身体がズタボロになってく。

遂に動かなくなったコカトリスをくわえて、俺のところに走ってきた。

で、目をキラキラさせて尻尾をブンブン振り回して、褒めて褒めてって感じで見つめてくる。

【あー……よしよし。よくやった】

そう言っって頭を撫でてやると、ものすごい勢いで尻尾を振り回して

喜んだ。

で、コカトリスを地面に落としたと思ったら、食べちゃった。みつつの頭で器用に引き千切って食べちゃったよ？

まさか食べると思わなかったよ？

ハルとクレーが青ざめた顔で見てるし。

「あのブリザートリスが食べられた……」

ハルがポツリと呟いた。

あ、これコカトリスじゃなくてブリザートリスっていつのか。

どうりで氷の息を吐く訳だ。オルトロスがまたコカトリス……じゃねえや、ブリザートリスに飛びかかった。

またもやズタボロにされてく。

ほっとしても大丈夫だな。

ブリザートリスが奇声を上げて、巫を氷づけにしようと迫る。

巫が杖をブリザートリスに向けた。

【風よ、切り裂け】

瞬間、風が吹き、瞬き一回も満たない間にブリザートリスの身体がバラバラになる。

切り裂かれた訳か？ 地味に怖え。

てか、俺にも向かって来やがった！

どうすんの！？どうすりゃいいの！？誰か教えて！

爪で俺の目を狙ってきたから、反射的に胴体を掴んだのがいけなかった。

胴体を掴んだ途端、

ぐちゃ……

「ひぎやあああああー!!」

情けないけど悲鳴あげちゃったよ!

仕方ねえじゃん!怖いもんは怖いもん!

てか、力が強いことすっかり忘れてたよ……。

普通に胴体握り潰しちゃったし……。

内臓とか血とかぶちまけて床に落ちてるし。

必然的に俺の手も血塗れ。

ハルとクーレが驚愕といった感じで俺を見つめてくるし……。

「すごい力持ちなんですね……」

クーレがポツリと言った。

それはちよつと違うぞ?

俺が食人鬼だから、力が強いだけだぞ。

人間がこんな力持ってたなら怖えよ。【ギヤアアアアアアア!】

ブリザートリスが一斉に俺達に向かって来たああああ!

何羽いんの!?少なくとも二十羽以上いるよね!?

「巫!どうしたらいいんだよ!?!」

「術式使うか、爪を使って!」

あ、なるほど。

術式って適当に唱えればいいんだっけ?

そんなこと考えてるうちに来ちゃったよ!

咄嗟に爪を伸ばして、一羽に向かって爪を振り下ろす。

ブンツと風を切り裂くような音がした。

一瞬の間を置いて、綺麗に身体がバラバラと落ちる。

ついでのように、何羽かが地面に落ちる。

綺麗にバラバラになったやつもあれば、頭だけ分裂したやつ、羽が分裂したやつ、足だけ分裂したやつが沢山落ちる。

これ俺がやったんですか？

後ろにいたやつはまさか風圧で？おもいつきり振り下ろしたから？

たった一回爪を振り下ろしたただだよ？

自分が恐ろしくなってきたよ！

ハルとクーレに、何羽か襲いかかるうとしてるのが見えた。

マズイ！

そう思った瞬間、気づいたらだんつと地面を蹴って飛び上がり、爪を振り下ろしてた。

たんと地面に着地する。

遅れてブリザートリスがバラバラと落ちる。

ハルとクーレが、俺を恐れに似た眼差しで見る。

………仕方ねえか。実際俺、化物だし。

爪は血塗れだし。

またブリザートリスが迫ってきた。

ギヤアギヤアうつせえなあ。

来いよ。バラバラにしてやる。一斉に迫ってきたから、横一線に爪を振る。

綺麗に真つ二つになって、血や内臓を盛大にぶちまけて落ちる。

血が顔にかかった。

なんとなく唇に着いた血をぺろつと舐めてみた。

まつず……。なんとも言えねえ不味さだ。

舐めなきゃよかった……。

【ギヤアアアアアアア！】

【つつさい】

頭を掴む。ぐちゃり、と簡単に潰れた。首を無くした身体が地面に落ちる。

俺の手に潰れた肉や骨、脳みtainなものがこびりついてる。手を振ってこびりついた肉と骨を払い落とす。

まだ十羽くらいいいやがる。

【炎よ、荒れ狂え】

巫の術式を唱える声が聴こえた瞬間、とてつもない炎が残りの十羽を飲み込んだ。

炎が収まるとブリザートリスは灰も残さず、綺麗さっぱり燃やし尽くされてる。

てかさ、巫一人でも大丈夫だったんじゃないの？「終わったよ」。すごい盛大にぶちまけたね。こんなところで食人鬼の闘争本能の片鱗出さなくていいのに」

すっげえへらへら笑いながらこつちを向いてきた。

「闘争本能……？なんだそれ？」

いや、闘争本能は分かる。

俺がいつ闘争本能を見せたっていうんだ？

「食人鬼はね、闘争本能が強まると目がオレンジ色に近くなるんだよ。零君の目ね今、オレンジになりかけてんの。いつもより興奮してるでしょ？」

言われてみれば確かに……。

もし強まったとしたら、ハルとクレーに恐れに似た眼差しを向けられた時だな。
ショックだったし。ブリザートリスを八つ当たりに近い感じで切り裂いたし。

「でさ零君、爪しまつたら？」

そういえば伸ばしっぱなしだった。
戻って念じて戻す。

相変わらず血塗れだけど。

そういえば白銀はどうしたんだ？

あいつが殺られるとは思えねえけど。
辺りを見渡す。

あ、いたいた。てか……白銀の周りに何十羽とブリザートリスが白目を剥いて落ちてます。

きっと精神崩壊させられるほどの幻影を見せられたんだな。

白銀は満足そうな顔してるし。

怖え……。

白銀さん怖えよ……。【零、ドウカシタ？】

白銀を見つめてたのがバレた。

【いや、なんでもねえ】

まさか、恐ろしいと思って見てました、なんて言えねえもん。
精神崩壊させらるわ。

「さて、後片付けだね」

そう言って杖を地面に着ける。

【焰よ】

ブリザートリスの死骸に淡い青色の焰が灯り、死骸も血も跡形なく燃やしていく。

焰が消えれば、灰さえも残ってない。

「あ、あの……」

恐る恐るといった感じの声が聴こえて、右を見る。

ハルが手を上げてる。で、左腕にクレーがぴったりふっついてる。

二人はそういう仲なのか？

「どうかした？」

「あの……どういう状況なのか詳しく訊きたいんですけど……」

そういえば巫がちゃんと説明してなかったっけ。

あんな混乱した状態で理解出来る訳ないわな。「零君、説明してあげて」

はい！？俺ですか！？

「え？俺？説明出来るほど理解出来てねえよ！」

「大丈夫だよ。零君なら説明出来るって。僕はやることがあるからよろしく」

じゃ、と手を振って歩き出す。

「おい！任せられても困るって！それに今一人にすんなって！」

俺の叫び虚しく巫は屋上から飛び下りやがった。

地面に叩きつけられて死ねばいいのに。

二人を見る。

なんか気まずい……。

「えっと……俺達の名前、教えたっけ？」

「いえ……聴いてないです」

うん。そうだよな。言った覚えねえし。

「俺は零。あつちの子供は白銀、ふざけた黒づくめ野郎は巫っていうんだ」

「零さんに白銀さんに、巫さんですね。分かりました」

クーレが笑顔で言ってきた。

風が二人の匂いを運んでくる。

マズイ……うまそうな匂いが食欲をそそってくる。

マジで食いたい。

巫の馬鹿野郎……。だから一人にすんなって言ったのに。

本気でマズイ。興奮してきて、息が荒くなってきた。

歯を触ると、少し尖ってきてやがる。

最近気づいたけど、空腹を感じると尖るみたいだ。

二人がきょとんとした顔で見ってくる。

まさか、自分達が食欲の対象にされてるなんて、思わないよなあ。どうするんだよ。自制する方法知らねえぞ。

その時、左腕の《徴》に黒く輝く奇怪な文字が浮かび上がった。黒

く輝く奇怪な文字が、はつきりと浮かび上がる。
はつきりと浮かび上がった途端、輝きだけが失せ、文字だけが残る。
さつきよりも強く腕に巻きついてる。

食欲が徐々に引いていき、興奮が治まってきた。
まだ食欲はあるけど、抑えられないほどじゃない。
なるほど……。食欲制御も兼ねてるのか。

あの野郎……。そういうことはちゃんと説明しろよ。
これがあったからよかったけど、なかったら大惨事だぞ。

「あの……。どうかしたんですか……。？」

ハルが不安そうに訊いてくる。

「ああ、悪い悪い。なんでもねえ。とりあえず、ここが異世界だつてことは分かったか？」

「まあ……。なんとか」

「今は消えてるけど、さっきの黒いでつけえ雲に吸い込まれて来たらしい」

「はい。それは聴きました」

なんだ。ちゃんと聴いてたのか。
分かんねえのはその後か？

「で、帰るためには三日後の夜九時にここに来なきゃいけないらしい」

「つまり……。三日間、この世界にいなきゃいけないってことです、

よね？」

「まあ、そういうことだな」「あのー、三日間いるとして、俺達は
どうしたらいいんですか？」

「……………」

知りません。分かりません。
確かに三日間どうすんの？

あのふざけた黒づくめ野郎は、ちゃんとそのことまで考えてんのか？

……………まさか、俺ん家とか？

あいつのことだから、その可能性十分ありえるな。

「悪い、それは巫に訊かねえと分かんねえわ。ちょっと待っててくれ。もうちょいしたら帰ってくると思う」

「あ……………はい」

それきり会話がなくなる。
なんか……………超気まずい。

「あの……………訊いていいですか？」

クーレがハルより前に出て訊いてきた。

「なんだ？」

「あの……………ですね、その……………」

気まずそうに喋る。

「まさか、俺が人間かどうか気になんの？」

「え？あ……はい」

まあ、さっき人間離れたことばっかしたもんなあ。

「俺、人間じゃねえよ、元人間。今は化物なんだよ」

「じゃあ、この世界の人々が皆、零さんみたいに爪を伸ばしたり出来る訳じゃないんですか？」

出来る訳ねえよ。出来たらどんな超人だよ。

「俺は化物になったから出来るだけで、普通の人間は爪伸ばしたり、あの鳥を握り潰したり出来ねえよ。ハルの世界の人間と変わんねえと思うぞ」「あの、この世界にも魔法ってあるんですか？」

この世界にも？つまり、二人の世界には魔法があるってことか。

「んゝあることはあるけど、普通の人間の間ではないことになっている。魔法とかがあるって信じられてねえ」

「そうなんですか？どうしてなんででしょう？」

そんなこと言われてもなあ……。

俺には分かんねえよ。

「んゝなんでかは知らねえ。そもそも、化物の存在だって信じられてねえからな」

「そうなんですか！？じゃあ、どうやって身の安全を守ってるんでしょう？」

「そのために、巫みたいな被い師がいるんだと思うけどな」

あんな化物が世界にいるなんてなったら、世界中が大パニックになるのは間違いない。

被い師は“オニ”の存在を隠しつつ、“オニ”から人間を守ってるんじゃないかと思う。

でも、なんだろうな。巫は、被い師と“オニ”という関係だけじゃなく、“オニ”と友達のような関係に見える。「被い師ってなんですか？」

そうだった。まずはそこからだった。

「被い師っていうのは、簡単にいうと人間に害をなす“オニ”を退治する専門の人間……ってとこかな。俺も詳しくは分かんねえ」

他の被い師に会ったことねえしなあ。

他の被い師が、巫みたいに“オニ”に友好的とは限らねえし。オルトロスが手にすり寄って来た。

そういえば、どうやって小型犬くらいの大きさに戻すんだ？

滅茶苦茶潤んだ瞳を向けてくるんだけど。

頭を撫でてやると喜ぶ。

なんか……可愛い。ライオンくらいの大きさあるのに。本当なら象くらいの大きさあるのになあ。

てか、ハルとクレーが若干引いた目を向けてくるんだけど。

まあ、ライオンくらいの大きさがある、みつつの頭を持った犬を普通の犬と同じような扱いしてたら、仕方ねえか。

「零さんの犬ですか？」

俺の……そうなのかな？

「まあ、そうなるかな」

「そう……なんですか」

引くなよ。そこまで引くなよ。

「あゝ、やっと結界の修復終わった」

いきなり、巫が現れた。

てめえはどっから湧いてきたんだ？「おおお！？」

ハルが奇妙な声を上げる。

まあ、そうなるわな。いきなり気配もなく、後ろに誰か立ってたら、てか、マジでどっから湧いてきたんだ？

ホントいきなり、ふっと現れたぞ？

幽霊か、お前は。

「聴かれたんだけどさ二人の寝床、どうすんの？」

「ん？そりゃあ零君家だよ。一部屋空いてるんだから、そこ使えばいいじゃん」

やっぱりですか。やっぱりそうなるんですか。
期待を裏切らないお答えどうもありがとう。

「分かったよ。でさ、オルトロスどう戻すんだ？」

巫がきよんとする。

「あれ？言ってなかったっけ？」

「聴いてねえよ」

お前の記憶にはいつ、俺に説明したことになってんだ？

「さっきやったみたいにして、施錠って言って」

さっきやったみたいにして？

確か左手をオルトロスの首に添えて、

【施錠】

毛が猛烈に逆立った。小型犬サイズじゃないから、迫力がある。

黒い光に包まれて、一瞬で小型犬サイズに戻る。

右の頭が欠伸をした。クウーンとか言いながら、俺の足にすり寄ってくる。

しゃがんで頭を撫でてやる。

【デサ、終ッタノ二帰ラナイノ？】

なんか、オルトロスが白銀を見て怯えてる。

俺の足に隠れるようにして、白銀の視線から逃げる。

まあ、なあ。恐ろしい幻影見せられたんだろっなあ。

【ドウカシタ？】

気づかないうちに白銀を見てたみたいだ。
幻影はかけないでくれよ。きっと死ぬる。

【いや、オルトロスがお前見て怯えてるからさ。白銀、こいつにどんな幻影かけたんだ？】

【ン？体長一メートルノ蜂ガタクサン襲ッテクル幻影】

体長一メートルの蜂……。怖すぎる。

マジでどこのホラーだよ。

「さて、ここにいっても仕方ないし、行こうか」

行くつて、どうせ俺ん家だよな。

巫が杖を鳴らす。

【術者、以下五名転移させよ】

魔方陣が広がる。ハルとクレーが驚いた顔をして魔方陣を見る。
視界が白に塗り潰された。浮遊感がなくなつて目を開ける。
うん。俺の部屋だ。なんの変哲もない。齊羅巍がいるのを除けば。

【ふむ……今回もやはり、《迷い子》が来たか】

《迷い子》……？なんだそりゃ。

【《迷い子》ってなんだ？】

【《迷い子》は《亀裂》に引き摺り込まれて、この世界にやって来

た人間のことを《迷い子》って言うんだよ】

へえ、《迷い子》ってなんか迷子になった子供みたいな呼び方だな。まあ、状況的には似てなくもないけど。

【ネエ、二人置イトイテイイノ？言葉が分カラナイカラ、戸惑ッテルヨ】

そうだった。“オニ”の言葉は人間には分らないんだった。異世界の人間でも、それは同じなんだな。

「んー、君達はまず、服をどうにかしないとね」

確かに。そんな明らかに魔法使いです、みたいな格好で外なんて出たらかなり目立つ。「この服、ダメなんですか？」

ハルがローブを見ながら言う。

そんな格好してたら、頭おかしいのかと思われちゃうよ。それが、コスプレ。

どっちにしたって痛い目で見られるけど。

「その服はちよつとねえ。まあ、服は僕が用意するよ。後ね、零君が説明してくれたと思うけど、この世界に魔法とかは存在しないことになってるから、絶対に人前では使わないでね」

珍しく巫が真剣に言う。

それほど大事なことって訳か。

「なあ巫。そういえば術式と魔法ってどう違うんだ？」

「術式と魔法の違い？まあ、似たようなものだけど、術式は陰陽道から、魔法は魔術から派生したっていう違いがある。後は、魔力と霊力という、込める力の違いもあるね」

「ふーん……」

聴いてもさっぱりだった。違いが分かんねえ。

まあ、分かんなくても問題ないからいいか。

「そういえば零君、食事したのいつ？」

「えっと……一昨日」

一昨日かあ。随分食ってねえなあ。

どうりで腹がすく訳だ。

「一昨日かあ。僕は色々と二人に説明があるから、白銀、僕の代わりに行ってくれる？」

白銀を見る。溜息を吐いた。

てか、説明すんなら俺が説明することなかったじゃん。

【分カツタヨ。行クヨ】

「ありがと。じゃ、零君。食事行つといで」

まあいいや。とりあえずは空腹。

……満たしたいけど、複雑だなあ。白銀と二人で歩くのって、巫と初めて会った夜以来だな。

あん時は空腹で死にそうだったな……。

今も空腹だけど。

周りの住宅から料理の匂いと一緒に、うまそうな人間の匂いが漂ってくる。

あゝ、嫌になる。人間が家に引っ込んでても、うまそうな匂いがしてくるんだからな。

鼻が利くっていうのも、状況によっては考えものだな。

【零、コノ近ク二人気ノナイ公園トカナイノ】

【あるけど、どうした？】

【人間ヲ人気ノナイ公園ニ引キ摺リ込モウツテコト】

【ああ……分かった】

てか、そこまで不機嫌そうに言わなくていいじゃんか。

ふと、人間の匂いが鼻を刺激してきた。

近くにいる。近づいてきてる。

食欲が強まってきた。さっき“徴”によって押さえつけられたから、余計に。

歯が尖ってくる。歯というより、牙だ。

さながら吸血鬼みたいな。

角から、サラリーマン風の男が携帯を弄りながら出てきた。

どうせなら女の方がうまいんだけどな。

まあいいや。男でも。

サラリーマンに近づく。

不審そうに見てきた。当たり前か。

一瞬で間合いを詰め抱きつき、首筋にかぶりつく。

血が、口内を満たす。血が溢れて、口内を満たす。

そのまま、首筋の肉を食い千切る。

男の身体から力が抜ける。

本来なら力が抜けて重くなるところだけど、俺にとっては軽い。

【とりあえず、さっさと公園行こう】

【ウン。急ガナイトマズイコトニナルシ】

食人鬼の牙には毒がある。噛まれれば一発感染。

しかも全身に回るのが異常に早いから、食人鬼として甦るのが早いらしい。

早く食わねえと食人鬼として甦るって訳だ。

周りから死角となる位置で、男を解体する。

甦らないように心臓を先に取り出す。

心臓さえ取り出せば、人間は食人鬼として甦らない。

その後は適当に解体しながら食べる。

【はあ、腹が満たされるって幸せだな】

【ソウダネ】

白銀が横に座って、俺が食べるのを眺める。

最後に残しておいた心臓を掴んで、口に運ぶ。

一口かじる。

血が溢れてうまい。

その時、後ろでガサツと音がした。

しかも、人間の匂いだ。まずくねえか？

まあ、白銀が幻影でどうかしてくれるかな。

白銀が立ち上がって人間の方を見る。

【ア……零ノ友達ダ……】

【へっ!？】

思わず後ろを振り返る。

「零……お前、何食ってるんだ？」

祐司が、いた。「……………」

「……………」

【……………】

三人共硬直。

なんで？なんでよりによって祐司なんだよ!？

【白銀、幻影でなんとか出来ねえ？】

【無理】

出来ねえのか。幻影で記憶ねじ曲げるとか出来ねえかなと思ったんだけどなあ。

「お前、どこの言葉喋ってるんだ？その子供だって疑問だし」

あれ？なんで祐司に白銀の姿見えてるんだ？

まあ、そんなことどうでもいいや。

白銀がなんかしたんだろ。

人間の目に自分の姿を写るようにしたとか。

「一番の疑問は、お前が何食ってるかってことだ。すごい血塗れだし……それ、心臓……だよな」

自分の手を見る。

心臓ですね。紛れもなく心臓ですね。

一目瞭然で心臓ですね。

しかも血塗れ。言い訳出来ねえし。
どうしよう……。

「えーと……説明するから、とりあえずこれ食っていい？」

「お……おお……」

分かってるよ、分かってるけどさ。

今の俺はどうしようもなく化物だけどさ。

そんな、恐れに似た瞳で見ないでくれ。

俺は、俺は……。とりあえず、食べ終わる。

あゝ……ホント最悪だ。なんでよりによって祐司なんだよ。
一番バレたくなかったのになあ……。
今更どうしようもねえけど。

【浄化】

巫がやってるみたいに唱える。

黒い光が全身を包んで、一瞬で消える。
血が綺麗さっぱりなくなってる。

食べ終わった後、いつもこうしてんだ。
祐司はびっくりしてるけど。
まあ、もうどうにでもなれだ。

「とりあえず、ベンチに座るか？」

「……そうだな」

あー……やっぱり俺、恐れられてるなあ。

仕方ねえけどさあ。人間食べるし。

きっと人間の本能そのものが、恐れてるんだろうなあ。

それは祐司のせいじゃない。

でも、やっぱりショックだなあ……。」「……とりあえず、そういうことがあつたんだよ」

とりあえず、説明をし終わる。

信じてくれるかどうか、滅茶苦茶不安だけど。

まあ、あれを見た後だし、話の信憑性はあると思う。

「そんなことがあつたのか」

「あつたんだよ。まあ、信じられねえと思うけどな」

「まあ、あれを見た後だし……。でも、本当に人間を食べるのか？」

「……食べるんだよ。俺だって本当は苦しいんだよ。でも、なつち
まったもんは仕方ねえじゃんか。俺にはどうしようもねえんだよ。
俺に、どうしろってんだよ」

分かってる。こんなの八つ当たりだ。

祐司にこんなこと言ったって、どうしようもねえのに。

でも、祐司なら聴いてくれるって分かってるから、感情を爆発させちまう。

「俺だって嫌なんだ！人間を食べることも、化物と戦うことも！でも、仕方ねえじゃねえか！そうしないと生きられねえんだよ！死ぬんだよ！俺は生きたいんだよ！化物になったとしても、生きたいんだよ！それは、駄目なことなのかよ……？」

ああ、俺、最低だな……。涙が出てきた。

「……よかった。安心した」

「へ？」

「化物だとしても、零は零だって分かって、安心した。血塗れのお前を見て、怖いと思ったんだよ、俺は。でも、お前はお前なんだな」

「……………」

なんで、そんな笑顔向けてくるんだよ。

俺は、化物なのに。

そんな風に言われたら、涙が止まらなくなるじゃねえか。

いきなり祐司が、俺の背中に手を回してきた。

まるで、泣いてる子供をあやすみたいに。

「ほら、泣けよ。泣きたいんだろ？周りから見えないようにしとくから」

どうしてお前はそんな風に言えるんだろうなあ。
マジで涙が止まんねえじゃんか。

「う……う……うわあああああ！」……………」

どうしよう。祐司の前で、しかも白銀が見てる前でひとしきり泣いちゃったよ。

急に恥ずかしくなってきた……。

「零、どうした？」

「どうしたってお前……お前の前でひとしきり泣いちゃったよ……急に恥ずかしくなってきた……」

恥ずかしさのあまり顔を覆う。

あー……穴があつたら入りたい。

「別にいいだろ。お前が泣き虫で怖がりなのは知ってる」

怖がりなのは関係ねえだろ。

でもまあ、すっきりしたからいいか。

「でも化物か。大変だな」

「ホントだよ。この俺が化物だぜ？あり得ねえよ。人生何が起こるか分かったもんじゃねえぞ」

「まあ、化物になるなんて人生何が起こるか分からないレベルじゃないけどな」

「確かにな」

【アノサ、悪イケド、巫二友人ヲ会ワセナキヤイケナインダケド、大丈夫？】

白銀がいきなり俺の前に立って言ってきた。

「なあ、なんて言ってるんだ？」

あ、そうか。姿は見えても言葉は分かんねえんだな。

「これから会わせたい奴がいるんだけど、今から大丈夫か？」

「大丈夫」

そうか。じゃあ、家に帰るか。

ハルとクーレがいるからびっくりするかもな。家までの道を、三人で歩く。

しっかし……まさか三人で歩くことになるなんて思わなかったなあ。

「なあ」

「ん？なんだ？」

「白銀って何歳なんだ？見た目なんてあてにならないだろうし」

確かに。見た目は八歳くらいだけど、“オニ”である以上見た目なんてあてになんねえわな。

【だってよ】

【三百二十七】

「三百二十七歳だつてよ。三……三百二十七ああ!？」

むせたわ。軽くむせたわ。

何お前、そんないかにも小学校低学年の背丈してて、三百二十七年も生きてんの？

【ソナノ普通ダヨ。“オニ”八大体長命ダカラ。ソナコト言ッテルケド、零八長命ドロロ力寿命ナンテ存在シナイヨ】

そうでした。忘れてました。

食人鬼には寿命がないんだつたな。

色んな意味で不安だよなあ。

さて、アパートの前に着いた。

巫がどんな顔するかな。

「ただいまっ」と

部屋に座ったまま、三人一斉に振り向いてくる。

巫が祐司を見て、笑顔のまま険しい顔をする。

「零君、その子、誰？」

「俺の友達の祐司で……その、あはは……バレちゃった」

「何してんの？」

ひいいい、すんません！

怖いよ？巫さん怖いですよ？

笑顔なのに怖いですよ！？「まあいいや。バレちゃったのは仕方ないし」

巫がガリガリと頭を掻く。

もしかしてイラついてるんですか……？

お、俺のせいでしょうか……？

すいません。マジですいません。

許してください。

「君、名前は？」

「武沼 祐司です」

「僕は巫。零君が説明したと思うけど、このことは絶対に他言無用だよ。君の記憶を消さなきゃいけないるし、聴いた人の記憶も消さなきゃいけないからね」

記憶消さなきゃいけないほどのことだったんだ……。
なんか、怖え。

「分かりました。零とは今までのように、友達として付き合っているんですね？」

「うん。それは構わないよ。ただ、零君が食人鬼だってことと、
“オニ”や抜い師が存在してるってことは絶対に言わないでね」

「はい」

「物分かりがいいね。僕からの話はそれだけ」

あ、それだけでいいの？ 終わり？

もつと重々しい話するのかなと思った。「じゃあ零、巫さんが帰って
いいって言うから、帰るわ」

へ？ もう帰んの？

「え？ もう帰んの？ てか、それで納得したの？」

「俺がこれ以上何か知ってどうするんだよ？ それにな、実は課題が
終わってないんだ。これから帰って終わらせる」

「そっか、頑張れ」

ヤベエ、俺も終わってねえよ。

「お前も頑張れよ。俺よりヤバイだろ」

それを言わないでくれ。マジへこむわ。

「じゃあな。明日会おうぜ」

「おう、いつものとこでな。じゃあな」

玄関から見えなくなるまで見送る。
姿が見えなくなって、部屋に戻る。

「零君、いい友達持ったね」

「ああ。本当あいつが友達でよかったよ」

心からそう思う。本人には恥ずかしいから言わねえけど。「で、話終わったのか？」

「大体はね」

大体かよ。帰ってくるまでに結構時間あったぞ。まだ話すことあんのか。なっげえなあ。

「で、どこまで話したっけ？」

てめえの脳味噌は僅か数分前のことまで忘れるように出来てんのか？

「えっと、クーレの髪をどうにかしないとって話を……」

「そうそう、クーレちゃんの真っ白な髪ね、この世界ではかなり目立つんだよ。というより、あり得ない。だからね、ここにいる間はこれを持っけてもらいたいんだ」

巫が懐から何かを出す。ホント、某人気アニメの四次元ポケットみたいだな。

何入ってたんだ、その懐？

いろんなもん入ってる割には、全く膨れてねえし。めっちゃ気になるんだけど。

「はい、これ」

懐から出したのは、奇怪な文字が刻まれた指輪。

クーレが指輪を受け取り、おずおずと着ける。
着けた瞬間、髪が真っ黒になった。
これにはびっくりだ。

「びっくりしなくても大丈夫だよ。幻影だから。外すと元に戻るから」

指輪を外す。一瞬で真っ白に戻る。
着けると、真っ黒になる。

便利に出来てんなあ。「二人共そんなびっくりしてるけど、二人の世界にはそういう魔法ないの？」

「ないですよ。転移魔法とかもないです」

へえ、魔法が使える世界でもいろいろあるんだな。
魔法が普通に存在しても転移魔法がないなんて、なんか不便そうだな。

まだ使ったことねえけど、絶対便利だ。あれは。
寝坊しても転移の術式使えば、遅刻しないで済むぞ。

「そういえば服だねえ。たった三日間でも着替えはいるよね。ハル君は零君のを貸してあげれるとして、クーレちゃんはそうはいかないもんねえ。明日買いに行こうか」

買うのかよ。まあ確かに、女ものの服なんてねえしな。
俺のを貸すにしても、サイズが違いすぎる。
買うのが一番だろな。

「とりあえず、今日はシャワーでも浴びて寝ようか」

「おお、そうだな」

なんだかんだ言って疲れたし。

シャワー浴びてゆつくり寝よ。シャワーを浴び終わって、欠伸をしながら服を着替える。

ハルとクレーに先にシャワーを浴びてもらった。

不思議なことに、使い方は一緒らしい。

魔法とかで身体綺麗にすんのかと思ってたんだけどな。

どうでもいいけど、俺は本来シャワーを浴びる必要はない。

汗をかかないし、汚れたとしても術式を使えば綺麗になるし。

浴びたくなるのは、人間の時の習慣が残ってるかららしい。

寝るのも同じ。本来なら眠りは全く必要ない。

眠るのも人間の時の習慣が残ってるかららしい。

シャワーは浴びない、眠らない生活なんて想像出来ねえけど。

頭を拭きながら部屋に戻る。

「あ、あの、本当にいいんですか？俺達がベッドで寝て」

「あーいいよ。俺はこっちの布団で寝るか……ら……」

うん。なんだろうな。あの膨らみは。

さっきまで布団に膨らみなんてなかったけどな。

捲ってみる。

「……………」

案の定巫でした。捲った布団を元に戻す。

くそ……気持ちよさそうに寝やがって。

押し入れからタオルケットを取り出す。

仕方ねえ。ソファで寝よう。

俺に男と寝る趣味はねえ。

「あの……本当に大丈夫ですか……？」

「ああ、いいつて。遠慮せず寝てくれ。電気消すぞ」

「はい」

ハルとクーレがベッドに横になったのを確認して、電気を消す。タオルケットを被ってソファに横になる。

すぐに睡魔がやってきた。「うゝゝ、重い……」

見るとオルトロスが腹の上で、気持ちよさそうに眠りこけてる。やけにソファが狭えな。

隣を見ると、巫さんが俺に抱きついて気持ちよさそうに眠ってらっしゃる。

なんで俺の隣で寝てんの？

確か布団で寝てたよな？なんでわざわざ、狭いソファの上で俺と寝てんの？

なんで、俺の隣で寝ようとするんだよお前は！

なんとなく、腹を蹴ってやった。

「げはあっ！」

奇妙な声を上げるけど気にしない。

ちっ、ソファから蹴り落としたかったのに、落ちなかった。巫の奇妙な声のせいで、ハルとクーレが起きる。

で、俺と、俺の足に抱きついて苦しみもがく巫を見つめる。なんか、視線が痛えんだけど。気のせいかな。

変な誤解してねえよな？

「零さん……巫さんとそんな仲だったんですか？」

ぶふあっ！クーレさんが俺の心に爆弾を投げてくれました！
違うよ！？ 断じて違うぞ！そんなBL展開いらねえよ！
気持ち悪いわ！

「巫、離れる！変な誤解されるだろが！」

「えーいいじゃん、別に」

「よくねえよ！俺にそんな趣味ねえよ！ぎゃあああああ！やめろ！身体まさぐってくんない！」

マジでやめて！まさぐらないで！

しかも、俺の唇を奪おうとすんな！お前はホモだったのか！？
まさかとは思ってたけど、マジでホモだったのか！？

なんでこいつはこんなに力強えんだよ！？

俺だって必死で抵抗してんだぜ！？

なんでてめえはよりによって俺の唇を奪おうとしてんだよ！？

マジでやめて！死ねる。男に唇奪われるなんて死ねるから！

ぎゃあああああああ！「……………あの、零さん……？大丈夫、
ですか……？」

ハルが遠慮がちに心配そうに訊いてくる。

「あー、うん。大丈夫だよ……あはは……」

ソファに座って、膝を抱える。

漫画風に効果音つけるとしたら、ずーんだな。

あまりの落ち込みっぷりに、オルトロスが隣で心配そうに目を潤ませて、クーンと鳴く。

犬っていいなあ。こういう時癒されるなあ。

頭を撫でると喜ぶ。

てかあの後、マジでキスされたんだけど。

マジで唇奪われたんですけど……。

ふざけまくってただけなのか、マジでホモなのか分かんねえけど。

てか、巫の唇めっちゃ柔らかかったんだけど……。

しかも、舌まで入れられたんだけど……。

マジでなんなのあいつ？

あはは……死ぬる。ホントならショックすぎて、一日布団の中で過ごしたいけど、そういう訳にもいかねえから二人の朝食を用意する。ついでに俺の分も。

まあ、朝食つつても、パンと目玉焼きくらいだけだな。

………てか、なんで俺はキスされたの？

なんであいつはキスしようとしたの？

滅茶苦茶笑顔で唇奪われたんだけど。

寝惚けてた訳じゃねえよな。確信犯だよな。

あいつの唇と舌、元カノより柔らかかったんですけど。

女より感触のいい唇ってどんなんだよ！？

一瞬でも巫が女だったら、なんて考えちまったじゃねえか！

あー、なんか腹立つ。

飯食おう。飯。

三人でテレビを見ながら朝食を食べてた時だ。
いきなり、ベランダの窓が開いた。

勿論、巫だ。

文句を言っ てやろうと、お茶を飲みながら顔を上げて巫を見る。

「ぶおふあっ！」

吹いた。盛大に吹いたわ！むせたわ！お茶返せ！
じゃなくて、なんだよその格好！？

「零君、大丈夫？どうかした？」

「どうかしたじゃねえよ！なんだよその格好！？どうなってるの！？」

巫は今、女と呼ぶしかない服装をしている。

ミニスカに、背中に盛大に穴が開いてるＴシャツ（？）にハイヒール。

格好だけならまだいい。

問題は、お前はいつ女になったんですか？

男ですよ？あなた男ですよ？

いつ、性転換手術をお受けになったんですか？

なんなんですか？そのスタイル抜群で、なおかつボンキュボンかなり魅力的なお身体は？

ああ……男って悲しい生き物だな……。

巫が男だっ て分かってんのに、下半身が元氣になっちゃってるの。

どうしましょ。マジでどうしましょ。

下半身が滅茶苦茶元氣になっちゃってんだけど。

立てねえ。立ったらバレル。

ちよっ と動いたらバレル。

かなりヤベエ。

治まれ。興奮すんな俺の下半身！いくら魅力的な身体をしててもあいつは巫だ。

巫なんだ、男なんだ！
だから生まれ俺の息子！

「零君？まさか僕が魅力的すぎて興奮してんの？」

「んな訳あるか！」

言わないで！お願いだから言わないで！
俺のハートが傷つくから！

「あ。どうせならこの姿でキスしてあげたらよかったね。してあげるよ」

巫が悪魔の笑顔で俺に迫ってくる。
じりじりと壁に追いやられる。
がっしりと肩を掴まれる。

なんなんですか、この手は？この手はなんですか！？

ぎりぎり強く掴まれてるけど！？

ぎゃあああああああああ！

やめて！顔を近づけてこないで！

巫の顔がまさに目の前に！

「やめて！やめてください！男にキスされるなんてやだあああああ！
あ！なんでお前はそう俺にキスしたがるんだ！やめて！マジでやめて！
ぎゃあああああああああ！」

巫の唇が俺の唇に触れてきた。

しかも舌まで入れてきやがった！

さつきよりも濃厚ですよ！？

昇天しそう……。 「零く〜ん、大丈夫？」

巫が俺の顔色を覗きながら訊いてくる。
大丈夫じゃねえよ。大丈夫な訳あるか。

なんで俺が二度も男にキスされなきゃいけないんだよ！？
ハルとクーレがドン引きしてるよ！？

「なんかごめんね？」

そんな可愛く首傾けながら言うな！
てか、謝り方めっちゃ軽！

「いやー、零君ってホント弄り甲斐あるね。楽しめたよ。ありがとう」

何？俺はそんな軽い理由で、男に唇奪われたの？

しかもありがとなんて言われたよ。

あはは……死ねばいいのに……。

「それよりさ……なんでそんな格好してんの？」

「そりゃあ、クーレちゃんと買い物するためだよ」

………はあ？

「男の僕が巫装束着て、女の子と買い物してたら目立つでしょ？だからだよ」

いや、何も女になる必要ねえだろ？普通の格好したらいいだろ？
なんで女になつてんだよ。意味分かんねえよ。
どんだけ意気込んでんだよ。

「たった三日間でも楽しむ時は楽しまなきゃ。零君は今日、祐司君と会っんでしょ？」

「うん、まあ」

「ハル君、どうする？僕達と一緒に来る？零君達と一緒にいる？」

いきなりの巫の質問に、ハルが困ってるし。

「えっと……零さんと一緒に行きます」

困った顔のままそう言った。

まあ、巫と一緒にいたくねえからだろな。

クーレが一人にしないで！みたいな顔してる。

クーレ、頑張れ！「じゃあ、行ってくるよ！二人も楽しんできてね！」

巫が滅茶苦茶ハイテンションな笑顔で、手を振る。

クーレはちよっとローテンション気味。

まあな、うん。流石の巫もクーレには悪いようにはしねえだろ。

俺は被害に合ったけど。

したら即行警察にぶち込みだよ。

「悪い、クーレ。無事で帰ってこいよ」

ハルが隣で呟いた。

「ハル、犠牲はつき物だ。まあ、クーレには悪いようにはしねえよ」

「零さんはされてましたけど」

うん。そうだね。それを言わないで。

さっき奈央人にも慰められたよ。

今は俺の肩にしがみついている。

奈央人がいきなり俺の中から出てきたもんだから、ハルは叫んでたけど、クーレは特にリアクションなしだったな。

「とりあえず、行くか」

「はい」

大学の近くの公園に入る。

祐司と待ち合わせする時はいつもここで待ち合わせる。

祐司の姿が見えた。誰かと喋ってるのか？

「おー祐司……って、なんでお前までいんの？」

なぜか白銀がいた。「おー零。ここに來たらいたんだよ。で、今まで話してた」

【そうなの？】

【ウン。食事シテタラ來タンダ】

あれ？ちょっと待てよ。

【なあ祐司、俺の言ってること分かるか？】

「ああ。昨日は分からなかったのに、今日は分かってびっくりしたぞ」

確かに昨日は分かってなかったよな。なんでだ？
白銀を見る。

【タマニネ、イルンダヨ。 “オニ” ノ存在ヲ認識スルト、言葉マデ分カル人間】

へえ……。意外な才能だな。
そういう人間が被い師になったりするのかな。

「なあ祐司、俺の背中のかいつ、見える？」

指で奈央人を指す。
祐司に見られた途端、首から腕を離して、背中に隠れる。
人見知りなんだよな。

「見えるな。背中に隠れた」

完璧見えてんじゃない。

「……こんなとこに突っ立ってても仕方ないから、どっか行くか」

「そうだな。とりあえずマクドでも行こうぜ」

「そうするか」

【白銀も行くか？】

白銀が一瞬、祐司を見る。

【ジャア、ソウスル】俺と祐司、白銀と俺の肩にしがみついて離れない奈央人の四人（？）で、ハンバーガーを食べる。

まさかこのメンバーでマクドとわな。

まあ、奈央人は霊体だから食べねえけどな。

あれ？食べんのか？どっちだっけ？

白銀がハンバーガーをじっと見る。

食ったことねえのか？

その様子を祐司が面白そうに見る。

【食ったことねえの？】

【ソリヤアネ。食ベタツテ栄養二ハナラナイシ】

そりゃそうか。俺だってそうだしな。

【奈央人も食うか？】

ふるふると首を横に振った。

【零、イクラナンデモ霊体ノママジャ食ベレナイヨ】

【霊体のままじゃ？】

【実体化出来レバ食ベレルヨウニナルンダヨ。訓練シナキヤイケナイケド】

【へえ……】

実体化か。そんなことも出来んだ。

【実体化しなくてもね、お兄さんの味覚が伝わってくるから、大丈夫だよ】

遠慮がちにおずおずと言ってくる。

てか、味覚とか繋がってたのか。「そうそう、零」

「なんだ？」

祐司がポテトを食べながら椅子に凭れる。

口元が少し笑ってる。

お？なんか面白い話でもあんのか？

「他の奴らが話してたことなんだけどな車に乗って時速八十キロのところ腕を外に出すとな、胸を揉む感触に似てるらしいぜ？」

「へえ……」

胸を揉む感触に似てるか……。

確かにいいよな胸って。あの感触はたまんねえよな。

じゃねえよ。そいつら時速八十キロも出して、何アホなことしてんだよ。

「そいつらよっぽど暇なんだな」

「しかもな、卵形のカプセルを作って、その中に人を入れてその風を当てれば、疑似体験出来んじゃないかって話してたぞ」

まあ、可能性はないとは言えねえけど、時速八十キロの風だぜ？

気持ちいいんじゃないやなくて痛えよ。

「そいつらやっぱ暇なんだな」

「もう真顔で真剣に議論してるもんだから、傑作だったぞ」

ちよつと見てえな。その真顔で真剣に議論してる。白銀がハンバーガーを食べ終わって、じっと見てくる。

【どうかしたか？】

【イヤ、人間ッテソウイウコトデ盛り上がりルカラ、スゴイナァッテ】

別にそこまで盛り上がった記憶はないけどな。
まあ、“オニ”は確かに人間がするようなアホな話はしなさそうだよな。

「とりあえず皆食べ終わったし、出るとすつか」

「そうだな」

「で、どうするよ？」

「いつも通り適当にぶらぶら」

「だな」

んーっと背伸びをする。白銀はどうすんのかな？

【白銀？】

白銀が店の裏側をじっと見て動かない。

【零、気ヅカナイ？】

【え？】

【コノ匂イ】

言われて匂いに集中してみる。

【……………血の匂いだ】

【近クニ、“オニ”ガイルヨ】

うん。それは分かる。でも、ここでやんのか？

店内に人間は大勢いるし、見られちゃヤバイ。

それに、祐司もいる。

非常に戦い難い状態だ。あ、いけね。ハルのこと忘れてた。

さつきから一言も喋らねえから、すっかり空気になっちまってるよ。

「ハル、お前自分の身を守る自信ある？」

「え……………すみません。ないです。ある訳ないです」

だよな。化物相手だもんな。

しかも血の匂いがするということはだ、確実に人食いの“オニ”だ

よな。

白銀の目が黒に変わる。臨戦態勢に入った。
しかも血の匂いが近づいてくる。

“オニ”が近づいてるってことだよな。

【来ルヨ】

その瞬間、唸り声と共に“オニ”が現れた。

【グルルル……】

【……………】

現れたのは七つの頭、七つの目、七つの角に鷲のような尻尾を持つ
たかなり体格のよろしい“オニ”。
ひとつの頭が人の足をくわえてます。

【白銀さん。あれはなんですか？】

【アレハ、キリムダヨ】

うん。名前なんかどうでもいいな。

「零、どうするんだ？」

「そんなの決まってるだろ」

「うん？」

「走って逃げる！逃げるが勝ち！皆で全力疾走！」

悲鳴に近い掛け声と共に、皆一斉に走り出す。

だってあんなの相手にしたくねえもん！

追いかけてきたけどなあ！ 【ぎゃあああああ！】

キリムだかカリブ海だか知らねえけど、足早え！

あんなデカイ図体して行くせに、あんだだけ足早えなんて反則だろ！
白銀が周りを見ながら走る。

【何してんだよ！？】

【幻影デ人間二僕達が見エナイヨウニシテルンダヨ】

ああ、なるほどな。白銀はいいけど、俺と祐司とハルは何もないのに、バカみたいに悲鳴上げながら走ってるようにしか見えねえもんな。

なんとなく後ろを振り向く。

キリムが俺を見て、笑いやがった。

そして、跳躍。

飛びましたよ？俺達の頭上を越えましたよ？

そして三メートル先に着地。

滅茶苦茶笑顔で待ち構えてるよ！？

ちつきしょう！逃げ場ねえよ！

仕方ねえ！

【白銀、自分で飛べるよな？】

【アア、ソウイウコト。大丈夫】

「ハル、祐司、舌噛むなよ！」

「「えっ？」」

二人の声が見事に重なる。

右脇に祐司、左脇にハルを抱える。

で、地面を思い切り蹴って、キリムの頭を踏み台にして、民家の屋根に飛び移る。

で、そのまま他の屋根に飛び移りながら逃げる。

キリムは追いかけてこない。

そろそろ地面に下りて大丈夫かな。「零、お前どこでこんなアクロバットな動き覚えてきたんだ？」

「あの変態野郎と一緒にいたら、嫌でも覚えちまうよ」

なんかいろいろとさせられたもんなあ。

「あの、手が腹に食い込んで痛いんですけど……」

「ん？あ、悪い。下りるまで我慢してくれ」

指が食い込んでるもんな。痛えのは仕方ねえか。

【零、下リテル暇ナイヨ】

【え？】

後ろを振り向いた時だった。

バギャン！つと音と共に、キリムが屋根を踏み潰しながら追いかけてきた。

【ノオオオオオオ！】

再び屋根を飛び移りながら逃げる。

てか、屋根の上にいたら被害に合う家が増えんじゃんか！

俺のせい！？なんかごめんなさい！

人気のない場所っていったら、やっぱ空き地？

そこまでキリムを誘き寄せよう。屋根から飛び下りる。白銀も後についてくる。

大した衝撃はなく着地。

二人はなんとも言えねえ顔をしてるけど。

まあ、飛んだり落ちたりしてるもんな。

【モタモタシテル暇ナイヨ】

【分かってるよ】

キリムが俺達を追いかけて、屋根を飛び下りた。
全く、しつけないなあ。

「ハル、祐司、まだ我慢してくれよ」

「はい……」

「おう」

ハルはなんだか元気ねえけど、祐司は大丈夫みたいだな。

しかしここまで激しく動いて疲れねえなんて、やっぱ化け物の体力
つてすげえなあ。

なんて暢気に思ってたなら、キリムが俺のすぐ横の壁を粉碎しやがった。

ちつきしよー！足早えよこの野郎！

待ってる！後でその首もいでやる！空き地まで誘き寄せるのはいいとして、ハルと祐司をどつかで下ろさねえと。

【白銀、幻影で時間稼げねえ？】

【ヤツテミル】

【悪い。俺はハルと祐司を安全な場所に連れてくから！】

【分力ッタ】

白銀が立ち止まってキリムを睨む。

キリムが白銀に爪を振り下ろす。

見当違いの場所に。

きっと幻影で惑わされてるんだな。

この間に急いでハルと祐司を安全な場所まで連れてこう。

安全な場所といってもあんま思いつかなかったから、俺ん家の近くの公園で二人を下ろす。

「戻るのか？」

「ん？ああ。白銀一人じゃキツイからな」

「分かった。怪我すんなよ」

「おう。じゃ、戻るわ」

走って戻る。祐司の怪我すんなはちょっと無理のある言葉だなあ。まあ、怪我してもたちまち治っちまうから問題なだけだな。走ってる途中で、白銀の匂いが移動してることに気づく。学校の近くの空き地に移動してるみたいだ。俺もそっちに向かう。

空き地の近くまで来た。

見晴らしがいいから、キリムと白銀の姿がはっきりと見えた。白銀は疲れてきてるのか、動きにキレがねえ。がしつと足を捕まれた。

【白銀！】

地面を蹴って飛び上がる。その間に爪を伸ばして振り下ろす。

【ギアアアアアア！】

キリムの腕が血飛沫を上げて、地面に落ちる。

白銀は俺の後ろに着地する。

【遅イ】

【悪い】

見ると、キリムはみつつの頭が虚ろな目をして、だらしく舌が出てる。

白銀の体力がここまでしかもたなかったのか。

後は、俺がやるっきゃないか。【ギアアアアアア！】

キリムの絶叫と共に、首がひとつ地面に落ちる。
残りみつつ。

俺を振り払おうと、暴れる。

首から落ちそうになったから、頭に爪をぶっ刺す。
更に凄まじい絶叫が上がった。

当たり前か。生き残ってる頭に長い爪をぶっ刺されるんだもんな。
多分、脳髓まで爪が届いてるだろうな。

爪を引き抜いて、ついでに頭ふたつ同時に切断して、白銀の隣に着地する。

残りひとつ。止めを刺そうと踏み出した時だった。

【貫け】

女の人の凜とした声と共に、赤い光がキリムの心臓を貫く。
地面に倒れる前に、悲鳴もなく灰となって霧散した。

キリムがいた場所に、女の人が一人立ってる。多分抜い師。
セミロングの髪に丸眼鏡。

綺麗なのに滅茶苦茶無表情。無表情のせいで綺麗なのがちょっと台無しだ。

ひとつ気になることがあるんだよな。

右手にゴーヤを持つてるのはなぜですか？

抜い師だから杖は分かる。でも、ゴーヤはなんですか？

ゴーヤの使用用途が全然分かんねえ。

「君、巫のところの食人鬼なのね？」

「え？はい」

「巫から話は聴いてるのね。……触り心地のよさそうな二の腕なのね」

うん？触り心地のよさそうな二の腕とはどういうことでしょう？
ボソツと呟いたぞ、この姉ちゃん。俺の二の腕ガン見だよ。
俺の二の腕狙われてる……？

「ウソ！？ムツキさん！？」

びつくりして後ろを振り返る。

ハルと祐司がいた。この二人なんで戻ってきてんだろな。安全な場所まで連れてった意味ねえじゃん。

「なあ、お前らなんで戻ってきてんの？」

「悪い。やっぱり気になって」

まあ、心配してくれんのはいいけどさ、キリムがまだ生きてたらどうすんだよ。

「あ、あの、ムツキさんもこっちに来ちゃったんですか？」

ハルがおどおどとした様子で訊く。

ムツキさんと呼ばれた姉ちゃんは、無表情でじっとハルを見る。
てか、睨んでる。

「私は君のこと知らないのね。なんで、私の名前知ってるのね？」

「え？いや、そんな……。髪の色とか違うけど……。あれえ？」

そういえば、普通に考えておかしいよな。
ここに来たばかりのハルが、この世界の人間を知ってるはずがねえんだ。

どういうことだ？

「君、もしかして《迷い子》なのね？」

「あ、はい」

「なるほどなのね。きっとドッペルゲンガー現象なのね」

ドッペルゲンガー現象？自分と同じ姿をした奴に出会って死ぬってやつか？

「そのドッペルゲンガーと違うのね。私が言ってるドッペルゲンガー現象は、同じ人間が同時に異世界に存在していることを言ってるのね。君の世界に私がいるってことは、この世界の君も存在してるのね」

この姉ちゃん、俺の心読んだ？

まあいいけど、どんなスケールだよ。

もしかしたら、俺もハルの世界にいたりしてな。「そんなことがあるんですか……」

ハルが染々と呟く。

この世界って、いろんな不思議に満ち溢れてんだな。

「それにしても、あの二人は遅いのね」

あの二人？まだ誰かいんのか？

ハルは心当たりがあるのか、うつわあみたいな顔してるし。
ハルが何か言おうと口を開いた時だった。

「もー、ユメタン早すぎだよ」

「ほんまやで。やあつと追いついたわな。まあ、その分“オニ”を早く片付けられるからええけど」

男が二人現れた。一人は前髪が少し長めで目が見えにくく、ちょっと痩せっぽちに見える。

もう一人はかなり短い髪に、厳つい顔つき。

比例してかなりよろしい体格をしてる。例えるなら某人気アニメのジャイアン。

「アズマさんにシロさんまで……」

あの二人も知ってるのか。

まあ、正確にはあの人達本人じゃねえけど。

「ユメタン、僕ちん走って疲れちゃった。僕ちんをい、や、し、て」

アズマとかいう奴が、気持ち悪い声音で言ったかと思うと、なんとムツキさんの胸を背後から鷲掴みにしやがった。

これには祐司もドン引きしてる。

シロさんとかいう人とハルは、見慣れてるのかやれやれといった感じで見てる。

てか、被い師って変態多くねえか？ハアハアと鼻息を荒くしながら、ムツキさんの胸を揉むアズマ。

きめえ。きめえよこいつ。

ムツキさんが無表情なのに、更に表情がなくなってきたよ。

ちょっと俯いて、眼鏡の奥の目がキラリと光った。
その瞬間、

「へぶしっ!」

アズマの顔に、ゴーヤがぶっ刺された。

顔のど真ん中に、ゴーヤが綺麗に陥没してる。

そして、ぶっ倒れた。まあ、変態はほつといっても大丈夫だろ。

なるほど。ゴーヤは立派な武器だったんだな。使用用途完璧間違ってるけど。

「ごめんね。こいつちょっとおかしいの」

いえ。あなたも十分おかしいです。

誰かゴーヤの正しい使い方教えなかったのか？
本人には口が腐つても言えねえけど。

【しっかし久しぶりやなあ、白銀】

【久しぶりだね、シロ】

あ、そうか。巫と知り合いなんだから、白銀のことも知ってて当たり前か。【ホント、白タン久しぶりだよね】

はや!もう復活しやがった。

顔にはゴーヤがまだぶっ刺されたまんまだけど。

あつ、ムツキさんが足で肩を押さえて引っこ抜いた。

この人達が分かんねえ……。

シロさんはまだまともそうだけど。

【白タン言ウナ、ド変態】

白銀に白タンって。まあ、確かに可愛い容姿してんのは分かるけど。

【僕ちん変態じゃないもん！ちょっと欲望に忠実なだけだもん！】

両手を上げながら抗議してきた。

変態だろ。お前確実に変態だろ。女の人の胸いきなり揉むって変態だろ。

【それが変態ゆうんや】

シロさんが冷たくアズマを一蹴。

【わーん！その君、僕ちん慰めて！】

と、言ってハルに抱きついた。

「抱きつかないください！あつちでは男に興味なかったはずなのに、こっちのアズマは男でも見境なしなんですか！？」

ハルが必死に引き離そうとする。

全く微動だにしねえけど。

シロさんが溜息を吐くと、アズマを引き離した。

そして、ムツキさんがアズマの大事な部分にゴーヤを一刺し。

怖え。怖えよこの姉ちゃん。やっぱ怖えよ。

躊躇なく大事な部分にゴーヤをぶっ刺したよ。

アズマは泡を吹いて、流石にダウン。「零君」

「は、はい」

いきなりムツキさんに呼ばれた。
無表情だけど、真剣なのが伝わってくる。

「《亀裂》の脅威が牙を剥くのは、これからなのね。まあ、もしかしたら不発の場合もあるかもだけど」

《亀裂》の脅威……？確かに、危機的状況の割には、巫なんて買い物とか緩みきってるよな。

これから襲い来る脅威の前に、楽しんどこうってどこか。

「後ね、被い師には心を許さないことなのね」

「へ？」

心を許さないこと？なんで？

確かに変態は多いけど、巫もなんだかんだ言っていていい人だし。

この人達もいい人だと思う。

ムツキさんがシロさんを見る。

「要するにな、被い師には“オニ”をゴミ程度にしか思っくらん奴の方が多いんや。中には恨んどる奴だっておる。“オニ”に友好的な被い師はホンマに少ないんや。巫はへらへらした奴やけど、信頼に値する奴や。でもな、他の被い師は簡単に信じるな。つけ込まれて、被われるかもしれんからな」

簡単には信じるな、か。

誰も信じたらいけないって、辛いな。

「さて、私達はそろそろ行くのね」

「おう」

「いつまで寝てるのね」

「げふうっ！」

アズマの大事な部分に、ムツキさん強烈な一蹴り。
駄目だろ。それは駄目だろ。

ホント分かんねえよ、この人達。「じゃあな、また会つかもな」

「間違つて被われないようになのね」

シロさんが右手を振りながら、左手でアズマを引き摺りながら行く。
未だに泡を吹いてる。

で、ムツキさんは不吉なことを言い残して行きやがった。
なんだったんだろうな……あの人達。

「なあハル、お前の世界でもあの人達、あんなん？」

「そのものです。てか、もうちょい強烈です」

あれより強烈つてどんなんだよ。
想像つかねえよ。

「とりあえず、この後どうするんだ？」

「とりあえず、気分転換で買い物でも行くか？」

「そうだな」「……………なあ、祐司君よ」

ハルと白銀が不憫に思えてきて、祐司に声をかける。

「なんだ？」

「まだ、続けんのか？着せ替え」

そう、今、ハルと白銀は祐司に着せ替え人形の如く、服を着せては脱ぎ、着せては脱ぎを繰り返してる。

祐司のここが分からねえ。自分で着る服は適当なくせに、他人の着る服にはすげえこだわるんだよねあ。

俺も服にはあまり興味ねえから、適当だ。

【白銀、大丈夫か？】

試着室のカーテンの隙間から白銀が見えないようにして、カーテンを開ける。

人間の服を着てるから、白銀は見えなくて服だけ浮いてるような見え方したら大変だからな。

【疲レタヨ……】

「ハルは大丈夫か？」

「はつきり言っただけ疲れました……」

だろうな。俺も体験したから分かるよ。

【もう少ししたら気がすむと思うから、我慢してやってくれ】

【……………】

不機嫌だ。確実に不機嫌だ。

「ハルももうちょい辛抱してくれ」

「はい……」

それから二十分くらいして、やっと終わった。

白銀は何も買ってねえから、疲れただけで終わり。

ハルはジーパンとTシャツ、黒いパーカーを祐司がプレゼントしたみたいだ。「もう四時過ぎか」

祐司が時計を見る。つーことは、服選びに一時間半もかかったのか。

「今日は帰るか？ 零だっているいろいろあるんだろ？」

「んーまあ、そうだな」

「じゃあ帰るわ。邪魔になるだろうし。じゃあな」

「おーじゃあな」

邪魔してくれて構わねえけどな。はっきり言って行くのやだもん。《亀裂》の脅威はこれからが本番って言われたんだもん。はあ……。これからどんな目に合うんだろうなあ。

【零ノ友達ツテ、皆アアナノ？】

【皆って訳じゃ……】

梨未は……天然おとぼけキャラ。

香里菜は……女らしさの欠片もねえ暴れん坊。
皆一癖あつたわ。そんな訳あつたわ。

【皆一癖も二癖もあつたわ】

【フーン……頑張ッテ】

頑張ってって何？

「とりあえず、帰るか」

「あ、はい」

服を広げてじつと観察してたハルが、慌ててついてきた。「んー？」

玄関のドアを開ける。すると、靴の数が多い。

誰か来てんのか？

部屋のドアを開ける。

「あ、おかえり〜」

巫が手を振ってくる。ちなみに男に戻ってる。

まあ、巫とクレーは問題ないわな。問題なのは、なんで俺ん家に先
程会ったばかりの変態三人衆がいんの？

いっぺんドアを閉める。で、もう一度開ける。

さっきの光景と変わりなし。幻覚と見たかったんだけどな……。

「巫、この家零君のなのね？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「一度も聴いてへんで」

この野郎。いつ俺ん家は被い師や“オ二”の溜まり場になったんだよ。

「で、俺ん家で大事な会議でもしてんのか？」

「そんなとこかな。昨日ね、この街全体に大規模な結界を張ったんだ。今、結界に綻びがないか確認しあつてたんだよ」

「結界って、どんな結界？」

「人間にどんなことが起ころうと、“オ二”に関することは一切認識出来ない結界と、“オ二”はこの街から一切出入り出来ない結界との、二重結界」

そりゃ大規模だ。この街全体って、どんな大がかりな結界だよ。

「それを、この人達と張ったのか？」

「そゆこと」「でさ、この後どうすんの？」

「何って、勿論僕と一緒に行動」

やっぱそうなんのか。まあ、仕方ねえといえは仕方ねえか。

「ハルとクレーは家に置いとくのか？」

「危険だからね。場合によっては、本当に死ぬからね。万が一のために、オルトロスを置いてく」

それだけ、危険なのか。まあ確かに、ただの人間にあれば危険だな。

「封印解くのか？」

「うん。もう行くしね」

はや！もう行くのかよ！？もう空が白み始めてるからか。オルトロスの首に手を当てて呪文を唱える。

一瞬でライオンくらいの大きさになる。

生半可な“オニ”はばっくり食っちゃったりしてな。

「君達、僕達が帰ってくるまでおとなしくしててね」

「はい」

二人の声が見事に重なる。

「じゃ、行くよ」

答える前に巫が杖を鳴らす。ホント強引だなこいつは！目を開けると、昨日来た山ん中。

あの浮遊感、何回も味わったから慣れちゃったな。最初はちょっと気持ち悪かったけど。

なんたるな。ざわざわと騒がしい。

山が、騒いでる。落ち着かねえ。

「零君、どうかした？」

「いや、なんか落ち着かねえなあって」

「ああ、山の妖精達が騒いでるからね。異世界の“オニ”が街に出ようとするのを、防いでるんだよ」

防いでる、か。今からその“オニ”を抜いに行く訳だよなあ。

「じゃあ、私達は行くのね」

「うん、じゃあね。アズマちゃん、またあの姿で相手してあげる」

アズマの肩に手を回して、なぜか頬をつつく。
気持ち悪い。気持ち悪いよこいつ。
女の姿で何やったんだよ。

「いや、いいよ？遠慮しとくよ？」

「喜んでたく、せ、に」

「喜んでないよ！？僕ちん喜んでないよ！？イヤアアアア！ユメ
タン置いてかないで！」

……………なんなんだろうな。この人達。「さあ、て、行こうか」

うん。緊張感の欠片もねえな。行くぞー！なんて言いながら、笑いながら片腕を空に向かって突き出してるし。
まるで今から遊びに行くみたいなの雰囲気だな。

まあ、重苦しくて堅苦しいよりはマシだけど。

「なあ、バキバキって音、気のせいじゃねえよな？」

さつきから木を薙ぎ倒すような、バキバキって音が近づいてきてんだよな。

「気のせいじゃないよ。あんまり強くない“オニ”みたいだから、零君に任せるよ」

俺かよ！いきなり任されても困るよ！？

てか来たああああ！

何あれ！？超巨大ビーバーみたいな化け物だけど、何あれ！？

あの巨大な歯に捕まったら、確実に上半身と下半身真っ二つですよ！？

てか巫の野郎、いつの間にか高い木の枝に座ってやがるし！

【ギャアアアアアア！】

つーか俺に突っ込んできたし！完璧俺を目標にしゃがったな。

猪突猛進って言葉が似合うほど、馬鹿正直に真っ直ぐ突っ込んでくる。

あ、避けるの簡単だな。爪を伸ばす。

跳び箱の要領で、少し地面を蹴ってビーバーの頭を飛び越える。

交差した瞬間に爪を一閃。

そして着地。後ろからドシャって音が聴こえた。

後ろを見ると、首と胴体が真っ二つ。

ふう……うまく切れてよかった。超巨体ビーバーの身体が霧散して、風に流されていく。

「いや、鮮やかにやれるようになったねえ」

枝から飛び下りて、笑顔で言ってきた。

「てめえ、何自分だけ安全な場所に逃げてんだよ」

「逃げたんじゃないよ。避難だよ」

一緒だろ。てめえの場合逃げたも避難も一緒だろ。
もうどうでもいいや。

ちなみにムツキさん達は、転移で別の場所に移動した。
まあ、それは置いといてだ。

「つーか、さっきの何？」

「アーヴァンク。元々は異世界の“オニ”なんだ。最初にこの世界で発見されたのが、ウェールズ地方のコンウィ川沿いにあるアーヴァンクの池に現れたから、アーヴァンクって名付けられたんだよ」

「へえ……」

「つーか、そんな情報どうでもいいや。」「しかし、おかしいなあ」

巫が首を傾げながら、腕を組む。

「おかしい？何が？」

「普通なら、“オニ”がもつというはずなんだ。こんな生温くない。森がもつと騒ぐはずなんだ。今は森が沈黙してる。まるで、何かに怯えてるみたいに」

「そうか？なんかざわわして落ち着かねえけどなあ」

実際、ざわざわと声みたいなきりなしに聴こえてくる。

「それは妖精の声だよ。森そのものは、沈黙してる。とりあえず、もっと中に入ろうか」

返事を待たずに歩き出す。

俺も後をついていく。あれから随分歩いてるけど、なんにも出てこねえ。

確か、《亀裂》の脅威が牙を剥くはずじゃなかったっけ？
生温いどころか、拍子抜けだぞ。

出てきたの超巨大ビーバーだけだし。

周りを見ながら歩いてたら、巫にぶつかった。

「巫？どうし……」

巫の視線を辿っていく。そしたら、目を疑った。
なんだ……これ。たくさんの“オニ”の死体が、転がってる。
バラバラにされて、どの死体も原型を留めてない。
濃い血の匂いで、鼻がおかしくなりそうだ。

【ドリアート！】

巫が木の傍でしゃがんで泣いてる、緑の髪をした女の子の“オニ”
に近づく。

声をかけられて、女の子が顔を上げる。涙で顔がぐしゃぐしゃだ。

【かん……な、ぎ……】

【ドリアード、何があった？】

【あいつら……普通じゃない……。あれだけの数の“オニ”を、何をしたか分からないけど一瞬で、バラバラにしたの……。他の子の木が犠牲になって……。死んだの。守れなかった、守ってあげられなかった……】

女の子の目から、涙が流れる。

【そいつらがどこに行ったか、分かる？】

【東の方に……。奥の方まで行ったわ。行くの……。？お願いだから、死なないで】

【大丈夫だよ。さ、零君行こうか】

黙ってついていく。巫が怒ってるように見えるのは、きっと気のせいじゃない。無言で歩く。俺と巫、二人の足音しか聴こえてこない。奥に進むにつれ、風の音さえしなくなる。

そして、妙な気配が大きくなる。

なんなんだ？すげえ胸騒ぎがする。

血が、騒いでる……？

その時だ。

ズ——ン

ズン

いきなり、地鳴りのような音が響いた。

「……………！？」

それきり沈黙。

「今は、まさか……………！」

巫はこの現象に心当たりがあるのか、険しい顔をすると走り出した。後を追いかける。

ちよつと走っただけで、立ち止まる。そこに、

【やあ、久しぶりだねえ巫。八十年ぶりだっけ？】

【……………百年と二百五十三日ぶりだ……………】

【やっぱり、お前達なのか——！】

巫がギリギリと拳を握る。

“オニ”が二人、静かに佇む。

一人は背が高く、肩にギリギリ届く長さの灰色の髪をしてる。

もう一人は忘れもしねえ。まさか、こんなところで会うとはな。

俺が噛まれた時にいた、あの高校生だ。高校生じゃなかったみたいだけだな。

それにしても、百年ぶりってどういうことだ？

まあ、それは今は置いてこう。

「巫、あいつら、何？」

「あいつらは……」「あいつらは……食人鬼の王族だよ」

うん？聴き間違いか？今、食人鬼の王族って言った？

あれ？確か、俺の存在がバレたらマズインじゃなかったわけ？
誘拐されるんじゃないかったわけ？

………どうなの、俺？

【でさ後ろの子さ、まさかとは思っけど、あの時の子？】

【だったらなんだよ？】

やべえ、普通に返しちゃったよ。はい、そうですねえも
んじゃない。

【へえそつかあ。あの時の君かあ。まさか、ボクの血族から自我を
保った血族が生まれるなんて、嬉しいなあ】

すごく無邪気に笑う。これが食人鬼の王族じゃなかったら、警戒す
る必要ねえのに。

【……荒神様も喜ばれる……】
あらがみ

【だよね？荒神様、喜んでくれるよね。ボクお手柄！】

その瞬間姿が消えたと思ったら、俺の目の前に現れた。

【なっ………！？】

俺の肩を掴んで、にっこりと笑う。

俺よりちっせえくせにどんな力してんだよ！全く振りほどけねえよ！
王族だからか？俺のことをボクの血族とか言ってたけど、俺はこいつの下僕みたいなもんってことか？

そんなことを考えてたら、首筋をおもいつきり噛まれた。
長い牙が深々と突き刺さる。

【いっ……！】

【零君！】

巫がお札みたいな物を投げる。

とっさに避けたから、お札は王族を掠めもせずに燃えて霧散する。
なんだ……？身体が熱い。心臓が、痛い。

たまらず膝をつく。

【零君？柚螺^{ゆい}、お前何をした！？】

【何って、ボクの毒を流し込んだんだよ？】身体がひたすら熱い。
まるで、身体の内側から炎に炙られてるみたいだ。

【苦しい？ごめんね。毒が身体に馴染むまでちょっと我慢してね】

この野郎。何可愛く唇に指を当ててんだよ。

てか、毒が完璧馴染んだらヤバくねえか？

王族の毒ってことは、俺を噛んだあの血族より強い毒ってことだよな？

そんな毒が馴染んだら俺自身の毒も強くなるし、食人鬼の血も更に濃くなるってことじゃねえのか？

嫌すぎる。

【お前達、何をするつもりだ？いや、ここで何をしていた？】

巫が俺を背後に庇いながら、王族二人を見据える。

【何って、ボクらが元々いた世界に《亀裂》を繋いで、仲間を呼んでる途中なんだよ】

それを聴いた瞬間、巫が拳を握った。見るからに、怒りを必死で抑えてるみたいだ。

【また、無理矢理《亀裂》を開いたのか！？お前達は、また、百二十年前の惨劇を繰り返すつもりなのか！】

【惨劇？あんなのはただの余興だよ。君達“まざりもの”に封じられた荒神様の本体を取り戻して、今度こそ荒神様が望む闇に、この世界を染め上げる】【……柚螺、喋りすぎだ……】

灰色の髪をした王族が柚螺とかいう奴を、諭すように言う。

てか、あいつ男か女かマジで分かんねえだけど。

【いいじゃん伽屢亞。^{かろあ}“まざりもの”に頼らないとまともに戦えない被い師に、何が出来るっていうのさ？】

【……それはそうだが……】

てか、“まざりもの”とか百二十年前の惨劇とか、全く話が分かんねえし。

巫がそれを体験したみたいに話すのも、不思議だ。

【それにね巫、勘違いしてるけど、何もボクらはこの国を滅ぼすつもりはないよ？滅ぼしたら、計画がダメになっちゃうからね。あの時は予想以上に時空間が不安定になって、あんなことになっちゃったんだよ。ボクらがなんのために《亀裂》が開くの待ってたと思う？時空間の負担を減らすためだよ。確実に《亀裂》を繋いで、仲間を呼ぶためにね。時空間が元々不安定になってるから、繋ぎやすかったよ。この瞬間をどれほど待ったことか。今度こそ荒神様のために、この世界を闇に墮として、支配する。邪魔する者は、皆殺しだ】

柚螺が、いつそ優しい目で、俺を見る。

【君は準備が出来たら、迎えに行くよ。それまで、待っててね】迎えにくるって……勘弁してくれよ。なんて言ったら今この瞬間に誘拐されそうだな。

それよりも、身体が熱い。動かないはずの心臓が動いてる。心臓が脈打つ度に、炎が身体を這いずり回ってるみたいだ。心臓が、痛い。

【か……んな…ぎ…】

巫の服を掴む。

熱い。熱くて痛くてたまらない。

地面にうずくまる。

【零君？零君！？】

巫が俺の肩を揺さぶる。

心配そうな声に、返事を返せない。

【心配しなくても大丈夫だよ。もうすぐで終わるから】

【ふざけるな！柚螺、本当は何をした？】

【だから、毒を流し込んだんだよ。毒が身体の造りを根本から変えてるから、苦しいんだよ。毒が馴染んだら、君は晴れてボク達王族の仲間入りだよ】

柚螺の嬉しそうな声が、耳に響く。

俺が、王族……？しばらくして、熱さと痛みが引いて呼吸が整ってきた。

あの熱さと痛みが嘘みたいだ。

でも、熱さと痛みがなくなっただってことは、毒が身体に馴染んだってことだよな？

馴染んだってことは、俺の中に今流れてる血は単なる血族の血じゃなくて、王族の血ってことだよな？

王族ってことは、単なる血族よりも危険な存在になったってことだよな？

柚螺を見る。俺に向ける目が巫に向ける、敵を見る目と違う。

そんな目で俺を見るなよ。確かに今の俺は食人鬼だ。

生きるために人間を食うさ。

けど、人間を捨てる気はねえよ。

矛盾してるのは分かってる。

それでも、人間を捨てる気はねえんだよ。

てめえらに利用されてたまるか。

【来たみたいだね】

【……やっとだ……】

柚螺と伽屢亞が背後を振り返る。

瞬間――

空間にビシッと、

《亀裂》が――

【はははは！久しぶりだなあ！柚螺、伽屢亞！あかつき曉は元気か！】

【ここが、地球という世界か。まだまだ白いのう。闇が足りん】

【だあかあ、それをこれから漆黒の闇に染めるんだよ！楽しみだなあ！ワクワクするねえ！】

【……疲労困憊】

【あそこにいる子、王族にしたんですか？】

《亀裂》から、男女五人の王族が現れた。こんな時にこんなこと言うのどうかと思うけど、王族個性的すぎだろ。

なんだよ身長二メートル越える大男、その大男の肩に座る見た目五歳の女の子、刀を何本も背中に背負ったひよろひよろの男、真っ白に着物を着た女、頭に鹿（？）の骨を乗せて真っ黒い山伏の衣装を着た男。

その全員が俺を興味津々で見る。

【柚螺、あの子連れて行くのですか？】

鹿の骨を頭に乗せた男が口を開く。

【いや、まだだよ。準備が出来たら迎えに行くんだ。あの子は切り札になる……】

俺が切り札？さっぱり意味が分からねえ。

さっき開いた《亀裂》が、更に拡がっていく。

【じゃあね。ボク達がこの世界を闇に沈めていくところを、指をくわえて見てるといいよ。まずは、下準備だね】

俺に視線を向ける。俺は睨む。

【狩真 零君、くれぐれもボク達が迎えに行くまで、被われたりしちゃダメだよ？】

いや、来なくていいです。つーか来ないでください。

王族全員が《亀裂》の中に入っていく。

全員が入った途端、《亀裂》が強烈な光を発して音もなく閉じた。

光が消えた後、《亀裂》が開いた空間は何事もなかったかのように、静かだ。

「あいつら、行かせてよかったのか？」

「あのね、柚螺と伽屢亞は王族の中でも特に強い王族なんだよ？しかも知らない奴が五人。いくら僕でも、同時に相手にするのはいくらなんでも無理だよ。と言うより死ぬ」

やっぱそんなに強いのか王族って。

「それよりも零君は自分の心配した方がいいよ」

自分の心配か……。そうかも。

「なあ、巫」

「何？」

「俺さあ、これからどうなの？あいつらみたいになっちまうのか？」

王族ってことは、被い師にも確実に目をつけられる対象ってことだろうし。

王族は王族で、俺に目をつけてるし。

王族の血が流れてる以上、あいつらみたいにならないとは限らねえ。この世界を闇に堕とそうとする、あいつらの仲間にならないとは限らねえじゃねえか。

「零君は零君だよ。奴らとは違う。奴らに零君は渡さない。奴らの道具になんかさせない。僕達を守るから。でも、零君にも少しは強くなってもらわないとね」

強くかあ。覚悟を決めないとなんねえんだな。「っーかさ、あいつらほつといていいのか？」

ほつといたら確実にマズイよな。あいつらが行動するのを許すってことだし。

「いや、ほつとく訳にはいかない。いかないけど、追えないんだ」

「なんで？」

「奴らがいるのは、この世のどこでもなければ、地獄でもない。この世と地獄を繋ぐ狭間のどこかなんだよ。狭間のどこかに奴らは空間を作って、拠点にしてる」

でも、それなら狭間にいるのは分かってるんだから、追えるんじゃないのか？

「奴らは僕達が感知する前に、移動するんだよ。いくら追っても追っても、すり抜けてく。本当、いたちごっこもいいところだよ」

頭を掻きながら悔しそうに言う。

もうひとつ、訊きたいことあるんだよな。

でも、それは訊いちゃいけない気がするんだよな……。

巫が俺を見る。

「零君、僕に聴きたいことあるんじゃない？」

めっちゃバレてるし。俺、表情に出やすいのかなあ？

「あのさ、“まざりもの”とか百二十年前の惨劇とか、何？」

「あー……そのことか。そうだよねえ……気になるよね……。そのことは長くなるから、ハル君達を帰してからでもいい？」

哀しげに笑う。そんな表情されたら、うんと言っしかないじゃねえか。

「あ……うん」

「ありがと。行こうか。ここにもう用はないから」

先に巫が歩き出す。

なんだろう。なんだか、巫の背中が儚げに揺れてるように感じた。山を下りる前に、あの髪が緑の女の子に声をかけた。

巫の姿を見て、号泣してたな。うまくなだめたもんだよ。で、今に至る訳だけど……。

【白銀さん……これはどういう状況でしょうか？】

なんか、チュパブラみたいな化け物が首を掻きむしって大量に死んでんだけど。

【何ッテ、襲ッテキタカラ幻影カケタダケダケド】

いやいや、それは分かるけど、これあれだろ？

某人気アニメの富竹の死に方じゃねえかよ。

何？白銀ってそういうの以外と知ってんの？

【ちなみに、どんな幻影かけたんだ？】

【身体カラ蛆虫ガ湧キ出テ、猛烈ニ喉ガ痒クナル幻影】

怖えよ。普通に怖えよ。やっぱひ。らしのなく頃に知ってるだろ。

白銀って、腹黒い気がするの俺だけか？

【そういえば、ここで何してたんだ？】

【気が向イタカラ、終ワッテナカッタラ手伝ッテアゲヨウカト思ッテ】

気が向いたからって、気分かよ。

【気が向いたらって、本当白銀は気紛れだなあ。まあ、元々から華^{はな}鬼^{おに}は気紛れだけど】

【気紛レデ悪カッタネ】

白銀が不機嫌そうにふくれて、巫がへらへらと笑う。
いつもの光景だ。「ただいまっ」と

ふー、やっぱり見慣れた我が家は落ち着くな。

ちなみに白銀はまた散歩に行った。ホント散歩好きだな、あいつ。
もしかして、悪戯で人間に幻影かけてたりしてな。

流石にそれはねえか。いや、やっぱり白銀のことだからありそうだな。
部屋の扉を開ける。

「あ、お帰りなさい」

テレビを見てたハルがこっちを向いて言った。

「ただいま。クーレ、気持ちよさそうに寝てんなあ」

オルトロスの腹を枕にして、実に気持ちよさそうに寝息を立ててる。
オルトロスも舌を出して、すんげえリラックスした様子で寝てる。
起こすの可哀想だな。このまま寝かせとくか。

「オルトロス、寝てたら番犬の意味ないじゃんか」

巫がオルトロスの鼻をつつく。

起きねえけど。

「俺達もシャワー浴びて寝るか」

薄暗く、痛いほどの静寂が包む空間。

所々灯りが点っているが、この空間に灯りを点すものは存在しない。あるのは、大理石のような石で作られたテーブルと、椅子だけ。

そのテーブルに、ひとつの影が静かに鎮座する。

影は小柄で、十五歳ほどの少年に見えなくもない。

ただ静かに頬杖をついていた影が、笑った気配がした。

【戻ったか】

影が呟いた瞬間、十の影がどこからともなく現れた。

【柚螺、伽屢亞、曉、漣、ささなみおとり鴻、くるは玄爬、らいじん磊塵、はおう霸鶯、からさき霞螽鶯、わぎつな倭欺紘、ただいま戻りました】

【皆ご苦労だった。ひとまず再会を喜ぼうではないか】

【荒神様、会いたかったよ！】

身長二メートルをゆうに越える男の肩から、五歳ほどの子供が影に抱きつく。

【玄爬、久しぶりだのう。五千年ぶりか。まだ五千年しか経つとらんとはな。して、状況はどうなっておる霸鶯よ？】

【セリアの制圧はほぼ済んだぜ？後は血族だけでも十分制圧出来る】

【そうか。またひとつ、世界が我が物になる……。楽しみだのう】

影は笑う。楽しそうに。「ん……………」

ふあゝっと欠伸をしながら寝返りを打ったら、何か柔らかい物体が当たった。

まあ、検討はついてるけどな。

布団を捲ってみたら、案の定巫。

「うゝん……………」

巫がぎゅうつと抱きついてきた。

おいおい……………またかよ。

引き離そうとして、巫の表情に目が止まった。

悲しそうな顔をして、涙を流してる。

寝ながら泣いてたのか？

「うゝ……………なあに零君？僕をじっと見て」

「……………いや、別に」

「変なのゝ。まさか、僕の唇狙ってたとか？」

唇に指を当てて、悪魔の笑みを浮かべやがった。

「狙うか！男とキスする趣味なんざねえわ！」

さっきの悲しそうな表情はなんだったんだ？

巫は巫だな。うん。顔を洗って服を着替えた。

さあて、二人を起こすか。

ハルを少し揺さぶって起こす。

「ハル起きろー、朝だぞ」

朝つつつてももう十一時だけだな。

寝ぼけ眼を擦りながら起きた。

「おはようございます……」

「おはよう。喜べ、今日で帰れるぞ」

そう、今日また《亀裂》が開く。それで、二人は元の世界に帰れる。でも、《亀裂》が開く時間に《亀裂》の真下にいることが出来なかったら、戻れないらしい。

《亀裂》はいつ開くか分からねえ。

前に《亀裂》が自然に開いたのは五百年前って話だから、どう考えたってもう二度と戻れねえ訳だ。ちゃんと、帰してやらねえとな。

「クーレ、起きろー」

未だにオルトロスの腹を枕にして寝てるクーレを起こす。

「うーん……もう食べれましえん……」

そんなことを言いながらにへら、と笑う。

幸せそうな夢を見てるようで。「クーレ、寝ぼけてねえで起きろー」

軽く揺さぶって起こす。

目をぱちくりと数回繰り返して、やっと目を覚ます。

「はれ……？ローストビーフは……？」

まだ寝ぼけてらっしゃる。

「オルトロスも起きろー」

みつつの頭を順にぺしつと叩く。

びつくりしたのか飛び起きた。

で、周りを見渡す。敵でもいると思ったのか？

なんにもないと分かると、なぜか俺の顔をベロンつと舐めてきた。何が面白いのかベロベロと舐めてくる。

ライオンくらいの大きさのままだから、舌は大きいわ唾液の量も多いわで顔がベトベトなんだけどな。

「零さん、大丈夫ですか……？」

クーレが心配そうに訊いてきた。

左手を首に当てる。

「大丈夫、すっげえベトベトだけど。【施錠】」

このままの大きさじゃ行動しにくいから、小型犬の大きさに戻す。

「とりあえず、飯食うか」

オルトロスがわんつと返事した。飯を食いながら、はたと気づく。

「そついえば巫知らね？」

二人が顔を見合わせる。知らねえんだな。

しっかしホントいきなり現れてはいきなり消える奴だよなあ。

掴み所がないっていうか。

オルトロスが足を鼻でつついてきたから、犬用のササミをやる。
なんか気に入ったらしい。

【ハア……面白イノ期待シタノニ……】

白銀がすんげえがっかりした様子で、壁をすり抜けてきた。
てか、壁をすり抜けられんの？

幽霊みたいにするっとすり抜けたぞ？

どんな超能力だよ。

【面白いのってなんだよ？】

【浮気相手ガ家ニイル時ニ、旦那ガ帰ッテキテ喧嘩ニナルカト思ッ
タノニ、旦那ガ帰ッテコナカッタ……】

………どこの昼ドラだよ。

修羅場がお好きなようで。

白銀さん、あんたが分かんねえよ。

とりあえず飯を食い終わる。

さあて、時間まで何をするかな。後三十分で九時になる。

今日はただ、街を適当にぶらぶらしながら案内しただけだ。

昨日みたいに“オニ”に出くわしたりはしなかった。

出くわしても困るけどな。

で、今大学の正門の前にいる訳だけど、巫はいつ来るんだ？

式神っていうの？それが来て、八時半に大学の正門に来るようにって書いてあったんだよね。
で、まだ肝心の巫は来ない。

「あ、零さん来ましたよ」

クーレが袖を引っ張りながら、右を指差した。
巫がオルトロスを連れて、手を振りながら来た。

「ごめーん。いろいろしてたら遅れちゃった。ちょっと早いけど、屋上まで行こうか」

「おう」

巫の後についていく。

「……………？」

なんだ、この匂い？獣臭いっていうか…………。
土の匂いと血の匂いが混ざった匂いだ。

「なあ、巫…………」

「うん、分かってる」

険しい顔をしながら、杖を構える。

マジかよ…………。勘弁してくれよ。また“オニ”かよ。
土がぼこつと盛り上がった。それも、ひとつやふたつじゃない。

何カ所も土がぼこぼこつと盛り上がる。

そこから出てきたのは、超デカイ蜘蛛と百足。なんか、気持ち悪いし怖いしで気絶出来そう。

蜘蛛と百足が俺達を見る。

どうやら獲物と見なされたらしい。

「零君、悪いけど頑張ってもらおうよ」

「マジかよ……」蜘蛛が牙を打ち鳴らして、百足が足をざわざわと揺らす。

クーレがハルの腕をもげそうな勢いで掴む。今にも泣きそうだし。まあ、そうだよな。あんなでっかくて気持ち悪い蜘蛛と百足なんて女の子にしたら地獄でしかねえわな。

「なあ巫、あれ何？」

「土蜘蛛と大百足。この地に封印されてたのが、目覚めたんだと思う」

「封印？」

「よくあるんだよ。《亀裂》が封印を破っちゃったこと」

なんて迷惑な。ここに来ておとなしく帰してくれないとか、迷惑すぎる。

「零君、こいつらは僕が相手するから、零君は二人を屋上まで連れてって」

「分かった」

念のためにオルトロスの封印を解く。
それが奴らを刺激したのか、一斉に襲いかかってきた。
巫が玄関の方向に杖を向ける。

【炎よ、荒れ狂え】

炎が一直線に、玄関の方向にいた蜘蛛と百足を焼き尽くす。
百足の足とか、蜘蛛の身体半分とか転がってるし。

「零君、今のうちに行つて！」

言われて二人をオルトロスに乗せる。

【来い、オルトロス！】

全力で走る。百足が追いかけて来やがった。
しかも、目の前には蜘蛛。

【邪魔じゃああああ！気色悪いんだよ！どきやがれ！】

蜘蛛に渾身の回し蹴り。首と胴体が半分千切れたけど、気にしない。
玄関を開けようとしたら、鍵がかかってやがるし！
まあいいや。後で巫がなんとかしてくれんだろ。
殴ってガラスを粉々に大破させる。

【オルトロス！】

中に入って屋上まで急ぐ。

時間まで、後二十分。屋上まで急いで走る。蜘蛛や百足がいつ追いかけてくるか分かんねえ。

早く屋上に二人を連れて行って、無事に帰れるまで奴らを足止めしねえと。

後ろを振り返る。ちゃんとしてきてる。

奴らも追いかけてきてない。

ほっとした瞬間、肩を何かに貫かれた。

「うゝ あっ……！？」

つんのめって転ぶ。

「「零さん！？」「」

二人の驚愕した声が響く。

【ギャンッ！】

オルトロスまで何かに貫かれる。よろめいたけどなんとか耐えて、二人を投げ出さないようにしてる。

周りを警戒して唸る。

それにしても、なんだ？姿が全く見えなかったぞ。

【キヒヒ……】

天井から気持ち悪い笑い声がして天井を見ると、超デカイカメレオンが張りついてた。

あいつか。身体が明滅して、消えたり現れたりを繰り返してる。

厄介だな。姿を自由に消したり出来るのか。

だから攻撃されるまで気づかなかったんだな。

【キヒヒ、獲物、獲物。オレに分ける】

カメレオンが目を不気味にぐるぐる回転させながら、舌をハルとクーレに勢いよく伸ばす。カメレオンの舌が、ハルとクーレを狙う。

【やめろっ！】

駄目だ、間に合わねえ。俺が盾になるとしても、舌を掴んで止めるとしても、この距離からじゃ間に合わねえ。

【ガアアアアアッ！】

カメレオンの舌が二人を貫こうとした瞬間、オルトロスが吼えた。衝撃で舌が跳ね返される。

あまりの衝撃に窓ガラスが耐えきれずに、粉々に割れる。

【おおっ！？】

カメレオンが驚いて後退る。

そして、姿を消す。

オルトロスの近くに寄る。

くそ、どうやって見つける？姿を消せる分、あっちの方が圧倒的に有利だ。

右の頭上から、ヒュンツと鞭を振るような音がした。咄嗟に音がした方向に身体を持っていく。

【っ……………！】

右肩を貫かれる。ああくそ、痛えな。
カメレオンが姿を現す。

【おまえ邪魔。おまえも人喰うくせに、なんで邪魔すんだよ。
独り占めする気か？】

ああ、うつせえな。いろいろと矛盾してるのは、俺が一番分かってるつーの。

【うつせえよ。気色悪いカメレオンが。この二人は喰わせねえよ】

カメレオンがニタリ、と笑った。【くっそおこの野郎！ちょこまかとしやがって！】

いくら攻撃してもちょこまかと素早く逃げられて、掠めるだけで全く当たらねえ。

オルトロスも捕まえようとするけど、空振り。

【キヒヒ、捕まえてみる】

めっちゃムカつく！

くっそ。あいつ、どうやって炙り出してやるうか。

炙り出す？そうだ！

確か、術式はイメージして自分なりの呪文を唱えるんだっただよな？

【呪文、呪文……燃えろ！】

単純すぎる気がするけど、俺には単純なのが一番だ。

左手の《徴》が黒い光を放つ。

その瞬間、ドデカイ炎が炸裂した。ガラスまで吹っ飛ぶ。

【あっちいつ！】

やべえよ、炎でかすぎだよ！熱風がこっちまできたし！
炎のデカさを調節出来るようにしねえとだな。

【あっちいよお前。オレを丸焼きにして喰う気か？】

カメレオンが俺の心臓目掛けて舌を伸ばしてきた。
誰がお前みてえな気色悪いカメレオン食うかよ。

カメレオンの舌が迫ってくる。避けずに、受け止める。

ドンツと、胸に衝撃が走る。

【お前……！？】

【やあっと捕まえたあ！】

ガシツと、絶対に離さないように舌を掴む。

「二人共今のうちに行け！」

「で、でも……」

俺のことを心配そうに見る。仕方ねえか。心臓貫かれた訳だし。

「いいから早く行け！後三分しかねえんだ！帰れなくなっちまうぞ
！」

それでも、躊躇う。

「行け！お前達が帰れなかったら意味がねえだろうが！早く！」

やっと決心したのか、ハルがクーレを腕にしっかりと抱いて、窓ガラスの縁に足をかける。

「天駆ける者達の気宇よ我が心に宿れ」

ハルが何かを唱える。瞬間ハルの背中に天使のような翼が広がった。翼を羽ばたかせて、屋上へと舞い上がる。

【オルトロス、お前も行け！】

わんつと一声鳴いて、階段を上って行く。

よし。反撃開始だ。

【おおおりやあああつ！！】

カメレオンを、壁に向かって投げ飛ばした。

- ハルの視点 -

屋上に下りて、ウイングハートを解除してクーレを離す。

空を見上げると、真っ黒な雲が渦を巻き始めてる。

いよいよ帰るのか。

零さん大丈夫かな。巫さんも。

俺達を帰すためにあんなにしてくれたのに、お礼さえ言えてない。それが、心残りだ。

下からガラスが割れたり、何かを薙ぎ倒すような音聴こえるけど、

零さんがあのカメレオンを足止めしてくれてんのかな。

【わんっ！】

犬の声がしたかと思うと、オルトロスが駆け寄ってきた。

クーレにじやれる。撫でられて嬉しそうに尻尾を振り回す。

雲が、いきなりバチバチいい出した。

いよいよか。そう思ったら、後ろからガザガザと音がして振り向いたら、百足が一匹俺達に向かってきた。

「あっ！」

オルトロスが百足に飛びかかる。

噛みついて、爪を使って胴体を引き千切ろうとする。

百足も負けじと絞め殺そうとしているのか、絡みつく。

オルトロスが爪を離れたかと思うと、百足を身体に巻きつけたまま飛び下りた。

俺達に怪我をさせないために？

クーレが落ちていった方向に走ろうとする。

「クーレ、ダメだ！」

「で、でも……」

「皆大丈夫だって。俺達を帰すために必死になってくれたんだ。ちやんと帰らなきゃ」

「はい……」

バチバチという音が大きくなってきた。

雲が渦を巻きながら大きくなっていく。
動きが止まったと思った瞬間、黒い光が発せられた。

- ハルの視点 -

目を覚ましたら、ベッドの上。
起き上がって周りを見渡すと、見慣れた医務室の風景。
帰ってこれたのか？
隣を見ると、クーレがすやすやと幸せそうな表情をして寝てる。
……………涎出てるぞ。

「クーレ起きろ」

「ふにゃ……………はれ？ここは？」

「学校だよ。俺達帰ってきたんだよ」

「そうですか……………帰ってこれたんですね」

クーレが珍しく染々と呟いた。

「おっ！二人共やあつと起きたんか！」

シロさんが笑顔で入ってきた。ついでにアズマも。

「二人で廊下に倒れとつたから心配したで」

「クーレタンに人工呼吸しようとしたら、ユメタンに顔面ゴージャ食らったよ」

そりゃ当たり前だ。つーか何しようとしてんだよてめえ。

「二人が目え覚めたって先生に言ってくるわな」

シロさんがアズマを引き摺って出ていく。
いつも通りだな。

「クレー」

「はい？」

きょとんと見てくる。

「楽しかったな」

「はい。いい人達でした」

二人で笑う。

もう二度と会うことはないけど。

ほんの少しの間だったけど、あの人達に会えてよかったと思う。

なぜか顔面にゴーヤを埋め込んだアズマを引き摺りながら、ムツキさんが入ってきた。

今度は何をやらかしたんだ？【おおおりやあああつー！】

カメレオンを壁に向かって、おもいきり投げ飛ばす。

教室の壁を突き破って、教卓を薙ぎ倒しながら向こう側の壁に激突

する。

【くっそこの野郎】

姿を消そうとする。ちっ。姿を消されたら厄介だ。

飛び上がってカメレオンのすぐ側に着地。

尻尾を掴んで投げ飛ばす。

あ、尻尾が千切れた。千切れた勢いで、黒板が真つ二つになる。

その瞬間、窓の外が真つ黒な光に塗り潰された。

《亀裂》が開いたのか。ちゃんと帰れたよな。

よっしゃ。さっさとこいつを片づけるか。

大学内じゃやりにくいな。

カメレオンが俺の腕に舌を巻き付けてきた。

ちようどいいや。掴んで窓の外に放り出す。

舌が巻きついたままだから、俺も窓の外に引っ張れる。

【おおお！？】

地面に叩きつけられるかと思ったけど、カメレオンの身体がクッシン代わりになって助かった。あゝ、地面に激突しなくてよかった。痛い思いをするのは勘弁だからな。

カメレオンの腹って柔らかいなあ。

【おわっ！？】

腕に絡みついていた舌に引っ張られて、壁に叩きつけられる。衝撃で壁にヒビが入ったのが分かった。

ちっ。お返しのつもりか。

また投げ飛ばされそうになったから、舌を切り落とした。

【いつでえっ！オレの舌を〜！】

うつせえよ。舌くらいでぎゃあぎゃあ騒ぐなよ。

心臓ぶっ刺された方がよっぽど痛えつつうの。

かなりの錯乱状態になってやがる。

こういう状態に陥った奴はやりやすいな。隙が多すぎる。

爪を尖らせてカメレオンの胸にぶっ刺して、心臓と思われる肉の塊を握り潰す。

うつへえ……。グヂュツて気持ち悪い感触したし……。

けど、握り潰した瞬間びくつと痙攣して動きが止まった。

やったか？カメレオンをつつく。反応なし。

更に蹴っ飛ばす。力入れすぎた。壁に激突したし。

でも反応なし。やったみたいだな。

カメレオンの身体がいきなり、ビシビシと音をさせながら石みたいになり始めた。

そして、一際ビシッと大きな音をさせて跡形もなく崩れた。

なんか、今まで見た“オニ”と死に方が違うな。

異世界から来た“オニ”とか？

まあ、気にするほどじゃねえか。

ほっとした瞬間、ドザアツと砂ぼこりを盛大に舞い上げながら、近くにでっかいものが落ちてきた。

「おおおっ！？」

よく見たらオルトロスだし。

身体に巻きついてるのは百足か。

身体を激しく回転させたり、爪で引っ掻いたり、噛みついたり、地面に身体を打ちつけたり、巻きついたり、百足の方がやられてるし。オルトロスが百足の胴体に噛みついて、爪を食い込ませて一気に身体を真つ二つに引き裂いた。

紫色の気持ち悪い液体がぶちまけられる。

百足の体液だよな……。うへえ……。

オルトロスが百足を食べ始めたのは、見なかったことにしよう。「
零く〜ん、大丈夫？胸に大穴開けて」

巫が何事もなかったみたいに、笑顔で手を振ってきた。

気が緩みすぎたのか、胸がいきなり痛みだした。

さっきまで痛みなんて感じなかったのに。

胸を押さえて蹲る。

「ぬおおお……」

「どうしたの？痛む？きつと修復途中だから痛むんだよ。しかも心臓丸ごとだしね」

あー、確かに言われてみればそうかも。

腕とか傷が塞がる時、疼いて気持ち悪いもんな。

それが心臓丸ごと一気に修復するんだもんな。

痛くても仕方ねえかも。

それにしても痛えし気持ち悪い……。

徐々に傷が塞がっていくのが、見て分かる。

先に心臓が再生されて、小さく脈打ったのが見えた。

そして、皮膚が塞がる。

痛みがなくなった。

「やっぱり食人鬼の再生力は凄いな。心臓を一分もかからずに修復しちゃうんだからね」

巫が感心したように、顎に手を当てながら笑う。

「うわっ!？」

オルトロスが飛びかかってきた。

じゃれてるつもりなのは分かるけど、大きさが大きすぎるから！
俺を押し潰さないで！

さっき百足を食べた舌でべろべろ舐めないで！

しばらく苦勞して、やあっとオルトロスを子犬サイズに戻すことに成功。

巫は俺がオルトロスと格闘してる間に、学校完璧に修復してるし。

「さて、帰ろうか。約束通り、全部話してあげるよ」

「お、おう……」

振り向いた巫の表情は、笑ってたけど、哀しそうで今にも泣きそうだった。

【しかし、運命とは分からぬもののよ。千年前に我々を退けた一族の末裔が、我々の手に堕ちるとはな】

頬杖をつきながら笑う荒神の言葉に、各々好きなように行動していた影達の視線が、一斉に荒神へと向けられる。

【そう思わぬか、柚螺よ？】

問われ、柚螺は微笑みながら答える。

【そうだねえ。まさか、狩真一族が末裔まで血を脈々と繋いでたとはね。うまく隠れてたものだね】

【あの末裔は我々の鍵となる。巫にはしっかりと守ってもらわねば
の】

【……我らの思惑など知らずに……】

【末裔かつさらって、さっさと封印ぶっ壊したらいいんじゃないの
？】

【さんせーい！】

【待て待て。我が本体を取り戻すことなど、いつでも出来よう。一
気に侵略しては、面白くなかう？ゆっくり、じわじわと確実に蝕
んでいこうぞ。それに、“奴”にも段取りという物があるう？まず
は、セリアとリズアを完璧に我々の物とする】

荒神の言葉に、影達は微笑む。

そして、一斉に黒い光だけを残し、姿を消した。

【暴れよ、我が忠実なる同志よ。セリアとリズアが終われば、この
世界。この世界を墮とせば、全ての世界を墮としたも同然よ】

間章

「やっと終わったな。まさかの百ページ超えだぞ」

「長かったねえ」

【作者ガナンデ、コンナニ長クナツタンダロ？トカ言ツテタヨ】

「つーかさ、途中からコラボとか関係なくなつてね？」

「それ言ったら終わりだよ。仕方ないよ、これが作者の限界なんだよ」

【トリアエズ、本編二戻ラナイ？】

「そうだな」転移で帰ってくる。珍しく白銀がいた。

【遅イ】

【ごめんごめん。思いの外時間かっちゃって】

【白銀までわざわざ呼び出す必要あったのか？】

【まあ、白銀にも関わってくるからだからね】

【本当二話スندا？】

【うん。駄目かな？】

【イイヨ。巫ノ決メタコト二口八出サナイ。僕ハ“式”ダシネ】

【ありがと。さて、零君に質問。正義の敵ってなんだと思う？】

はっ？正義の敵？いきなりなんだ？

【いや……悪じゃねえの？】

【うん。間違っではないと思うよ。でもね、こつも考えられると思うんだ。正義の敵は別の正義だって】

【別の正義？】

【うん。別の正義。例えば、王族も王族なりの正義を持って動いてる。僕達からしたら王族は悪そのものだけど、王族から見たら僕達が悪なんだよ。正義の敵は、いつだって別の正義なんだ】

まあ、言ってることは分かるけど、それが巫の過去と何が関係あるんだ？

【零君、細身のナイフか包丁ある？】

【……？あるけど？】

それを何に使うんだ？

【持ってきて】

仕方なく、台所から一番細い包丁を持ってきて渡す。

巫は包丁を見つめて痛そうだなあ、と呟くと、手首に包丁を突き刺

した。表情を歪めながら包丁を深々と突き刺して、更にぐりつと決める。

「なっ……！？何してんだよ！？」

巫の手を掴んで、包丁を抜かせる。

「大丈夫だよ」

はあ！？大丈夫？何が大丈夫だよ！？

包丁手首貫通してたぞ？こんなに血が流れてるじゃねえか！
何考えてんだよバカ！

「大丈夫。すぐ、治るから」

手首を見つめる。

血が傷口に戻って、傷口が塞がっていく。
床に滴った血はそのままだけど。

「僕はね、人間じゃないんだよ。半分人間で半分“オニ”。人間でもなければ“オニ”でもない。だから、“まざりもの”。百三十五年前に被い師の手で造り出された、人造の“まざりもの”なんだよ」

「そんなことが、許されるのか？」

「許されるんだよ。今もね。人間の細胞に“オニ”の核を埋め込むことによって、“まざりもの”が生まれる。核の力に適応出来なかつたら、死んじゃうけど。ちなみに僕は、九尾と不死鳥の核を埋め込まれてる」

百一十年前

百二十年前、とあるひとつの街が一瞬で消滅するという大事件が発生する。

被害者は推定一万人。

理由は、何者かが『亀裂』を無理矢理開いたことによる、時空間の歪み。

不安定となった時空間は消滅を免れるために、繋がっている空間からエネルギーを全て取り込み、安定化を試みる。

「才二の仕業だと断定する。」

被い師に対する、宣戦布告だと。

かくして、被い師と“オ二”の十一年間に及ぶ戦争が勃発する。

これが食人鬼の王族が招いたことだと判明するのは、戦争が既に始まってからのことである。

判明したところで、戦争は止まらない。

“オ二”はただ單純に争うことを楽しむ者もいれば、被い師による理不尽な殺戮に憤慨する者もいる。

被い師は己の正義と誇りを貫くために戦う。

戦況は、**被い師が劣勢**。

そこで、被い師は切り札となる兵器を導入することを決定する。

兵器とは、十三人の少年少女達。

駝だ、巫、
唇しん。鵲むつき、
月、梓あずま、
蟬、獅しろ、
虜、鳳ほう、
凰おう、
雷らい、
雨いさめ、
朋ほう、
檣なち、
夢むげん、
弦、麟りん、
鵒やや、
邪、蜘蛛く

この十三人を導入することにより、戦況は一気に翻り、被い師の勝利へとあと一歩のところまで来ていた。少年少女達に刻まれた最初の記憶は、ごぼりっという音と、自分達を異様に熱心な瞳で見る無数の目。

少年少女達が初めて抱いた感情は、恐怖と不安。

轟音。立ち上る炎。黒く焦げた無数の死体。
そして、

その光景を哀しげに見つめる、一匹の狐。

ただの狐ではない。九本の尾を持ち、虹色に輝く翼を持った白銀に輝く狐。

狐の姿がゆらりと揺れたかと思うと、狐の立っていた場所に少年の姿が現れる。

黒い巫女装束を纏った、黒髪が肩まで伸びた少年。

少年のすぐ傍に、十メートル以上はあるうかと思われる巨大な鳥が舞い降り、地面に足が着いた瞬間に少年へと姿を変える。

全身が金色の羽毛に包まれており、服は着ていない。

「朋、終わった？」

「ああ、終わった。……帰るか」

「……うん」

風が二人の髪を靡かせる。

その瞬間、二人の姿は白い光に包まれ、消えた。暗くも明るくもない、どこか研究施設を思わせる空間。

灯りを点すのは、ひらひらと縦横無尽に舞う蝶だけ。

床と天井には魔方阵が描かれている。

そして、扇形の机に座る黒い人影達。

そこに白い光と共に、少年二人の姿が現れる。

「巫、朋檜、戻ったか」

口髭が印象的な、目が吊り上がった男が口を開く。

「殲滅、完了しました」

巫と呼ばれた、黒い巫女装束を纏った少年が俯きながら口を開く。

「そうか。よくやった。呼ぶまで戻っている」

少年二人は無言で、扉を潜る。

「勝利のためだ。あれらには、なんとしても勝ってもらわねば」

「あ、二人共おかえり〜！」

真っ白な髪を腰まで伸ばした少女が、朋檜に飛びつくようにして、避けられ壁に顔を強かに打ちつける。

「ぶぎゃんっ！」

朋檜は口笛を吹きながら、全く無視である。

「なんで避けるの〜」

余程痛かったのか、涙目になりながら朋櫓を見る。

「蜘蛛に抱きつかれても嬉しくない」

「酷い。羽毛。ふわふわの羽毛……」

遂に床に蹲りだした。「まあたやってんのか？蜘蛛だって女の子なんだから、そんなこと言ってやんなよ」

背が低く赤みを帯びた髪をした少年が、腕を頭の後ろで組ながら言う。

「唇、朋酷い」

「気にするな。いつものことだって」

「蜘蛛だって分かってるのに、抱きつかれても気持ち悪いだけだろうが」

「蜘蛛だって好きで土蜘蛛になった訳じゃないもん！」

涙目になりながら拳を握る様は、見る者によっては可愛い、と言わしめそうである。

「俺だって好きで大鵬たいほうになった訳じゃない」

「いいじゃん鳥さん！蜘蛛よりすごくいいじゃん！」

「それ言うなら、超巨大蛤はまぐりより蜘蛛もマシだぜ？」

「蛤だって蜘蛛よりは嫌われてないじゃん」

自分の言葉に落ち込みだし、しゃがんでぶつぶつ何かを呟く。

「蜘蛛タン！なんなら僕ちゃんのお胸が空いてるよ！」

梓蟻が両手を広げてアピールをする。

「やだ。蛇ふわふわじゃないもん」

真顔で拒絶である。

「わーん！ユメターン！」

大袈裟に涙を流しながら、鵲月に抱きつくとする梓蟻。

「寄るな、変態蛇が」

無表情でゴーヤを梓蟻の顔面に突き刺す鵲月。

それを笑いながら見る少年少女。

いつもの光景である。「梓蟻ちゃん、大丈夫？」

巫が梓蟻の顔面に突き刺さったゴーヤを抜き、顔を覗く。

その表情は楽しそうであり、心配している様子はちっとも感じられない。

「泣かないもん……。僕ちゃんこれくらいで泣かないもん……。ぐすっ」

「おもいっきり泣いてるのね。寝言は寝て言うのね」

無表情で吐き捨てる始末。
遂に泣き出した。

「うつ……くっ…うわーんっ！」

「梓蠟ちゃん、なんなら女になつて慰めてあげようか？」

唇に人差し指を当て、目を細める様は妖艶と云つていいほどである。
流石は九尾と云つたところか。

「そついえば獅虜と雷雨と夢弦と鶴邪はまだか？」

「まだ帰つてきてないよ。強い“オニ”ばかり集まる戦場だから、
手間取つてるんじゃないかな」

「そつか……」

蜘蛛の言葉に、朋檜は腕を組ながら床に視線を落とす。

「蜘蛛、あの人達嫌い」

悲しそうな悔しそうな瞳を、ここにはいない人物達に向ける。

「辛いことばかり蜘蛛達に押しつけて、自分達は安全で傷つかない
場所にいて。生まれてこれたことは感謝するけど、だからってなん
で、戦うことを命令されなきゃダメなの？お前達は戦うために造ら
れたんだ。それ以外にお前達に価値はないって。なんで、そんなこ
と言われなくちゃダメなの？蜘蛛達は戦うこと以外を選んじゃダメ
なの？」

誰も、答えられない。蜘蛛と同じ思いを誰もが抱いて、だが、答えは誰もが見い出せない。

「蜘蛛達は人間？ “オニ”？どっち？」

誰も、答えられなかった。【獅虜！後ろだ！】

猊の姿をした夢弦の言葉に、烏天狗の姿をした獅虜は身体を回転させ、扇を振る。

扇が振られた瞬間、鎌鼬が吹き荒れる。

その鎌鼬に乗って、雷が放たれる。

雷鳥である雷雨の強力な雷である。

ある者は鎌鼬に切り刻まれ、ある者は強力な雷によって塵になるまで焼きつくされる。

そして、ある者は猊である夢弦の永久に目覚めぬ夢に魅せられ、命を吸われ絶命する。

しかし、依然として敵の数が減る様子はない。

【ちつ。どんだけおるんやこいつらは。どんどん湧き出てきよるで】

【仕方ねえ。疲れるから使いたくなかったけどな。お前ら耳塞いでろ】

鵜である鵜邪が返事を待たずに口を限界まで開く。

【ちょ、待ってえな！】

各々急いで耳を塞ぐ。雷雨に至っては、器用に翼を折り畳んで耳を塞いでいる。

【——っ！】

鵺邪の口から不気味な、啜り泣くような音が大音量で発せられる。
その瞬間、

耳を塞いでいなかった敵である全ての“オニ”が、目を見開いて絶命した。

【鵺邪、すごい】

雷雨がぽつりと呟く。

鵺邪の“凶鳥の忌まし声”を直接聴いてしまった者は、地獄へと墮とされる。四人は背中合わせで、しばらく周りを警戒する。
だが“オニ”が現れる気配はない。

【全員殺ったんか？】

【多分】

【出てこないってことはそうじゃないの？】

【無理……疲れた。おれ戻る】

鵺邪の姿がゆらりと揺れ、膝をつき、少女の姿に戻る。
それに続き、三人も人の姿に戻る。

「鵺邪の力って強力だけど、長く使えないのが難点だよな」

「仕方ねえだろ。ホントに疲れるんだよあれ。お前らも霊力を熨せてあれだけの声を出してみろ。ぶっ倒れるぞ」

「後、見た目は可愛いのにガサツなのもつたいないわな」

獅虜を睨む鶴邪。声だけでなく、視線でも相手を殺せそうだ。

「ほつとけ。おれは男の方がよかつたんだ」

雷雨が獅虜の裾を引っ張る。

雷雨の身長は五歳の子供と同じくらいの身長しかなく、雷鳥の姿の時の逞しさは感じられない。

「皆、戻らない？」

「そうやな、戻るか」「あ、四人共お帰り！」

蜘蛛が笑顔で四人に手を振る。

巫の白銀に輝く尻尾に抱きつきながら。

「おう、ただいま……って何しとつたんや？」

四人の目の前には、蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにされた朋檜と梓蟻が転がっている。

梓蟻に至っては、なぜかゴーヤが肛門に突き刺さっており、誰の仕業かは一目瞭然である。

「シロ、ユメタンと蜘蛛タン酷いんだよ。ちょっとふざけて全裸になろうとしたくらいでぐるぐる巻きにされて、ユメタン笑顔でゴーヤぶっ挿してくるんだよ？」

はらはらと涙を流しながらの訴えである。ちなみに服の下は白い鱗

に覆われている。

「お前が悪いわ」

「そりゃゴージャくらいぶっ挿されるだろ」

獅虜と鶴邪、容赦なく一刀両断である。

「ぐすっ……な、泣かないもん……」

「で、俺はどうしてぐるぐる巻きにされてんだ？」

朋檜が蜘蛛を睨む。

「さっきの仕返し」。蜘蛛、壁にお鼻ぶつけて痛かったんだからね！

頬を膨らませながら不貞腐れた。

「巫もご苦労なこつたな」

「まあ、いいけどね」

漆黒の巫女装束に白銀に輝く尻尾。なんとも珍妙な組み合わせである。

そして、その尻尾に気持ちよさそうに抱きつく蜘蛛。実に幸せそうな笑顔を浮かべている。

「僕も」

と、言って雷雨が巫の尻尾に抱きつく。

二人にいいように触られて、くすぐったそうである。

「そついえば鳳と凰は？それに麟も」

「あー、隼人^{はやと}んここに悪戯しに行ったんじゃない？」

唇が頭の後ろで手を組ながら答える。

「そつか。あいつもある意味大変だな」

「もうそろそろ三人連れてくると思うけどな」

厩が扉に目を向けた瞬間扉が開き、鳳と凰と麟の三人を脇に抱えた男が入ってきた。

男は顔に落書きをされており、どこかにぶつかったのか額から血を流している。

「全くこの悪餓鬼共！悪戯するための力じゃないぞ！」「隼人が間抜けなのがいけないんだー」

頭部に小さな二本の角を生やした麟という少女が、隼人と呼ばれた青年の脇から器用に抜け出す。

「「被い師のくせにぼくらの歌声にとられるなんて、間抜け間抜け」」

髪が黒、青、赤、白というカラフルに彩られた瓜二つの少年と少女が、脇に抱えられたまま顔を見合わせる。

ちなみに少年が鳳で、少女が凰である。

「お前らなあ……。どんなモノも惹きつける歌声を俺なんかに使うなよ……」

「「じゃあ、貴重なぼくらの歌声を聴けるんだから感謝しろ」」

「なんか説教する気なくすわ……」

「「下ろせ下ろせ」」

隼人の脇でじたばたと暴れる。

説教を諦めて二人を下ろす。

下ろされた二人も、巫の尻尾に抱きついて遊び始めた。

「鵲月、ゴーヤは武器じゃないって言ってるだろ？そもそもお前、どこにゴーヤ隠し持ってるんだ？」

「秘密なのね。私にかかればゴーヤも武器になるのね」

ゴーヤを右手に持ちながら堂々と言い放つ。「なんなら隼人も下からゴーヤ、味わってみるのね？」

いつの間にか右手にゴーヤを左手に縄を構えて、目を輝かせる。

皆、鵲月の変態性と実力は承知済みなので、被害を被らないために一斉に後退る。

「いや、全力で遠慮するわ」

見せつけるように、動きを封じる霊符をひらひらと振る。

それを見て、鵲月が本気で残念そうに舌打ちしたのは気のせいだろう。

「全く。どこでそんなこと覚えてくるんだ？」

「私が白澤だからじゃないのね？」

いつの間にか縄がなくなっているが、どこに直したのだろう。

「いや……それはないだろ。いくら万物に精通する“オニ”世界の博士でも、そんなこと知らないだろ。そもそも、普通思いつかねえよ」

「隼人は私達が、もしも被い師見習いであることを放棄して“オニ”として戦うことを選んだら、悲しいのね？」

鷓月が、突然真剣な表情で隼人を見据える。

「それは……」

隼人も被い師である。彼らの実力は十分に理解している。もしも彼らと本気を出し全力でぶつかり合ったら、敗北するのは被い師であろう。「それは……お前達が自分で出した答えなら、俺はなんにも言わねえよ。お前らが“オニ”を選ぶって言うんなら、俺は強要しない。あくまで俺はだけどな。でも、そうなってほしくないな。お前らと戦いたくないからな」

「冗談なのね。私達は隼人を悲しませることはしないのね。あのちよび髭共は嫌いだけど」

ちよび髭共とは、全ての被い師一族を束ねる本家の人間のことである。

隼人も本家の生まれであり、彼らの世話役を任されている。世話役とは表向きで、その実は監視役なのだが。彼らもそのことを承知で、隼人の人柄を慕っている。

「はは……あのジジイ頑固だからな」

「そんなこと言っているのね？隼人のお父さんとおじいさんなのね？」

「いいんだよ。俺もジジイとハゲ親父は嫌いだからな」

「ハゲ親父って言ったー！言いつけてやる！」

鳳と凰がなぜか嬉しそうにはしゃぎ始める。

「おい！そんなこと言ったら殺されちまうわ！」

「隙あり！なのね」

鵠月が一瞬の隙をつき、隼人の股間にゴーヤを食らわせる。

「じはあつー！」

奇妙な声を上げて、股間を押さえながら床に踞る。

鵠月が不気味な笑みを浮かべていたのは言うまでもない。「隼人？大丈夫？」

やっと巫の尻尾から離れた蜘蛛が、隼人を楽しそうにつつく。巫はというと、ぐちゃぐちゃに絡まり合った尻尾の毛を指で整えている。

さしずめ毛繕いといったところか。

「おい蜘蛛！どさくさに紛れて糸で縛ろうとするな！」

すんでのところで糸から逃れ、ぐるぐる巻きを免れる。

ちなみに朋檣と梓蟻は、未だぐるぐる巻きにされたままだが。

「えゝ、ぐるぐる巻きにして天井から吊るしてあげようと思ったのに」

「吊るされてたまるか。その後確実に鵲月の餌食にされるわ」

その後ろでゴーヤをスタンバイしているのだから、餌食にする気満々なのが伺える。

「……っと、そろそろ食事だな。ほら、皆行くぞ！」

「「ご飯、ご飯！」」

「肉食べてえな」

「僕は油揚げ食べたい」

「さっすが狐やな」

皆ぞろぞろと部屋を出ていく中、ぐるぐる巻きにされた二人は放置である。

「え？僕ちんほったらかし？ヤダーー！」

「おい！このクソ蜘蛛！行くならほどいてからにしろ！」

結局、隼人が糸を苦勞してほどくことになった。「全く。術式で焼かないと切れないって、どれだけ強い糸を作ったんだよ」

朋檜と梓蟻を縛っていた糸は、隼人が術式を使ってやっとほどけたほどの、強固なものだ。

単純な腕力では切れないはずである。

ちなみに糸の強度は、込めた霊力の違いで変わる。

霊力を込めれば込めるほど、強靱な糸になる。

「えー。だってそれくらい強くないとすぐ切られちゃうもん」

夕食を食べ終え、それぞれ風呂に入る準備をしながら喋る。

「あのなあ、糸を作るのにも霊力があるだろう。そんなことに無駄に力を使うなって言ってるんだよ」

「いいじゃん。霊力なんて寝ちやえば回復するもん」

「あのなあ……」

実際問題本当に寝てしまえば霊力は回復するので、反論出来なくなる。

彼らの霊力は実力のある被い師を遥かに凌駕するために、被い師が意識不明になるほどの霊力を使ったとしても、全く問題ない。

隼人も被い師としての腕は一流であるが、単純な霊力の量や質は彼らには敵わないのが現実なのだ。風呂である。

大浴場があり、勿論男女別々で入る。

先に女子が入り、次は男子の番だ。

「やっぱ風呂はええなあ。生き返る」

「いいよねえ裸って」

梓蟻が肩まで湯に浸かりながら、気持ちよさそうに目を閉じる。

「鱗の上に服着るのって気持ち悪いのか？俺は気持ち悪いから服着ないけど」

朋檣が濡れた羽に触りながら、隼人に身体を洗ってもらっている雷雨を眺める。

「ちょっと気持ち悪いんだ。鱗が服に引っ掛かることもあるし。でも、服を着て一番気持ち悪そうなの、ユメタンばくない？」

「あゝ、確かに」

白澤である鵠月は両腕、背中、胸の谷間、両足にそれぞれ目を持っている。

実は服で擦れて気持ち悪いのかもしれない。皆が湯に浸かり、くつろいでいた時である。

突然、扉が勢いよく開かれた。

「おい鵠邪！なんでまた入ってくる。お前は女だろうが！恥じらいもなく全裸で入ってくるな！」

鵠邪が全裸で仁王立ちしている。

どんなことを言おうとやはり女であるので、皆視線のやり場に困る。

「オレは男だ！女じゃない！間違つて女に生まれただけだ！見られ
たつて減るもんじゃないわ！」

「お前はそれでもなあ、俺達は困るんだよ！」

「何が困るんだ？はっはゝん？やっぱ女の身体に興味あるのか？」

湯船に入ると素早く近くにいた夢絃に抱きつく。

「ほれほれ。胸だぞ？」

「ちょ、マジでやめてって！」

「夢絃ズルい！僕ちんだつてお胸触りたいのに！」

本気で羨ましそうに夢絃を見るのだから、世話がない。

「じゃあ梓蟻変わってよ！」

「梓蟻は却下」

「うわーん！シロー！」

「まあ、仕方ないわな」

なんだかんだで楽しく、彼らの日常は終わりを迎える。
だが、平和そうに見える彼らの日常は常に、死と隣り合わせだ。

この後にやってくる嵐を、彼らは知る由もない。
彼らは考えたことはないだろう。

十三人の仲間の誰かが、欠けることなど。三メートルほどの大きさの、九本の尾を持った狐が縄で縛られ、地面に這いつくばされる。狐を囲む巫女装束を纏った人間達が、狐を嘲笑いながら近づく。

——なぜだ、なぜだ！なぜ、戦えぬ子供達を殺した！あの子達はまだ、人間の子供となんら変わらぬであろう！我らが何をした！——

狐は、怒りと憎しみと憤りを込めた瞳を、自分を小馬鹿にしたような瞳で眺める人間達に向ける。

——何をした？お前らゴミが存在するだけで罪なんだよ。ゴミでも我々の役に立つことを光栄に思え——

——ふざけるな！我々はあの者の一族との約束を守ったはずであるう！これからも破ることはない。なのに、なぜ、我が子を殺した！

——あの者の一族？はん。あの九尾と夫婦めおととなるような裏切り者の一族だろう？今はいないんだから、契りは無効だ。

子供を殺せば、お前は怒りに我を忘れて出てくるだろう？子供は役に立たない。だから、お前を誘き出すための餌になってももらったのさ。ゴミでも、役に立ったんだから本望だろう？——

——あの者の一族の末裔がいさえすれば……許さぬ、許さぬぞ！お主らを呪ってやる！末裔まで我が呪いがお主らを苦しめると覚悟するがいい！——

——言い残すのはそれだけか？じゃあ、死んで我々の役に立て——
狐の意識が最後に見たのは、己の心臓に穿たれた赤い剣であった——
！。

——狐の怨念は決して消えぬぞ……——

「……………っ！」

目を抉じ開け、起き上がる。

「また……………」

よく見るのだ。狐が殺される瞬間を。
互いに互いを守ろうとしたであろう、折り重なり血塗れになった二匹の子供の狐の姿を。

巫は悲しさとやり場のない怒りに涙を流しながら、ぎゅっと手を握る。

怖いのだ。いつか、狐の怨念に吞まれるのではないかと。「ほら、皆起きろー。朝だぞー」

隼人が仲良く輪になって爆睡している十三人を起こす。
皆駄々をこね、なかなか起きない。
雷雨の布団を捲り、梓蟻の布団を捲る。

「梓蟻、なんで巫と抱き合ってるんだ？」

実際は抱き合っているのではなく、巫が抱きついていいるのだが。
二人共お互いを見て、きょとした表情をする。

「え……？巫、なんで僕ちに抱きついてんの？まさか、男に目覚めたの？」

「なんで梓蟻ちゃんはそんなことにしか頭回らないの？怖い夢を見たから、寝てる間に抱きついちゃったんだよ」

目を擦り、涙の跡を誤魔化す。

「何々、怖い夢？悪夢ならばくが食べてあげようか？」

獏である夢絃。悪夢を食べることなど朝飯前だ。

「あゝ、いいよ。僕の悪夢だけは食べない方がいい」

悪夢ではなく、純粹なまでの深い深い、禍々しい怨念なのだから。
不安になる。いつか核となった九尾の怨念が、自分を呑み込み狂わせるのではないかと。

力を使う度に、九尾の姿をとる度に、感じるのだ。
どす黒く、どろりとしたものが溢れ出すのを。

それが、自分の意識を覆い尽くそうとするのを。
九尾が怨念を残した理由が分からない訳でもない。

自分の子を惨殺されれば、誰でも恨みを晴らすとするだろう。
九尾も、また同じ。

吞まれ、狂ってしまったえば怨念のままに破壊の限りを尽くすに違いない。

そんなことは望んでいない。しかし、吞まれてしまえば意味はない。

「巫、大丈夫か？」

いつの間にか、隼人の顔がすぐ目の前にあった。

「大丈夫、だよ？」

「そうは見えないけどな。後で俺の部屋に來い。絶対だぞ？」

「うん……分かった」「何々？隼人の部屋？麟も行く！」

麟が隼人の足に抱きつく。

「だーめ。大事な話だからな。また今度な」

「はい……」

残念そうだが、頭を撫でられ満足する姿はまだまだ子供だということとが窺える。

そんな子供達に頼り、強引に命を懸けて戦わせ、それを命令する大人は戦うことをせず、安全な場所で己の命は危険に晒さず、傍観しているのだ。

なんと滑稽で、不甲斐ない姿だろう。

自分のその一人だ、と隼人は思う。

綺麗事を並べるだけで、結局は彼らに頼らざるを得ない。

そして、彼らを生み出し、戦争の引き金を引いた張本人である父親は、何も思わないのかと。

（こんなものが、被い師の姿なのか？）

違う、と否定する。こんなものが被い師のあるべき姿ではないと。被い師の在り方は、昔となんら変わっていない。

しかし、このままでは弱体化の一途を辿り、いつか滅びるに違いはない。

その昔、被い師によって抹殺された被い師、狩真一族や陰碼一族こそ、被い師のあるべき姿なのではないのかと思う。

ふたつの一族は被い師の最大の汚点とされているが、彼らの在り方こそ被い師のあるべき姿であると信じている。

“オニ”と共存していた在り方こそ。

ふたつの一族が存在していたことは、今や本家の人間しか知らないことだが。「隼人ー！鳳が唇に食べられる！」

考え事をしていたために、少しぼうつとしながら俯いていた。

驚いて顔を上げると、寝惚けているのか蛤の姿をした唇が、鳳の下半身をすっぱりと挟んでいる。

強い力で挟んでいるのか、獅虜と朋檜と鶴邪の三人がかりでもびくともしない。

鳳は鳳の手を掴んで引つ張り出そうとしているが、引つ張られ痛そうだ。

「こら唇！鳳を幻殺して消化する気か！？」

「消化なんてやだー！」「」

ちなみに幻殺して消化とは、唇が息を吐き出すと空中に楼閣が浮か

び上がる、という幻影が見える。その幻影を見た者は、気づかぬうちに唇の腹に取り込まれ、消化されるというものである。

「唇！全く、仕方ないな。文句言うなよ」

隼人が懷から靈符を取り出す。靈符には雷いかずち、と書いてある。皆一斉に唇から離れる。

雷と書かれた靈符を貼ると、静電気のような青い稲妻が辺り一面に炸裂した。

「いつでええええ！」

カパツという音と共に、鳳が急いで唇の口から逃れる。唇が蛤の姿から少年の姿に戻る。

「超いてえ……雷超いてえ……」

「唇が悪いんだからね！」

「そうそう。一番弱い靈符使ってやったんだから感謝しろよ」

一番弱い靈符であろうとも、生半可な“オニ”であれば一瞬で黒焦げになるような代物だが。

その靈符の威力をまともに食らってなんともないのは、彼らだからこそだ。朝食を食べ終わり、皆部屋に戻ってきた。唇は未だに痛そうに身体の内を擦っている。

「唇、まだ身体痛いのか？」

鳳と凰が手を繋ぎながら訊く。

「痛くねえけど、痺れてるんだよ。俺、蛤だから雷弱いんだぞ」

水は炎に強いが、雷には弱い。

その法則に則り、唇はより顕著に雷に反応してしまうのだ。

そんな唇に雷の霊符を使った隼人は酷いようにも見えるが、人間である隼人が力業で敵うはずもない。

しかし、炎や水、土や風といった霊符は周りに被害を与えかねない。雷の霊符が一番被害を与えにくく、かつ唇を手っ取り早く起こすに最適なのだ。

「巫と隼人は？」

雷雨が朋檜の羽をくいくいと引つ張る。

「あー、隼人の部屋に行ったはずだ」

「大事な話かあ……。おれらの核になった“オニ”は、九尾ほど怨念の力が大きくなかったから、助かったんだろうなあ」

鶴邪が両手を後頭部に当てながら、染々と呟く。彼らは自分の核となった“オニ”が、どんな末路を辿ったか知らない。

「そうやなあ。俺らの核になった“オニ”は、どんな思いをして死んだんやろな……」「適当に座ってくれ」

「うん」

隼人の自室。本棚と机と布団があるだけの殺風景な部屋。

巫は隼人に促され、畳に正座をして座る。

対して隼人は胡座をかいているが。

「巫、お前最近、九尾の記憶を夢で見るんじゃないのか？」

問われ、ぴくつと肩が揺れる。

「やっぱりか……」

そう言つと溜息を吐き、苛立たしげにがりがり頭を掻きだした。

「あんの糞ジジイ共……。こんなことも予測出来ないで何が本家だよ」

「僕達の核になった“オニ”を狩るように命じたのは、やっぱりあの人達しかいないよね」

「そうだな。俺の親父だよ。考えなしに九尾を狩るから、こういうことになるんだ……」

心苦しげに、表情を歪める。

九尾狩りに参加した被い師の末路を知っているからだ。

「やっぱり、九尾は被い師を呪つたの？」

「そうだな。今も、いつ呪いに蝕まれるか怯えてるよ」「……？怯えてるって、呪いはまだ本格的に発動してないの？」

「いや、発動してるよ。九尾を直接狩つた被い師達は、もう全員死んだ。激しい痛みを伴いながら、少しずつ身体が腐っていくんだ。既に五つの一族全員が滅ぼされてる。残ってる一族は後八つ。多分、

全ての一族を滅ぼすまで、呪いは消えないだろうな」

聴くに耐えない凄まじい悲鳴、徐々に腐りゆく身体。容赦なく鼻を貫く腐敗臭。

そんな状態が一ヶ月、続いたのだ。

最後には骨も残さず、跡形もなく全てが腐ったのだ。

九尾の怨念がいかに深かったのか、呪いを受けた本人も本家の人間も、この時に味わったのだろう。

今も呪いは消滅することなく、九尾殺しに携わった被い師の一族を滅ぼそうとしている。

呪いの礎である怨念は、巫の核に宿っている。

核を滅ぼさない限り、怨念も呪いも消えはしない。

しかし、核を滅ぼすということは、巫を殺すということと同義なのだ。

呪いが消えなければ、八つの一族が滅びることになる。

しかし、戦争に最も重要な戦力を欠かす訳にもいかない。

八つの一族か、戦力か。

本家の出した答えは戦力だが。

つまり、戦力にならない女子供、老人は見捨てたということだ。

巫はこの事実を知らない。「実はな、巫に渡したい物があるんだ」

そう言う懐から、先端に赤い石がついた小さな杖を取り出した。それを巫の手に落とす。

「……………?」

どうしていいか分からず、まじまじと見つめる。

「息を吹きかけてみる」

言われ、息を吹きかける。すると、掌にすっぽり収まるサイズだった杖が、一瞬で巫の身の丈ほどの大きさになる。先端の赤い石が、仄かな妖しいを明滅させる。

「何、これ？」

「杖だよ。お前専用のな。お前らは杖という媒介がないと、“オニ”の血が邪魔して被い師の血の力を引き出せないことは分かっているよな？」

「うん」

「そこで、だ。お前ら専用の杖を創ったんだよ。お前らの被い師の血を最大限に引き出す杖をな。で、その杖は一番難しかったんだからな」

赤い石をつつきながら、欠伸をする。

「その赤い石、なんだか分かるか？」

問われ、巫は首を捻る。

「分かんない。何？」

「それはな、殺生石だよ」「殺生石って、九尾の怨念が残り石になったってやつだよな？」

殺生石とは玉藻の前という官女になり、鳥羽法皇に近づき宮廷を乱した九尾を退治した際、身体は朽ちたが怨念は残り石となったのだ。この石が『人間は勿論、空を飛ぶ鳥、地を走る獣まで、近づき触っ

た者は命を失う』という強烈な毒気を発したため、石は砕かれ毒気は分散された。
砕かれた石の欠片は封印術に長けた一族が、それぞれ管理することとなった。

隼人は、一番怨念が残っている石を管理している一族に頼み込んで、石の欠片を譲り受けたのである。

「でも、殺生石なんて……」

巫の不安は最もである。殺生石など持っていたら、怨念を強めるだけではないか。

「大丈夫。毒をもって毒を制すって言うだろ？ 怨念と怨念をぶつけ合わせて、相殺させちまえばいいんだよ。怨念をもって怨念を制すって訳だ」

巫が驚いた表情で隼人を見る。

なんとも大胆な発想である。

下手をすれば怨念に殺されるのは自分なのだ。

怨念を防ぎながら別の貌に定着させたのだから、天晴れといえよう。
「これを持っていれば、あの夢を見なくて済む？」

森の奥深くに暮らしながら、人間と共存していた九尾。

九尾が九尾であることを知りながら、村の一員だと九尾を迎えた人間。

人と愛し合い、いつしか子供も出来た。

幸せだったのだ。その時まででは。

得体の知れぬ人間に足を傷つけられ、怯える弟を抱き締めながら人間を睨む兄。

——“才二”風情が人間の真似など、厚かましい——

その直後に振られた腕。血飛沫が舞う――。

血塗れになった我が子を抱き抱え、悲痛な叫びを上げ続ける姿。

あんなものを、見なくて済むのだろうか。

「ああ。その代わり、絶対に手放すなよ？壊すなんて持ってた他だ」

「うん。分かった」

杖を紛失する、あるいは破壊する、それは抑え込まれていた怨念が爆発し、巫の自我を呑み込み狂わせるということだ。「このクソ蜘蛛！抱きつくなああああ！」

「わーい！朋のふわふわの羽毛――！」

蜘蛛に手足を糸で縛られ、抱きつかれる朋檜。

蜘蛛は実に幸せそうな笑顔で抱きつく。朋檜は涙目で身体を振っているが。

「お前ら……何してんだ？」

自室から戻ってきたらこれである。

「蜘蛛、離れてやれよ。ガチガチに固まってるぞ」

蜘蛛に抱きつかれ、涙目になりながらガチガチと小刻みに震えている。

「蜘蛛……怖いんだよ……あの形に毛むくじやらの身体……」

どうやら蜘蛛に近づきたくない理由は、純粹に蜘蛛が怖いからのようだ。

生理的悪寒は、確かにどうしようもないかもしれない。

「そつだ。今日は華鬼の村に行く予定だけど、皆行くか？」

「でも、“折り鶴”が来ない？」

麟が隼人に肩車されながら、というよりさせながら言う。

「あー、大丈夫だろ。今日は争い自体も少ないし。そこまで強い“オニ”もいないしな」

「「じゃあ行くー！」」

鳳と凰が隼人にタツクルを食らわせた。「「戦場に出る以外で外に出るなんて、久しぶりだね！」」

鳳と凰が手を繋ぎながら、嬉しそうに言う。

普段、限られた空間でしか行動を許されない彼らにとっては、自由に外で遊ぶということは特別なことだ。

鬱蒼と木々や、我先にと成長を競う植物達。

美しい歌声で諦めることなく、意中の相手の気を引こうと躍起になる鳥。

もしくは踊る鳥。飾り羽を広げて、愉快的踊りを枝の上で披露している。

彼らにとっては、全てが新鮮。

茶色く荒れた大地。真っ赤に染められた大地。焦げた肉の臭い。鉄

の臭い。

そんなものばかり見てきた彼らにとっては、緑は珍しいもの。

「おいおい雷雨、寝るなよ」

隼人に肩車されている雷雨が、揺られて気持ちよくなったのか、うとうとし始める。

「雷雨の今日見てた夢、おいしかったんだよ。また見ないかな」

夢弦が雷雨を見つめる。隙あらば夢を食らう気満々のようだ。

「おいおい。獏は悪夢を食うんじゃないかなかったのか？」

「だから、悪夢だよ。怖い夢ならなんでもおいしいんだよ」鬱蒼と繁る森が開ける。すると、小さな村が現れた。よく見てみると、住人全員が髪が白いことが分かる。

「おや、隼人じゃないか。来たのか」

「おー壬生司^{みぶし}。お前がくたばってないかな」

銀の混じった白い髪に茶色い着物。あまり似合っていない。本人は気づいてないようだ。

「ここにいる限りくたばらんだろ。ここはいいところだ。争いも、いつ抜い師に抜われるかと心配しなくて済むからな」

「ぐさつと胸にくることをさらつと言ってくれるな」

「冗談だ」

楽しそうに遊ぶ子供達を見ながら、話に華を咲かせる。

「白銀、隼人が来たぞ」

屋根が藁で出来た家から、髪も着物も真っ白な子供が出てきた。白銀と呼ばれた白い子供が走ってくると、壬生司の腕を掴みながら隼人を見上げる。

【隼人、今日モ人間世界ノゴタゴタ、話シテクレルノ？】

【ああ、してやるよ。しかし、相変わらず修羅場が好きだな】

【ダッテ、面白イジャン】

それを聴いて大人二人、苦笑いをする。

最も、隼人よりも白銀の方が年上だったりするのだが。

「うわーん！隼人おお！僕ちん助けて！」

驚いて三人共振り返ると、白い大蛇に姿を変えた梓螭が子供に寄つてたかられ、尻尾を結ばれたり悪戯をされている。

「いいじゃないか！遊んでやれ！」

手を振りながら、大声を上げる。

「ヤダーー！僕ちんより皆年上のクセにー！」

梓蠅の叫びは無視された。「梓蠅、大丈夫かいな？」

「ぐすん……鱗……剥がされた……」

剥がされた大きな鱗数枚を名残惜しそうに持つ。

大蛇の大きさの鱗であるために、一枚一枚が大きい。

「朋檜も大丈夫か？」

「羽、少し歪られた」

身体のうちこちをさすりながら、禿げているところはないか確認する。

「朋！もふもふ！」

蜘蛛が実に素晴らしい跳躍力で、朋檜に飛びつくこととする。獲物を狙う蜘蛛さながらに。

「近づくなあああ！ぎゃあああ！」

避けようとしたが、一瞬遅く蜘蛛に抱きつかれてしまう。

涙目になりながら蜘蛛を引き離そうとする朋檜。

構わず抱きつきながら、羽毛の気持ちよさに幸せそうな笑顔を浮かべる。

それを楽しそうに見つめる華鬼の子供達。

その近くでなぜかゴーヤの間違った使い方を教えている鵜月。

隼人と一緒に、白銀にいろんな話を聴かせる巫。その横でぐっすり

と眠る雷雨。

歌を唄う鳳と凰。子供に催眠術を披露する夢絃。
鶴の姿に戻り、背中に子供を乗せてやる鶴邪。

最初の嵐は、すぐそこまで迫っている。

【あーあ、つまんなーい。手応えなさすぎ】

小柄な少年を、夕日が照らす。

大量の死体の上に座る、少年を。

様々な“オニ”の死体が、まるで物のように転がっている。

手足を引き千切られ、胴体が真つ二つとなり、顔の原形さえ留めていない死体さえある。

まさに、血みどろ。

しかし、少年は血の一滴さえ浴びてない。

【……柚螺、遊びじゃない……】

少年より大柄な青年が、静かに口を開く。

【分かってるよ。全ては荒神様のために。《亀裂》は本当失敗したなあ。あんなはずじゃなかったのに】

【……仕方なかるう。この世界そのものが抵抗してるのだから……
…。好きに弄られるのが、気に入わんのだろ……】

【世界が明確な意思を持って抵抗してきたなんて初めてだよ。まあ、この世界だから当たり前なんだけど。でも、抵抗した結果が歴史に残らない戦争なんて、流石に想像しなかったのかもね】

【……今は沈黙しているが、余りに人間が傲慢に振る舞うようなら、裁きを下すかもしれぬ……】

【まあ、ボク達にとつたら潰し合ってくれて好都合だけど】

【……椰汰^{やた}はうまくやってるだろうか……】

【大丈夫でしょ。幻影だけが得意な種族だっていうし。名前、なんだっけ？】

【……確か、華鬼だ……】 【ハア……ハア……】

父親である壬生司に手を引かれ、涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、白銀はひたすら走る。

足がもつれ転びそうになるが、なんとか持ちこたえ走る。生き延びるために。

しかし、身体能力は高くとも持久力は人間とさして変わらない華鬼の体力では、すぐに疲れてしまいさして遠くまで逃げられない。後ろから気配がした。自分達を追ってくる、血に塗れた黒い陰が。

最初、何が起きたのか、理解出来なかった。
巫女装束を纏った人間達が、突然やって来たのだ。
そして、突然舞う血飛沫。

次から次へと湧き上がる悲鳴。逃げ惑う華鬼達。

その直後に現れた、黒い陰。

黒い陰は、異質な存在。

全てが、黒――。

口が三日月型に歪み、笑っているのだけが、分かった。陰は笑う。楽しそうに。実に楽しそうに。

【おー、被い師じゃねえの！こりゃあご馳走じゃん！まずは腹ごしらえだな！】

その直後、陰の身体がぶわりっと広がる。

人の形の原型を留めずに、雪崩のように被い師達に覆い被さる。

そして、圧縮。

ばぎつ、ぶぢゅつと骨が砕かれ、肉を押し潰す音が響く。

「ぎゃああああああ！」

「嫌だ、たすげ……」

圧縮されるにつれ、悲鳴も小さくなり陰の身体が人の形へと戻る。

【んーやっぱ普通の人間より被い師の方が、能力がある分うまいな。大した差はないけど】

言いながら身体を広げ、近くで震えていた華鬼を食らう。

【んー味は人間に似てるけど、やっぱ人間が一番だな。さて、殺りますか】

腕を刃の形に変え、にたりと笑う。陰の腕が振られる度、血飛沫が

舞う。

【んーいいねえ。肉を裂くこの感触】

また腕が振られ、血飛沫が舞い、華鬼の身体が落ちる。
落とした華鬼の首を、“口”に放り込んだ。
ばぎっ、ばぎっ、と噛み砕く音が響く。

【なぜだ……】

【んー？】

声がした方向を振り向く。

怯えて震えている子供を胸に抱きながら、華鬼特有の白い髪に茶色い着物を着た男が、陰を睨む。

【なぜだ！“オニ”のお前が、なぜ俺達を殺す！？俺達は戦わない、戦に参加する“オニ”と俺達は関わらない。それで納得したはずじゃないか！】

【確かに俺は“オニ”だけど、この世界の“オニ”の事情なんざ“俺達”には関係ねえのよ。知ったこっちゃねえ。この先障害になり得る存在を消す。それが荒神様の命令な訳】

腕が振り上げられる。

【お前達の幻影の力は凄まじいんだろ？だから、荒神様のために死ねよ】

腕が振り下ろされる。しかし、

【ありや？】

切ったはずの男と子供の姿が、煙のように霧散する。

【へえ……すつげえ！すつげえなあ！今の間のどこに幻影かける暇があつたんだ？全然分かんかったぞ】

まるで、子供のようにはしゃぐ陰。

二人の姿を探し、きよろきよろと周りを見渡す。

【みーっけ】

にたりと笑う。

白い着物の裾が、木の影から見えた。逃げる華鬼。追う陰。陰はまるで、彼らが疲れて走れなくなるのを待ってるかのように、じわじわと追い詰める。

壬生司とてそのようなことは百も承知だが、逃げない訳にはいかない。

【鬼さんこちら、手の鳴る方へ！つてな！ひやははは！】

この状況を楽しんでいる陰の様子に腹を立てなくなる壬生司だが、それを押さえつけ冷静さを装い自身を奮い立たせる。

隼人のいる場所まで行けば、なんとかかなると思っていた。本家のある場所まで。

そこに着くまでに体力が持たないことを、考えなかった。

体力の限界を迎え、もつれた足が地面にとられ、転んでしまう。

繋いでいた白銀の小さな手が、ほどけた。

咄嗟に振り向く。

【まずは子供っと】

背後から白銀に刃が振り下ろされる。

白銀は自身の運命を悟り、目を瞑る。

自身を胸に抱き締める、温かく優しい腕の感触が、伝わってきた。

目を開ける。

無情な刃が、血に染まる。

地面が鮮やかな赤に、彩られる。

温かく優しい腕が、地面に落ちる。

【父様……？】

【白銀……お前は、生きる……。こんなところで、死ぬ……。いな……。？】

必死に伸ばされた手を掴み、涙を流しながら頷く。

それを見た壬生司は白銀を安心させるために、微笑んだ。

掴んでいた手から、力が抜ける……。

【父様……？嫌ダ……起キテヨ……父様！】

いくら呼んでも、もう返事は返ってこない。

それを理解し、涙に濡れた瞳で陰を見る。

徐々に漆黒に染まる瞳で。

【ほー幻影か？いいぜ、かけてみる。ちょうど威力を味わいたかったところだからな！】

純白の光が、森を包んだ。「なんで……」

目の前の光景が理解出来ずに、意味もなく呟く。

なぜ、このようなことになってるのだろう？

つい昨日、ここに来たばかりなのに。

目の前に広がるのは、無惨に切り裂かれた無数の死体。

血が染み込み、赤茶けた土。

皆、昨日は笑っていたのに。

夜明け前、大きな力が爆発したのを感じて、急いだ来たのだ。

なぜだ？なぜ、皆死なねばならなかったのだ？

自分にしがみついていた巫と蜘蛛の背中を、あやすように撫でる。

「隼人！白銀と壬生司が！」

空から生き残りがいないか搜索していた獅虜が、森を指差しながら叫ぶ。

皆一斉に森の中へ走る。

そこにあっただのは、血塗れなり、ぴくりとも動かない二人の姿。

そして、不可解な丸い黒い陰。「壬生司！」

駆け寄り、壬生司の身体を抱える。

どんなに名を呼んでも、もう返事は返ってこないことなど分かっている。

しかし、それでも呼ばずにはいらなかった。

まだ乾ききっていない血が、衣服と手を染める。

「隼人、白銀は大丈夫だよ。ちょっと擦りむいてるだけ」

「そうか……。よかった」

せめて、白銀だけでも。

白銀を助けるために命を犠牲にしたのは分かりきったこと。

その白銀が生きている。せめてもの救いだ。

しかし、被い師達はどこに行ったというのだろうか。

あの大きな力の爆発は？

この丸く黒い陰は、なんだというのだろう。

“オニ”であることは間違いない。しかし、このような“オニ”など知らない。

陰に手を伸ばしてみる。

【ぶっはあ！やあつと再生出来たぜ……って、被い師じゃねえの！】

陽気な声と共に丸かった陰が、人の形へと姿を変える。

大きさが掌サイズとかなり小さいが。【……お前、それで隠れてるつもりか？】

陰がなぜか枯れ葉を盾にし、しゃがみこんだ。

【あ、やっぱり誤魔化されてくんない？】

【それでどうやって誤魔化されると？それよりお前はなんだ？】

壬生司と白銀を巫に任せ、霊符を構える。

【俺か？俺は椰汰つつうんだ】

【いや、そうじゃなくてだな……】

【ん？種族か？あれだよ。食人鬼の王族ってやつだよ】

【……………！】

それを聴いて絶句する。食人鬼は《亀裂》を開き、戦争を招いた直接の原因。

隼人から、霊力が立ち上る。

【ほー、俺とやり合うか？って言いたいところだけど、ちいっと今はキツいな】【キツい？お前王族だろ？何がキツいんだ？】

隼人が殺気を隠すことなく言い放つ。

【いやゝあの子供恐ろしいわ。幻影の威力味わいてえなあと思ってわざとかかったら、魂まで破壊されそうになったのよ。流石に魂を破壊されたら死ぬしかないからな。跳ね返さなかったらマジで死んでたつつうの。それでも魂にヒビが入ったけどな】

そこで一旦言葉を区切り、己の身体を見渡す。

【あゝあ、精神を再生するためとはいえ、かなりちっちゃくなつたなあ。仕方ねえ。帰って寝るか】

【おとなしく帰すと思うか？】

【そりゃあ帰さねえだろな。けどお前らのモルモットになるなんざ、まっぴらごめんだからな！】

人の形を捨て身体を広げると、隼人へと襲いかかる。【止め、捕らえよ】

いつもの隼人からは考えられない、怒気を孕んだ低い声で術式が唱えられる。

突如として空間に波紋が広がり、隼人と椰汰の間に障壁が現れる。

【おおおっ！？】

勢いがついているために、止まりきれずに障壁にぶつかる。その瞬間、障壁が椰汰を捕らえようと面積を広げ、包み込む。

【ちっ】

人の形へと戻り、腕を刃へと変え、障壁を切り裂く。捕らわれかけたが、間一髪免れる。

【あつぶねえ！閉じ込められたら連れてかれるとこだった】

そう言ってる間にも霊符が投げられる。

それを身体を変形させることで、器用に避ける。

そこに、

【おおっ！？何このネバネバ系！？】

蜘蛛の物と思われる、非常に粘り気の強い糸が椰汰を捕らえようとした。

【蜘蛛特製の糸だよ。次は捕まえる】

蜘蛛の目がきらりと光る。【はあくめんどくせえのばかり集まってるな】

椰汰があるのかないのか分からない目で、見渡す。

【こうなりや……逃げるが勝ちってな！】

叫びに近い声を上げ、身体を広げながら器用に木々の間を縫っていく。

【あっ！待てー！】

蜘蛛が椰汰を追う。蜘蛛も器用に木々を避けながら、たまに糸を出しながら追いかける。

【牙凰、馬棍綱召喚】

隼人が地面に素早く“式”召喚のための陣を描く。

“式”とは祓い師と主従契約を結んだ“オニ”のことである。分かりやすく言えば西洋の使い魔的存在。

契約を結べば主である祓い師が死んだ場合、“オニ”も道連れとなる。契約を破棄しない限り。

“式”の契約を結ぶには、“オ二”との絆と、“オ二”の命を背負う覚悟がなければ結べない。

“オ二”も己の命を預けてもいいと思わなければ、契約を結ばない。“式”契約は、被い師と“オ二”との究極の信頼関係といえよう。陣が赤紫色に光り輝く。

そこに、巨大な狼と梟が現れた。【よお隼人。久しぶりだな】

銀色の毛並みをした、首の辺りに触手のようなものを二本生やした狼が、隼人に親しげに話しかける。

【して、あのふざけた輩を捕らえればよいのかの？】

隼人の頭に止まっている白と茶色の毛並みをした、見た目はごくごく普通の巨大な梟が翼を広げる。

翼を広げれば三メートルはあろうかという大きさだ。

【おう。多少は傷つけても大丈夫だ。無理はするなよ】

その言葉が合図となり、二匹が同時に駆け出し、飛翔する。

ふと後ろを振り返ると、壬生司と白銀の姿がないことに気づく。巫と獅虜が連れて戻ったのかと思い、村に戻る。

【巫……お前】

手首をスタスタに切り裂き、血を流す巫の姿に絶句する。

【隼人……皆駄目だった……】

壬生司の横で膝をつき、うなだれる。

巫は不死鳥の核も持っているために、その血には癒しの力が宿っているのだ。

人間に与えれば傷を癒すだけでなく、不老不死さえ与える強い血の力。

だが、いかに強い力でも、死んだ者にはいくら与えようと効力はない。

巫は、今にも泣き出しそうな表情をしている。【待あああてえええええ！】

蜘蛛の元気な声が、森の中に響く。

【待てって言われて待つ馬鹿がいるかああ！】

椰汰も逃げながら親切にツッコミを入れる。

蜘蛛が椰汰に飛びかかる。一瞬で蜘蛛の姿となって。

【ぎいやあああああああつ！蜘蛛おおおおおつ！！】

蜘蛛に飛びつかれ、本気で泣き出す椰汰。

どうやら王族であろうとも、苦手なものは苦手なようである。

糸で縛ろうとするが、暴れまくっているためになかなか縛れない。

蜘蛛の目がきらりと光る。

椰汰の身体にがっぷりと噛みついた。

【ぎいやあああああああああ！やめて！おとなしくするからやめて！】

蜘蛛は満足気に笑いながら、糸でぐるぐる巻きにし始める。

ちなみに噛みつき攻撃はただ噛みついていいるのではなく、“オニ”
にとって命の源である霊力を吸い取っている。
霊力が残り少ない椰汰にとってはたまったものではない。

【どうやら、俺達の出番はないな】

【そうだの……】「あつ」

巫と獅虜が同時に声を上げる。

二人の目の前で華鬼の身体が、灰となって崩れ、風に流され散っていく。

それを、じっと見守る。

“オニ”は死んでしまえば、後には何も残らない。

種族によつて時間差はあれど、灰となってその身体は消え去る。

“まざりもの”である巫達とて、それは例外ではない。

「隼人、皆！この黒いへんてこなの捕まえたよー！」

暗く重い雰囲気吹き飛ばしたのは、蜘蛛の明るい声だった。

後ろからは牙鳳と馬棍綱がついてきている。

椰汰は糸でぐるぐる巻きにされており、ぶんぶん振り回されているが。

【振り回すな！さっきから言ってるだろが！被い師、なんとか言ってくれ！】

まさかの隼人に懇願である。

「蜘蛛、もつと遊んでやれ」

「はい！」

【いやー！！】

本家に着く頃には、椰汰は更にやつれていたという。「蜘蛛、そいつ貸してくれ」

「はい！」

言われ、ぐるぐる巻きの椰汰を渡す。

見るも無惨にやつれ、身体が小刻みに震えているが。

【大丈夫かお前】

【大丈夫じゃないやい。ぶんぶん振り回されるって怖いんだぞー…】

威勢のよさはどこかに吹っ飛んだようだ。

「そいつ、総長に渡さへんの？」

獅虜が不思議そうに問う。

「あの馬鹿親父に渡してみる。せつかく王族の情報を少しでも得るチャンスかもしれないのに、あいつに渡したら全部ぶっ壊しになるに決まってる」

恐らく情報を聴き出す前に、彼らの実験道具にされるのは目に見え

たことであろつ。

【おとなしく言うと思うのか？】

【言いたくなかつたら別にいいぞ？ 蜘蛛に喰ってもらつから】

【すいませんした】

蜘蛛が目をきらきらさせているのを見て、あつさり翻す。
王族である椰汰の霊力は、蜘蛛にとって美味なのだらう。
一度噛みつき霊力を吸って味をしめたらしい。

「食べていいの？」

「後でな」

【後で食わすのかよ！】 「あ、隼人ー！」

入り口で、麟が抱きついてきた。
雷雨と夢絃も一緒である。

「他の皆は？」

「“折り鶴” が来てね、麟達以外皆連れて行かれたの」

【ほお。じゃあ、あいつら暴れまくってるんだな】

椰汰が口を三日月型に歪め、不気味に笑う。

【どういうことだ？】

【俺の仲間が暴れてんのよ。計画実行のために】

【計画……？】

【そう。荒神様のためにな。この世界を手に入れる準備さ】

荒神とは王族の中でも頂点に立つ王である。
その程度しか、本家は認識していない。

【そうさ。この世界はな、全ての世界にとっても重要な意味を持つてんだよ。この世界を支配するだけで、全ての世界を支配出来るほどのな】
【それは、どういうことだ？】

椰汰の言葉に皆驚く。

【んー教えてほしいのか？】

「蜘蛛」

「はい」

蜘蛛が口を開け、その中に放り込もうとする。

【ぎゃあああああああ！すいませんした！それだけは勘弁して！】

椰汰を蜘蛛の口から離す。蜘蛛が残念そうな表情を滲ませる。
本気で泣いて懇願する姿が、なぜか不憫に見えてくるものだから不思議である。

【じゃあ話せ】

【この世界はな、始まりの世界なんだよ】

【つまり？】

【つまりだな、この世界は全ての世界の中で、一番最初に生まれた世界なんだよ。この世界から、全ての世界が生み出されたんだよ。だから、異世界は全てこの世界の生み出した子供って訳。勿論、俺達のいた世界もな。この世界が生きているから、全ての世界は生きていられる。逆にこの世界が滅ぶ時、全ての世界が滅ぶ時だ。だからこそ、この世界を支配することは、全ての世界を支配することに繋がるんだよ】

一旦区切り、笑う。

【俺達は全ての世界を生み出した、始まりの世界をずっと探してたんだよ。で、やっと見つけたんだ。手に入れるまで、荒神様が望む限り、この世界を諦めない】

【まあ、俺には関係ねえけどな。忠誠誓ってる訳じゃねえし】と呟いたのを、隼人は聴き逃さなかった。「なんだありやあ……」

鵜邪が信じられないと言うように、ぽつりと呟く。

彼女達がいるのは、街を見下ろせる建物の上。

彼女達の眼下に広がるは、色鮮やかな赤。

色鮮やかに咲く、真っ赤な血の赤。

どこもかしこも血、血、血。

そして、

「あれは……」

「多分、屍鬼の類か、食人鬼なのね」

彼女達の目の前で、若い女性が街の住人であろう人間に、何人も寄つてたかられ、生きながら喰われていく。凄まじい悲鳴が聴こえてきたかと思うと、瞬く間に聴こえなくなる。そんな光景が、あちこちで見受けられる。

まさに、地獄絵図。

鵲月が徐に眼鏡を外す。

目を瞑り、じっと佇む。

その間、項にある“瞳”が、ぎょろりとせわしなく動いているが。しばらくして、目を開ける。

「街全体がこうなってるのね。生存者は“視る”限りいない。いたとしても、もう助からないのね」

「僕ちん達は、噛まれたらマズいかな？」

「半分は人間だから、多分マズいのね」

また一人、人間が喰われていく。鮮やかな赤が飛び散り、かつて人間だったものが人間を喰らう地獄絵図。

その風景の中に、とてつもなく巨大な怪鳥の姿が朝日に照らされ、影を落とす。

ある建物の屋根の上を旋回し、ゆっくりと舞い降りる。

地に足がついた途端、一瞬で姿が縮む。

朋檜である。

「どうだったよ？あつちは」

唇が眼下で喰われていく人間を険しい表情で見つめながら、訊く。

「あっちも同じだ。酷い話だけど、生存者より住人をこの街から出さないことを優先するしかない。じゃないと、もっと大変なことになる。今ならまだ間に合う」

「そうだな。隔離結界を張るか？」

「それが一番だよ。外に出れないし、外から入ってこれないし」
「

「そうと決まれば行くぞ」

「「うん」「朋檣は街の北に、唇は南に、鳳と凰は東へと向かう。それぞれ結界を発動させるための陣を描く。」

「出来たか？」

「おう」

「「出来たよ」」「

「じゃあ、いくぞ」

陣に靈力を込め、“文字”に意味を持たせる。
意味を持たせて初めて、陣は術式として始動する。

【】【】【展開】【】【】

四人の声が狂いなく重なる。

【【【閉じこめよ。許可なき者は立ち入りを禁ずる。隔離せよ】】】

眩い青白い光が陣から立ち上り、空まで届くほど高さを増すと、光はそれぞれの陣と繋がる。

【【【隔離】】】

陣が、一際青白い光を放った。隔離結界に包まれた街。これで街から出ることも、誰かが街に足を踏み入れ、犠牲になる心配もない。しかし、まだ生きているかもしれない街の住人を、犠牲にする結果だが。

結界を張り終え、先程と同じ建物に集合する。

「後は、この人達をどうするかだね」

「それが一番問題だよな」

眼下で人間を、食糧を求め徘徊する者達。

あれは生きているのか死んでいるのか。

人間としては確実に死んでいるのだろうが、恐らく肉体としては生きています。

人格は死んでいるというのに肉体は生きているとは、なんと残酷なことだろう。

また一人、喰われていく。

【ほお。ここまでの結界を三人で形成するとはのう。荒神様の言うてた通りじゃ。お前達をさっさと消すでしょう】

頭上から不気味でいて透き通った声が、響いた。
空を仰ぐと、赤い女が、ただ笑みを浮かべている。髪も、瞳も、唇も、服も、爪すらも真っ赤に燃え上がるように赤い。
赤い唇に、不気味でいて妖艶な笑みを浮かべる。

【ぼさつとしておる暇はないぞ？ほれ】

女が腕を振る。その瞬間、三人の背後にある建物が木っ端微塵に爆発し、燃え上がる。

その近くを徘徊していた者達も、一緒に燃え上がる。

【次はうぬらじゃ】

【お前、食人鬼の王族だろう？】

朋檜が女を睨む。

【そうじゃが、それがどうした？】

【じゃあ、どうして血族を殺すんだ？てっきり血族も使うのかと思っただけど】

【使ってもよいが、動きは鈍いしのう。うぬらには適わんわ。所詮うぬらをおびき寄せるための駒よ】

【【僕達を呼ぶためだけに、街の人達を殺したの？】】

二人の髪が風が吹いていないというのに、煽られる。

【そうなるのう。しかし、何を怒る理由がある？うぬらとて、命令があれば殺すのじやろう？何が違うと言うのじゃ】「ほれほれ。ちゃんと逃げねば吹き飛ぶぞ？」

女の腕が振られ、その度に爆発が起こる。

空間がゆらりと揺れた次の瞬間には、爆発である。

霊力で空気中の水分などに働きかけ爆発させているのか、単純に霊力を込めて爆発させているのか。

どっちにしる朋檜達はゆらりと揺れる空間に捕まらないように、駆け回る。

「朋なら“オニ”の姿になって、空に逃げれるんじゃない？！」

「デカすぎていい的になるに決まってる。ん……？」

走りながら、朋檜が唇を見つめる。

「なんだよ？」

「お前の幻の力ってさ、あの女にも効くか？」

「さあ……やってみねえと分かんねえ」

「じゃあ俺と鳳と凰が囃になるから、頑張れ」

「マジかよ。まあ分かった。殺されるなよ？」

「お前もな」【ほう？何か楽しませてくれるのかの？】

静かに佇む十メートルはあろうかという雄大な大怪鳥を目の前に、

女はただ目を細める。

大鵬はよく物語に登場する怪鳥である。

『封神演義』にも『西遊記』にも登場する。

どちらも主人公達では対処出来ずに、釈迦如来といった天上人が捕らえることになる。

つまり、大鵬はそれだけの力を持つ“オ二”なのだ。

【しかし、大きいとその分的になりやすいぞ？】

女が腕を振った瞬間、朋檣も翼を振る。

翼を振ったことで発生した突風が、大量の砂を巻き上げ建物を吹き飛ばし、周りに群がる住人達を吹き飛ばし、ゆらりと揺れた空間さえ破壊する。

【……………！ほう……………、一振りでこれとは。少しは本気を出さねばならぬかの】

【【余所見してたら危ないよ？】】

女を黒・青・赤・白・黄という五色で彩られた鳥が、女の腕を鉤爪でしっかりと掴み地面に叩き落とす。地面に叩き落とされ、女は地面にめり込んだ。

めり込んだ瞬間、亀裂が四方八方に散る。

鳳と凰は小さく旋回しながら見つめる。

【ふむ……………なめておったの。遊びはやめてさっさと始末じゃ】

女がぱつりと呟く。手を地面につき、身体を起こす。

風がないのに女の髪が煽られる。

その瞬間、

炎が、炸裂した。

炸裂した炎は縦横無尽に踊り狂い、全てを焼き尽くそうと躍起になる。

女が腕を振る。炎が蛇の形を取り、朋檜と鳳凰、それぞれに襲いかかる。炎が二人に襲いかかる。

朋檜は突風で吹き飛ばし、鳳凰の二人は美しい歌声を奏でる。二人に襲いかかるうとした炎が方向を変え、女の元へと還る。腕の一振りで消えてしまうが。

【こざかしい……】

女がふわりと浮き上がる。小さな炎の球体がいくつも形成される。

鳳凰が美しく哀しい旋律を奏で始める。

女が腕を振ったその瞬間、炎は女の命令に従うことなくその場で爆発を起こした。

轟音と共に女の姿が炎に吞まれる。

上空を旋回しながら、状況を確認める。

【やったか？】

【【分かんない】】

炎が徐々に小さくなっていく。

女が姿を現した。肌が無惨に焼け焦げ爛れているが、みるみるうちに修復されていく。

密度を増した炎が炸裂した、その時だった。

霧が、街を覆い隠していく。

【……………？なんじゃこれは】

霧をじっと見入ってしまふ。

【捕まーえた！】【やっと捕まえたぜ！】

突如、唇の姿が現れる。空を飛ぶことが出来ない彼が、浮かんでいく。

【ほう……妾を捕らえるだと？】

【もう捕まえたんだよ！実はあいつらも途中から幻影だったけど、気づかなかつただろ？】

唇が朋檜と鳳凰を指差す。女が三人に目を向けた瞬間、跡形もなく霧のように霧散した。

【俺、幻影の技術上がった！】

敵を前に無邪気に喜ぶ。

【こざかしい真似を……】

腕を振り炎を爆発させる、が。
ゆらりと唇の姿が揺れるだけに留まる。

【言っただろ？捕まえたつて。あんたはもう、俺の腹ん中にいんだよ】

「「おっきいね」」

「蛤にあるまじき大きさだな」

眼前に鎮座する巨大蛤を見上げる。

街が消え、その代わりに蛤の姿が浮かび上がったのだ。

今や街は、女や住人達と共に唇の腹の中だ。【腹の中……だと？】

女の眉間に皺が寄る。かなりご立腹なようである。

【^{しん}蜃^{しん}って“オニ”を知ってるか？】

唇が腕を組ながら訊く。女は眉間に皺を寄せたまま、睨む。

【その様子じゃ知らないんだな。蜃が息を吐き出すとな、空中に楼閣が浮かび上がるっていう幻影を見せるんだよ。ちなみに蜃気楼は蜃が作り出すって言われてるんだぞ】

自慢気に胸を反らす。

【……楼閣など見なかったがな】

【あの二人の幻影が楼閣代わり。分かる？】

【なるほどな……。しかし、内側からうめを破壊すれば問題なからう】

【わああ。でもな、蛤ナメんなよ】

突然、地響きが二人を襲う。

「何々!?!」

「唇……?」

よく見ると蛤の口が僅かに開き、煙が立ち上っている。
蛤の姿が徐々に小さくなっていき、少年の姿に戻る。

「うっう うええええ……」

「唇、大丈夫」

「生きてるから大丈夫だろ」

「大丈夫じゃない……。あの女、俺を焼き蛤にするつもりか……」
唇の口から立ち上った煙は、女の炎に炙られたからのようだ。

「とりあえず、あの女は大丈夫だろ?」

「まあな。でもエライ目に合った」「わあああん!何あれ!」

「多分“オニ”の死体を繋ぎ合わせて作った屍鬼なのね」

「だから再生力が半端ないのか」

彼らの眼前には、巨大な“オニ”が聳え立っている。

様々な“オニ”を繋ぎ合わせて造ったのか、様々な身体や顔が、統一なく繋ぎ合わされている。

目のある場所に口が腕が、鼻のある場所に目が。

更には繋ぎ目があり、糸のような物で脱い合わされている。

切られた腕の断面が、うにようによと動きながら修復されていく。

見る者によつては吐き気を催すところである。

屍鬼には 食べる という本能しかない。

そこに生きていようが死んでいようが、本能を満たせば問題ではない。

本能だけの食人鬼と化したかつての住人が、屍鬼に摘まれ口の中へと放り込まれる。

「こいつら、どうするよ？屍鬼ならもう死んでるから、オレの“声”は効かねえぞ」

「困ったのね【アゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ……！】

突如として屍鬼が叫び声を上げる。

「なんだあ！？」

「ぶ、分裂してるよ！？気持ち悪！」

ぼこぼこ音が響き、顔と顔の間から真っ二つにベリベリと裂けていく。

ふたつに裂け、それぞれが元の形へと戻っていく。

「まさかこれ、時間経ったらまた殖えるんじゃない……」

「きつとそう……だよ。ゆ、ユメタンどうしよ……」

「一番有効なのは炎だね。奴らを動けなくして、灰になるまで灼くのね」「で、動けなくするってどうやるの?」

「……………」

沈黙が包む。

「考えてなかったの?」

しばらくの沈黙の後、徐に梓蠅の肩に手を置き、親指を立てた。

「梓蠅、よろしくなのね」

「マジで?」

「マジだ」

「暢気に喋ってる場合じゃねえぞ。あいつらオレ達エサにするつもりだぞ」

言われ、屍鬼を見ると、唸り声を上げながら三人に近づいてくる。

「梓蠅、殺るのね? 殺らないのね?」

「僕ちゃん頑張ってくるよ!」

そう叫び鷗月の手から逃げ出す梓蠅。

神々しい光と共に、純白の大蛇が姿を現す。純白の大蛇となった梓

蝮は、蛇とは思えぬ速さで屍鬼へと巻きつく。

巻きつき、締め上げていく。

屍鬼も負けじと梓蝮の胴体を掴み、引き千切ろうとする。

引き千切ろうとする腕に尻尾を巻きつけ引つ張った瞬間、付け根から腕がもげた。

【ヤダーッ！気持ち悪ッ！】

心からの声なのだろう。涙目である。

もげた腕は干からび、干からびていく様子も吐き気を誘うが、付け根からうのようにと組織が再生されていく。

さっさと終わらせたかったのだろう。

一気に締め上げ、術式でも使ったのか屍鬼は原型を留めないほどバラバラになる。

が、破片同士が蠢きながら結合していく。

「うへえ……」

「流石に気持ち悪いのね」

言いながら眼鏡を外す。額に、緑色の瞳をした“目”が開く。

“目”の色が赤へと変わっていく。

赤へと完全に変わった次の瞬間、轟音と共に屍鬼が炎に包まれた。

【—————ッ！】

炎に包まれた屍鬼の“口”から、不気味な声が撒き散らされる。

焼き尽くされるだけだったはずの歪な塊が、弾けた。

弾け、住人にへばりつく。へばりつき包み込み、“喰らっていく”。

ばきばきと、骨を砕き肉をすり潰す音を響かせながら“喰らうていく”。

最後に残るのは歪な塊。歪な塊同士が喰らい合う。喰らい合いながら、巨大になっていく。

「うへえ……マジかよ！？殖えてるぞ！？」

「これを造った奴も考えたのね。攻撃されれば殖えるなんて」

「どうするよ……？本当なら灰にすれば終わるのに」

「……凍らせるのね」

「凍らさんの？でも、抜えねえぞ？」

「抜い方は今は分からないからどうしようもないのね。だから凍らせる。一時的な封印なのね」「じゃあ梓蝮、よろしくなのね」

「おっけー！」

巨大化し、俊敏性が増した屍鬼の腕をかくぐりながら、会話する。少年の姿に戻った梓蝮が、再び大蛇の姿に戻る。

尻尾を掴まれた。

【イヤーーッ！気持ち悪い手で触らないでーッ！】

尻尾を振り回していると、またもや腕がもげる。

脆さは変わらないようだ。

梓蝮が地面に頭を突っ込みだした。

実に簡単に、純白の蛇体が地面に吸い込まれていく。

「後は梓蠅を待つだけか」

「二分くらいなのね」

「それにしても、オレ死者は嫌いだ」

「仕方ないのね。生きた者にしか死の声は意味ないのね」

凄まじい地響きが、地面の下から襲ってきた。

「きたきたあつ！」

急いで屍鬼の側を離れる二人。

二体の屍鬼の下の地面の下に、大きく亀裂が走る。

屍鬼に高度な判断力や知能は存在しない。

屍鬼の一体が、一歩踏み出した時だった。

轟音と共に地面が崩れ落ち、巨大な屍鬼二体を呑み込むほどの巨大な穴が、ぽっかりと口を開ける。

地面から梓蠅が姿を現す。

「さて」

鵲月の額の“目”が、赤から水色に変わる。

風が舞い、雪が舞う。

吹雪が止んだ時、穴は氷漬けになっていた。氷漬けとなった穴を覗く。

二体共動きを封じられ、万歳をしているような格好をしている。

「とりあえず、これを本部に転移させるのね」

「だな」

氷に陣を直接刻み、呪文を唱える。

眩い虹色の光が発せられ、氷と共に消えていった。

「本部、今頃いいもん手に入ってたって喜んでたりしてな」

「きつとそうなのね。阿呆が多いから、氷溶かしきって復活させなきゃいいのね」

「ユメタン僕ちん頑張ったよ！褒めて褒めて……へぶしっ！」

「寄るな」

抱きつこうとしてきた梓蠅の顔面に、容赦なく拳を叩きつける鵲月。地面に倒れ伏すが、無視である。

「あ、朋達だ」

空を仰ぐと、巨大な鳥が上空を旋回している。「皆大丈夫か？」

「大丈夫。ヘンテコ真っ白」

突然、轟音と共に玄関が崩壊した。

埃が舞い上がり、椰汰については白くなっている。

【振り回すな！埃取るからって振り回すな！】

隼人が霊符を構える。埃の中から立ち上がる二体の影が見えた。

【朱雀よ……もっと丁寧に着地出来んのか？】

【いやゝすまんすまん。突っ込んでもうたわ】

【朱雀と白虎……？なんで四神のお前らがここに？】

敵ではないことが分かって、霊符を懐にしまう。

【久しぶりだのう隼人！勢い余って玄関壊してもうたわ】

紅い髪を靡かせ、朱雀と呼ばれた男は豪快に笑う。

【すまん。後で修復させておく】

もう一人は真っ白な髪をしていて、着物も純白である。

【まあいいけどよ……四神のお前らが本部になんの用だ？】

【当主に合わせてほしいのだ。我らは傍観者ではおられなくなった】

【ほう？では、我らと同盟を結ぶ気はないと？】

薄暗い部屋の中、よつつの影が火花を散らす。

その横で、腕を組み見守る影。

【こっちは全ての“オニ”、八百万の神々も合意しとるんだがなあ】

【害ある存在であるお前らを狩る我々が、なぜお前らと同じ立場に立たねばならん】

【そろそろそのつまらんプライド、捨てた方がいい】

【奴らを甘く見ていると、死ぬぞ？荒神という存在がどういう存在か、分かっとなるのか？その気になればお前らなぞ、敵ではないぞ？】

【優秀な人材は沢山ある。心配ご無用。“オニ”などと同盟を結ぶ気はない】

【頭の固いジジイめ。隼人、このジジイの頭かち割ってお前が当主になったらどうだ？その方が被い師の未来も安泰ってな】

【いや……それは……てか当主は引き継ぐ気ねえし】

【なんじゃ、残念。まあとりあえずは、交渉決裂か。白虎よ、どうする？】

【否が応でも協力し合わねばならぬ時は来る。そのことをすぐに味わう時が来よう。奴らは動き出したのだからな】

【確かにな。今は帰るか。覚えておけ、我らに残された猶予は後百二十一年。百二十一年後、我らは未来をかけて戦うことになるっ】

【悪いな。うちの頑固ジジイが。“オニ”が同意したって本当か？】

頭を掻きながらバツが悪そうに口を開く。

【ああ、あれか。あんなもん嘘に決まっとなるだろ】

朱雀の言葉に思わず吹き出す。

【え？あれ嘘なのか？】

【そりゃあそうだろう。全ての“オニ”が被い師と仲良くすると思
うか？】

【まあ……そりゃそうか】

【全ての“オニ”が合意しとると言えば、怖じ気づいて契約すると思
ったんだがのう。頭の固いジジイ共め】

椅子に勢いよく座る。隼人はその横で、立ったまま壁に凭れる。

【まあ、あの頑固ジジイのことだからなあ】

【八百万の神々が合意しとるのは本当だがな。“オニ”にも、合意
させねばならん】【では、我らは帰る。白虎、行くぞ】

鳥の姿へと形を変える。その背に乗る白虎。

【では。また会おう】

白虎が言い終わる前に、朱雀は飛び立つ。風にのった途端、凄まじ
いスピードで一気に空へと舞い上がった。

「虎さん、よく立ってられるね」

麟が隼人にしがみつく。

朱雀達と入れ替わりのように、今度は眩い光が現れた。

「おー、お前からお帰り」

「「ただいまー！」」

鳳と凰が勢いよく隼人にタツクルを食らわせる。

「朋」

蜘蛛がやはり朋檣に飛びつく、が、かわされ床にキスをする羽目になる。

ついでに椰汰は床にたたきつけられた。

「そいつ、何？」

唇が面白そうに椰汰をつつきながら訊く。

「食人鬼の王族って言うてるよ」

【そうだぞ！オレ様はお前らより偉いんだぞ！もっと敬え……って、そのぶつとい野菜はなんですか？】

【「ゴーヤって言うのね。お尻から味わってみるのね」】

【「鵲月ちゃんやっちゃえやっちゃえ！」】

蜘蛛と麟が椰汰を振り回しながらはしゃぎまくる。

【「ぎゃああああああっ！お尻やられたくよ！振り回さないで！すんませんでした！」】

涙を滝のように流しながら、必死の訴え。

「お前ら……そんなところではしゃぐな」

苦笑いを浮かべながら、彼らを部屋へと連れる。「しかしあの屍鬼には驚いたな。あんな屍鬼普通作れないぞ」

「だよな。あんな継ぎ接ぎの身体に仮初めの命とは言え、よく定着させたよね」

巫が尻尾の毛繕いをしながら話す。
蜘蛛と鱗が尻尾に抱きつき、気持ちよさそうにしている。

「あの屍鬼も、お前らの仕業か？」

【さあ？】

「……………蜘蛛」

【ぎゃあああああああ！言う！言うから！あの屍鬼は仲間の蜘蛛って奴と伽屢羅って奴が作ったんだよ。あんな屍鬼を作れるのはあの二人だけだ】

「蜘蛛と伽屢亞って、女か？」

朋檜が蜘蛛を嫌々ながらスタンバイさせている。

【いや、二人共男だぞ？】

「ふーん……赤い女は知ってるか？炎を操る」

【あゝあいつか。そりゃあ知ってるぜ。オレ達の中で一番弱えの】

「王族が幻影に殺られるってことはあるのか？」

【まあ、あるな。オレも幻影のせいであつたからなあ】「食人鬼だのか？」

「俺の腹の中で幻影見せて、消化したぞ」

【あれま。あいつ弱いくせに自信だけはあつたからなあ】「食人鬼って何人いるんだ？」

朋檣が隼人に手渡しながら訊く。

【この世界にいない奴らも合わせて、二十八人だな】

「二十八か。結構いるもんだな」

【まあな。それぞれの能力だつて個性的だぞ？】

「厄介な奴らだな。お前ら」

【それはこっちのセリフだ。可哀想なオレ……】

はらはらと涙を流しながら、恐らく悲しそうな表情をする。

「麟、鳳凰、こいつと遊ぶか？」

「『遊ぶ遊ぶ！』」

仲良し悪戯っ子三人組である。

哀れ椰汰。どこかへ連れ去られていった。

【いやあああああああああ！】

三人の楽しそうな声と裏腹に、椰汰の断末魔が響き渡った。

「あいつ、骨になってくるんじゃないか？」

「敵とはいえ可哀想やな」「どう雷雨。白銀起きた？」

白銀が寝かされている部屋に、一人で来た巫。
ベッド以外に何も無い。

「起きない」

言いながら眠そうに目を擦る。

「眠いんなら寝てたら？僕が見とくから」

「うん」

隅にあったベッドに横になる。すぐに寝息が聴こえ始めた。
眠ったまま一向に目を覚まさない白銀を見つめる。

隼人達とは別に、一番仲良くしていたのは白銀。

椰汰の話によると、被い師が華鬼を排除する日を狙ってきたらしい。
被い師は椰汰が喰らったと話していた。

強者が揃っていたはずなのに全滅なのだから、やはり椰汰は油断な

らない相手なのだろう。

聴いていて可哀想な悲鳴が響いているが。「ねえねえ、すり潰したりしたらどうなるかな？」

「「いいね!」「」

【いやあああああ!流石に死ぬからあ!つーか溺れる!溺れるう!】

水を張った深い皿の中に、沈ませられる椰汰。

鱗が糸を離してしまい、完全に水に沈む。

がぼがぼと何か言いながら、ばたばたともがく。
糸を摘み水から出した時だった。

「「頭領……?」「」

様子がおかしいことにすぐに気づく。

口元が、衣服も血塗れ。

腹に穴が開き、内蔵がはみ出している。

だらしなく口が開き、涎が垂れ顎を伝っている。

【アゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ】

耳障りな唸り声を上げる。

ゆらりゆらりと、ゆっくりとした動きで三人に近づく。

突然、素早い動きで鳳に掴みかかった。

「おんどりゃあ!」

鱗が勇ましい声を上げながら、回し蹴りを食らわせる。

屍が壁に激突した隙に、両脇に鳳と凰を抱え口に椰汰をくわえながら走る。「……血の匂い？」

白銀をじっと見守っていた巫が、ふと顔を上げる。
僅かに漂ってくる血の匂い。

耳を澄ますと、怒号と悲鳴。

扉の前に立ち、開けていいものか迷う。

「……………」

しかし、開けなければ状況が掴めない。

意を決して扉を開ける。

目の前には、何もない。右の通路に目をやった時だった。

悲鳴と共に、壁に激突する人影。

その人影に群がる人影。

喰われているのは被い師。喰っているのも被い師。

異様な絶叫が上がり、血溜まりが出来ていく。

喰われている男が巫に気づき、助けを乞うような眼差しと手を向ける。

その差し出した腕さえも、容赦なくかぶりつかれ喰い千切られる。

一人が、巫に気づいた。喰っていた男に興味をなくし、ゆらりと立ち上がり近づいていく。

「冗談やめてよ……………」

懐から霊符を四枚取り出して投げ、壁と床と天井に貼り付ける。

【行く手を止め。歩みを止めよ！】

バチンッ！と雷が落ちたかのような音が鳴り響く。

白い光を放つ結界が形成され行く手を阻むだけでなく、結界に触れた屍が一瞬痙攣し動きを止めた。

「雷雨早く！逃げるよ！」

「う、うん」

泣きそうに顔をくしゃくしゃにしている雷雨の手を握り締め、肩に白銀を担ぎ走る。

ちらりと振り返ると、喰われていた男が、ゆらりと立ち上がった。

【……全く……荒神様の脱走癖には困る……】

柚螺が欠伸をしながら、伽屢亞が腕を組みながら呆れたように首を振る。

【そうそう。ちょっと目を離れた隙にどっか行っちゃうんだもん。探す身にもなってほしいよね】

【よいではないか。遊びを思いついたから実行しに来ただけだ。お前達も便乗しとるではないか】

【本当は椰汰の回収しに来たんでしょ】

【……あいつ、抜い師を気に入って寝返ったりしないだろうな……】

【絶対にはいとはい切り切れんな。自由奔放な男だから。まあ、大目に見てやれ】

苦笑しながら髪を掻き上げる。忠誠に関してはあまり信頼されてないようだ。

【いや、そこはぶち殺しだよ。容赦なく挽き肉にしてやる】

【……黒い挽き肉か……見物だな……】

裏切り決定のような言い方である。

【優しくな。さて、行くか】「隼人！」

やっこの思いで隼人達がいる部屋に着いた。
途中屍達に襲われかけたが、霊符で撃退したり雷雨の雷で再起不能にしたりして、なんとか無事に辿り着いた。

「巫！無事だったか！これで皆揃ったな」

十三人に隼人に椰汰、全員無事である。
椰汰を顔の高さに持ち上げ、

【これ、お前の仲間の仕業だろ】

【てか、それ以外にあり得ねえな】

【よし、お前に責任取ってもらおうか】

【…………マジっすか？】

冷や汗を流す椰汰を見つめ、ニヤリと笑う。

【お前、あいつら全員喰えるか？】

【……無理だな。霊力の消耗が激しくて喰えたとしても十人くらいだ】

【もし、いつも通りなら？】

【そりゃあ余裕で全員、喰ってやるよ】

その答えに隼人は再び笑う。

【よし。じゃあお前、俺と契約しろ】

【……はあ？つまり、お前の“式”になって寝返れってことか？】

【それ以外何がある？】

【オレが簡単に寝返ると……】

【蜘蛛】

【すみませんしたああッ！死ぬの嫌！死ぬの嫌よ！お前の“式”にでもなんでもなつてやるから、殺さないで！】

涙を流しながらの本気の叫び。

皆笑いを堪えることなく遠慮なく笑っている。

【よし、じゃあ時間がないから血紋契約で済ますぞ】

【その前にひとつ、警告だ】

珍しく椰汰が真剣な顔をする。

【オレはこれでも王族だ。オレと契約しちまうと、オレの不死性がお前にも移っちまうんだよ。つまり、不老不死になっちまう訳だ。お前はそれでもいいのか？】

【そんなもん百も承知だよ。じゃあ、やるぞ】

「隼人、本気なんか？」

「本気だぞ？」

「隼人がそんなことしなくても、麟達が頑張るよ？」

麟が縋るように、隼人に抱きつく。

【つーか、今は屍でも仲間だったんだろ？オレなんかに喰わしていいのか？】

【そんなこと言ったら埒があかねえだろうが。殺られる前に殺るしかねえんだ。仲間だったけど、もう死んだんだ。今動いてるのはただの抜け殻。情けなんざ不要だ】

【冷てえな】

【なんとでも言え】

「隼人……」

泣きそうな目で見つめてくる麟の頭を撫でる。

「ごめんな。これだけの数を相手じゃ、流石にお前達でも無茶だ。あいつらを完全に葬り去れるのはこいつだけだ。こいつを従わせるには、契約しかないんだよ。分かってくれ」

指の皮膚を歯で傷つけ、血を滲ませる。
滲ませた血で左の甲と椰汰の額に陣を描く。

【我とこの者の魂を契約の下に縛れ】

陣がほんのりと淡い光を放ち、まるで皮膚に吸い込まれるように消えた。

【よし、契約完了】

【マジでやりやがった……。まあ、契約したからには従ってやるよ。後悔すんなよ。その前に、この糸ほどいてくれよ】

【俺の霊力分けてやったんだから、切れるだろ】

【ち、仕方ねえなあ】

椰汰が身体をぐにやりと擦ると、簡単に糸がバラバラに切れる。
丸い形のまま床に落ちると、隼人と変わらない程度の大きさになる。

【うーん、本調子とまではいかねえけど、まあ大丈夫か】

扉に近づいきなり開けると、待ち構えていた屍が椰汰に群がる。

【オレ様を喰おうなんざ十万年早いつつの】

屍を、黒い陰が包み込む。「あれだけいたのに……」

バキッ、ゴキッと肉を潰し骨を砕く音をさせながら、陰が屍を喰らっていく。

屍にも痛感が残っているらしく、耳障りな断末魔を上げ続けている。流石に原型を完璧に留めなくなった頃には、断末魔も止むが。

「何気にエグいな」

鵜邪が腕を組ながら顰めっ面をする。

「被い師の誰かさんも、ああいう風に食べられたんだね」

夢弦がしみじみと呟く。

「っーかあいつ、簡単に仲間裏切りよったな」

「オレ一人が抜けたところで、大して問題はねえよ。今までも一人で自由行動しまくったり、寝返ったことだってあるからな。それにオレがそういう男だってあっちも分かってんだろ」

人の形に戻った椰汰が自信たっぷりに胸を張る。

【俺から寝返ったらどうなるか、分かってるよな？】

【寝返らない！オレ絶対寝返らないよ！いやあああああああ！
蜘蛛いやあああああああ！】

蜘蛛が笑顔で抱きつくものだから、半狂乱で泣き叫ぶ。

【楽しそうだねえ、椰汰】

【……今度こそ、我らの手で葬ってやるわ……】

凄まじい怒気を孕んだふたつの影が、姿を現す。

【あれま。お早いご登場。で、オレ様を葬るって？】

【荒神様の期待を裏切ったんだから、今度こそ死んでもらうよ】

【わぁお。容赦ねえな。でも忘れたか？お前らはオレより弱い。二人がかりでもオレを殺せなかったろうが。今度こそ殺すってか？来いよ。半殺しにしてやるよ】

【余裕ぶっこいてろ。挽き肉にしてやる】 【おいおいどうしたよ！？掠めもしてねえぞ！？】

跳ね回りながら二人を相手に余裕綽々である。

【……斬れる……】

目には見えない無数の刃が椰汰に襲いかかる。

無数の刃によつて切り刻まれ、いくつもの塊に分かれてしまう。

【チョー痛えええ！オレだって切られりや痛いんだぞ！】

【……厄介な奴め……】

切られたにも関わらず、またひとつの塊に戻っていくのだから、彼

らにとっては確かに厄介だろう。

【燃え尽きちまえ！】

柚螺の手から放たれた巨大な炎の塊が、椰汰を灰にしようと迫る。

【おー！こりやまたデカいな。まあオレにとってはご馳走だけだな！いただきます！】

椰汰は体を変形させアメーバのような姿になると、炎を受け止め呑み込んでしまう。

【え……食べた？】

柚螺が状況をうまく掴めずに、啞然とする。

【あれ？知らなかったのか？仲間内の術式は喰えるんだよ。喰って、オレの霊力に出来る訳。ごちそーさん】

【……我らをなめていられるのも、今の内だ……】

【なんだって？】

音もなく、椰汰の胸に穴が開く。

【およ？】

椰汰にとってこの程度の傷は気にするほどではない。しかし、攻撃された訳ではないのに攻撃されたのだ。

下に視線をやると、荒神に胸を貫かれた隼人が見えた。

【……契約主が死ぬと、お前も死んでしまうぞ……】

【あー、まあ心配しなくても大丈夫だろ。何しろオレ様を従わせた奴だからな。それに、あの憎たらしい糞ガキ共も弱くねえぞ】

大胆不敵に笑う。【後はよろしく頼むぜ！】

そう言つて、二人を相手に余裕の笑みを浮かべて跳ね回り始めた。

【おい！くそ！】

迫ってきた屍に炎の霊符を貼りつける。

霊符としては最上級の代物。焼き尽くすまで炎が消えることはない。

【—————っ】

鳳と凰が番の鳥に姿を変え、歌を歌いながら旋回する。

すると、ゆらゆらと不気味な動きをしていた屍達の動きが、ぴたりと止まった。

鵲月が眼鏡を外し、目を瞑る。

次の瞬間、轟音を上げ炎が屍達を包み込んだ。

【全く、あ奴は本当に自由奔放な男よの】

どこからともなく聴こえてきた、不穏な声。

音もなく、隼人の胸に腕が生えた。【お主が死ねば椰汰も道連れだが……仕方あるまい】

ずるつと音を立て、腕が引き抜かれる。手には、心臓。
残念だ、と心底残念そうな声音で言いながら、口は微笑を浮かべている。

浮かべながら、手にした心臓を口の中に放り込む。

「隼人！」

蜘蛛が涙を浮かべながら隼人に近づく。

鳳と凰も麟も泣きながら隼人に抱きつく。

「ねえ、確か椰汰と契約してる限り隼人は、不老不死なんじゃないかな
ったっけ？」

巫が朋檜に小さな声で話しかける。

「確かな」

【……………ほお】

荒神の目の前で、胸を貫かれたはずの隼人が起き上がる。
貫かれた胸は、何事もなかったかのように塞がっている。

【なるほどのう。あ奴が享受するのは不死性か。全く、厄介な男よ
の】「うわ……………すげー穴……………」

服に空いた穴をまじまじと見つめる。

【余所見しておる暇はないぞ？】

荒神が指を鳴らす。隼人達は飛び退る。

【お主らにはこれの相手をさせてやろう】

地響きが鳴り響く。最初は遠くに感じた地響きが、徐々に近づいてくるのが分かった。

【見た目は少々あれだが、性能はよいぞ。せいぜい頑張るがよい】

その後ろから巨大な手が、地面を突き破って出てきた。継ぎ接ぎだらけの、巨大な腕。

【ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
】

更に一気に胸まで突き破り、口ともつかない口から、耳障りな声を上げる。

瓦礫を降らせながら、身体を地面から引き摺り出す。

巨大なために、窮屈そうにも見える。

それが、
二体。

【あ、ボク達の自信作】

屍鬼をうつとりとした目で見つめる柚螺。

【あれが自信作って、趣味悪くねえか？いつも思ってたけどよ】

顰めつ面をしながら言い放つ。

心底気持ち悪そうだ。蜘蛛ですら駄目なのだから、嫌って当然かもしれない。

【分からないかなあ？あの美しさ】

【どこが美しいんだ？あんな継ぎ接ぎだらけのバケモン】

頭を掻きながら首を傾げる。

柚螺は呆れたように溜息を吐く。

【君とはとことん合わないみたいだね。まあいいけど】

【それよりもオレ様を殺すんじゃないかったのか？】

【勿論】

【よし、じゃあずっと試したかった戦い方してやるよ】

椰汰の身体が球体になったかと思うと、ふたつに分離する。

ふたつに分離した球体が、それぞれ人型へと戻る。

【こうやって分離してもうまく戦えるのか試したかったんだよ。それじゃ、遠慮なく来いよ】「なんやこいつ！増えよったで！？」

「靈力を込めた攻撃を受けると、分裂して増えるみたいだぜ？」

「それを早く言えや！めっちゃ攻撃してもうたわな！」

目の前でバラバラになった破片が、ぼこぼこ音をさせながら出鱈目な人の形を成していく。

頭のあるべき場所に腕や足が。

腹に出鱈目な顔が。

「こいつら……核はどこだ？」

隼人が迫る腕を避けながら、誰にともなく呟く。
その横で白銀を抱えながら避ける巫が口を開く。

「核がないはずないよね？」

「多分」

【……巫】

思わず足を止め、背中に抱えた白銀に目をやる。【白銀！？よかった、大丈夫？】

立ち止まった巫を潰そうと迫る腕を避ける。

【大丈夫……。アレ、口ノ中ニ核アル】

【口の中？】

【ウン。舌ニ】

「変なところに仕込みやがって」

土蜘蛛の姿の蜘蛛が屍鬼に飛びつき、噛みついて霊力を吸い始めたのが見えた。

【おいおいどうしたよ！さっきの威勢のよさはどこ行った？】

次々と放たれる攻撃を避け、時には喰らいながら楽しそうである。

【……本当に、お前のことだけは好きになれん……】

【オレだつてお前ら全員大嫌い】

【……荒神様もか？……】

【勿論。オレはお前らと違って、なんにも分かつてなかったガキの頃に、無理矢理連れられて王族にさせられたんだよ。だから、忠誠心なんてミジンコくらいしかないぞ】 【……しかし、忠誠を誓ったのではないのか？……】

【んなもん誓つてねえよ。誓つたとしても、俺が忠誠を貫くと思うか？】

【……思わんな。あの抜い師も、いつかは裏切るのか？……】

【いんや。あいつは気に入った。裏切るつもりなら最初から契約なんてしねえよ。あいつの気が済むまで“式”でいてやるさ】

【……随分と入れ込んだものだ……】

【少なくともあんたらの絶対君主よりはな】

蜘蛛に噛みつかれた屍鬼は必死に振り払おうとするが、がっちりしがみつ き噛みついて いる ためになかなか振り払えない。その間にも霊力は吸われ続け、徐々に屍鬼の身体が萎んでいく。

「……核さえ潰せば、僕ら何もしなくてよさそうだね」

夢弦がぽつりと呟く。

「そうだな」

朋檣が気味悪そうな顔で、蜘蛛を見つめる。【おいおい！それで終わりかよ？喰っちまうぞ？】

椰汰は無傷なのに対し二人は傷だらけで、柚螺に至つては喰われたのか、右腕が根元から千切れている。

【んじゃ、いただきます】

分裂させていた身体をひとつに戻し身体を広げ、二人に覆い被さる。

【ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ツ

！

耳障りな声を上げ、萎みながら崩壊していく屍鬼。

身体を形成するのに必要な霊力さえも、容赦なく吸われていく。

起き上がろうとするが腕が崩れ、足も崩れているために満足に動くことさえ出来ない。

その時、鵲月が屍鬼の口に向かって杖を勢いよく投げた。

口を大きく開けていたために、舌に杖が突き刺さる。

舌に突き刺さった瞬間、屍鬼が動きを止め罅が全体に広がっていく。そして、パリンツと音を立て、呆気なく砂に還った。二人に覆い被

さり、噛み砕こうとした時だった。

【おおうつ！？】

二人から咄嗟に飛び退り、人の形へと戻る。

【あつぶねー。危うく喰われるところだった】

目の前には左腕を突き出した荒神。

【全く、厄介な男よの。まさか恨まれておったとはな】

【そりゃあ当たり前だろ？目の前で父ちゃん殺されてみる。誰だつて恨むぞ】

「よくやったぞ蜘蛛！もう少し頑張れるか？」

「うゝ、あいつマズイ。でも頑張るゝ」

涙目になりながら屍鬼を睨む。

よほど不味かったのか、嘔吐しかかっている。

「蜘蛛頑張るもん！あんな気持ち悪いモノになんか負けないもん！」

己を奮い立たせるためか、元気よく叫ぶ。

蜘蛛とは思えない跳躍力で、再び屍鬼に飛びかかった。【仕方なからう？抵抗してきたのだからな】

口元に笑みを湛え、左腕を下ろす。

椰汰も笑みを浮かべ、両腕を鎌へと変形させる。柚螺と伽屢亞の二人の姿は、いつの間にか消えている。

【抵抗しなくても殺すんだろ？邪魔になる奴は必ず殺すのがお前のやり方だもんな】

何も言わずに、ただ笑みを湛える荒神に向かって、鎌を振り上げる。

「ううっつ。マズイ、吐きそう。慰めてゝ褒めてゝ」

二体の屍鬼の残骸が転がっている。

蜘蛛が床にうずくまり涙目になっている。

「よしよし。頑張ったな」

隼人に頭を撫でられ嬉しそうに笑う。

【おおおおおおおっ！】

皆が驚いて振り向いた時、椰汰が両腕を鎌に変形させたまま隼人を巻き込み地面に激突する。【この野郎……！俺をバラバラにする気か！】

【悪かったな。バラバラになっても再生されるんだから、問題ねーだろ】

【そんな問題じゃねえよ！】

床が割れ砂埃が舞い上がる中、二人の会話が木霊する。

【つーか、そんなこと言ってる場合じゃねーんだよ！】

右腕を手の形に戻し、脇に隼人を抱え飛び退る。
その瞬間、炎の塊が二人のいた場所で爆発する。

【惜しいの。外したか】

【ぶっ殺す気満々だな】

にやりと、二人は笑う。【ひきやうんっ！】

蜘蛛の姿となった蜘蛛が荒神に飛びかかったが、足を掴まれ放り投げられる。

【おわ！】

咄嗟に朋檣が受け止めたが、衝撃を殺しきれずに地面を転がった。

【蜘蛛やら蛤やら鳥やら、本当に厄介な奴らよの】

厄介、と言いつつ笑みを湛えたままの姿は余裕綽々である。
隼人も術式を放つが、悉くかわされる。

雷雨も雷を纏い突進するが、かわされた。

【白銀、あいつ引きつけられる？】

【巫、何スルツモリ？】

【あいつを唯一封じられるかもしれない封印術、陣を完成させるのに時間かかるから】

「それって閻魔召喚だよな？ ばくも手伝おうか？」

夢弦が険しい表情をしながら、口を開く。

「うん。ムツキも手伝って。封印術得意でしょ」

「分かったのね」

白銀が巫の背から下り、黒い瞳を上空に向ける。【おんどりゃあっ！】

四不^{しふぞう}像へと姿を変えた麟が、その強力な蹄で荒神を蹴りつけた。蹴りつけられた荒神は、壁に罅が入るほど強く叩きつけられる。四不^{しふぞう}像とは、馬に似ているが馬ではなく、鹿に似ているが鹿ではなく、ロバに似ているがロバではなく、牛に似ているが牛ではないという、よっつの動物に似ながら、そのどれでもないということから名づけられた“オニ”である。

『封神演義』にも登場するが、多数の神獣・霊獣が登場するために四不^{しふぞう}像の活躍は目立たないが、その速さは仙界でも指折りである。

【油断したの。流石に四不^{しふぞう}像の速さには適わぬわ】

身体から砂埃を払いながら言う。

【つい、勝手に麒麟きりんだと思ってたけど、違うんだな】

【麟は四不像だもん】

【四不像ってなんだ？】

椰汰の言葉に、麟の眉間に皺が寄る。

【説明は後でな】

隼人が椰汰の肩に手を置く。
その時だった。

空間が、黒に塗り潰される。空間が黒に塗り潰される。隔離されたのか、建物さえ見えなくなる。

【幻影か。よく出来た幻影よ】

【あのガキの仕業か？】

あのガキとは勿論、白銀のことだ。

巫達が封印術を完成させるまでの、時間稼ぎ。なのだが、荒神が腕を振った瞬間、空間が粉々に割れた。

それと同時に、啞然と目を見開いた白銀が姿を現す。

【よくあれだけの濃密な幻影を、腕振っただけで壊せるな】

【我を誰だと思おておる？】

【超がつくほどのナルシスト】

荒神の眉間に皺が寄るが、お構いなしである。

【全く。これからは異世界の“オニ”を王族に引き入れぬことにするか】

やれやれと首を横に振る。心底呆れた、という風だ。

【どさくさに紛れて我を幻殺しようとしても無駄だぞ、蜃の少年よ】

荒神が蛤へと姿を変えた唇に向かって、黒い光を放つ。
掠めただけで命を奪われる、死の光。
蛤であるために、なかなか陸上では動けない。

【唇！】

鱗が走るが、それも間に合わない。

ドンツ！と、地響きがした。ドンツ！と、全身を揺さぶるような強い地響きがした。

誰もが唇の死を覚悟して、振り向く。

しかし、

見えたのは黒い光がせき止められ、空間が揺らいでいる光景。

【あ、あれ……？俺、生きてる……？】

少年の姿に戻り、身体を眺める。

地面に巨大な陣が現れる。

地響きが、地割れに変わった。

地割れから覗くのは、無数の子鬼のような餓鬼。

蜘蛛の巣のように、地割れが広がっていく。

【これは……】

荒神の困惑した声が響く。

音もなく、巨大な鎖が荒神に巻きついた。

煙が、巨大な手へと形を形成していく。

【閻魔召喚成功】

それまで姿を消していた巫と夢弦と鷗月が、巨大な手の上に姿を現した。

閻魔召喚とは本来、十人がかりで地獄の審判者である閻魔大王を喚び出す術式なのだが、それを三人で成功させた訳である。

失敗すれば、命を落とすような危険な術式だ。

【して、罪人はあの者か】

【ええ】

閻魔の手から三人が飛び下りる。

指をピンと張り、目一杯広げると、荒神に向かって振り下ろした。地面に、手の形の地割れが広がる。

手が霧散した後に、何も残されていない。「とまあ、それくらいか

な？」

「ぶふあっ！」

吹いた。唐突な終わり方に吹きました。

さっきまでしんみりしてたのに何その笑顔。

コーラ返せ。じゃねえや、もっとありますよね。話すこと！

「いやいやいや！それで終わりじゃねえだろ！その後荒神は！？被い師達は！？隼人と椰汰って奴は！？他の皆は！？」

「質問多いなあ」

てめえが中途半端なところで終わらすからだろ。

「その後ね、荒神は完璧に地獄に送られたと思ったのに、残ってた力を振り絞って身体を新たに造ってね、逃げたんだよ。超イラつくよね」

「はあ……」

「で、その後隼人が一度総長になって被い師を立て直して、元通りになってから弟に総長の座を譲って、その後は自由に旅を満喫。椰汰も一緒だと思うよ。で、他の皆も思い思いに被い師しながら自由にやってる。僕みたいだね」

なるほど。じゃああの三人は、仲良く三人で旅してんだな。

「白銀とはいつ契約したんだ？」

「旅を始める前に。白銀に連れて行けって言われたから」

巫が強引に契約したのかと思ってた。まさかの白銀からかよ。

「そうそう。中には旅しながら幸せになった奴もいるんだよね」

「幸せ？」

「結婚。まさかの朋檜と蜘蛛がね、めでたく結婚したんだよ。すっごいラブラブ」

すんません。思わず吹きました。

「しかもね、子供産んだんだよ。男女の可愛い双子ちゃん。写真あるよ」

むせました。つーか子供産めんの。

見せてもらったら超可愛いんですけど。男の子を朋檜が抱いて、女の子を蜘蛛が抱いて。

両親共々めっちゃ幸せそうですね。

「いやあ、仲いいとは思ってたけど、ホントに結婚しちゃったとはね」

確か、蜘蛛嫌いじゃなかったっけ？

愛の力は恐るべしってことか。「そういえばさ、戦争だっけ？どうなったんだ？」

「あー、休戦みたいなもんだね。きっかけがあれば、また起こると思うよ」

きっかけがあれば、かぁ。今は平和だけど、あいつらがきっかけで勃発するってこともあるんだな。

このまま平和でいたいけどなぁ……。そうもいかないんだろな。

「何々？ そんなしんみりした顔しちゃって」

肩に腕を回してきて頬を指でつついてくる。

超うぜー。

「そんなしんみりしてる暇ないよ？ 明日お仕事だから」

「……はっ？」

お仕事？ なんでそれを俺に言うんだ？

「零君にはうってつけのお仕事。廃墟の幽霊退治」

「無理っす」

丁重にお断りします。だって廃墟だよ？ 幽霊退治だよ？ 普通に死ぬるよ。

幽霊相手にするくらいなら、“オ二”を相手してる方がマシだって。

「ちなみに悪霊二体ね。質悪い奴。言うこと聴かなかったら殴るなり、踏んづけるなりしちゃっていいから」

笑顔で言うことじゃねえよ。こいつなら笑顔で踏んづけそうだけどな。

俺は殴る前に卒倒しちゃうわ。

「と、言つ訳で明日よろしくね」

だから……俺、無理……。

嗚呼……哀れな俺。

涙と笑顔で行う悪霊退治

ははは、悪霊退治だつてよ

誰か代わってください

無理っすか。うん、分かってたよ

誰だって腐った身体引きずる悪霊なんか、相手したくないよな

俺、逝ってくるぜ」「どうしたよ零？そんなどよーんとした顔して」

学校の食堂での昼飯。カレーを食いながら祐司と喋る。

「そりゃあどよーんとなるぜ」

「あ、分かった。バケモン退治だろ？」

自信満々に言ってくる。

ただのバケモンの方がどれだけマシか……。

「バケモンはバケモンでも、悪霊だけどな。しかも質悪い奴が二匹」

「お前、幽霊大嫌いだもんなあ。思い出すなあ。肝試しん時のお前の騒ぎよう。半端じゃなかったぞ？」

肝試しな。うん。あれも最悪の思い出だな。

皆気づいてなかったけど、ホントに心臓に矢が刺さった女の幽霊いたんだぞ。

「悪かったな。怖がりで」

「まあ、頑張れ」

「うん……」

昼飯終わって授業が後一限終われば、帰ってしばらくしたら悪霊退治。

帰りたくねえなあ……。 「はあ……」

玄関の前で溜息を吐く。 巫いんのかな。

ホントやだなあ……。 いっそ祐司ん家に逃げようかな。

うん。 それいいな。 チキンとかどうでもいい。

巫だって俺がいなくても本当は問題ねえだろ。

幽霊を相手するより断然マシ。

うん。 よし、逃げよう。

「零君おかえり！」

背を向けようとした瞬間、ドアが開いて巫が眩しい笑顔で右手を上げた。

滅茶苦茶タイミングよかったな。 狙ったのかお前。

「零君、逃がさないよ？」

笑顔でがっしりと腕を掴んでくる。

読まれてる。 俺の思考読まれてる！

「さ、時間まで僕と一緒に遊ぼうか？」

ひい……。怖いよ。その笑顔が怖いよ！？
遊ぼうって何……。？」……………」

「春夏秋冬」。…………？祭。11……。…………。どういう意味なのかなこれ？」

なぜか、巫が脱出ゲームをやるのを眺める。

俺のスマホ勝手に使っちなよ。つか、巫って脱出ゲーム案外苦手なんだな。

「だからさ、祭をよく見てみろって」

「分かんないから聴いてるんだよ」

「じゃあ、祭を書いてみる。これで分からなかったら相当のアホだぞ」

懐から紙と鉛筆を出して、祭と書いていく。何回も。
しかし巫の懐ってマジでどうなってるんだろな。

「あ、なるほど。なんだあ、そんな簡単なことだったんだ」

やっと謎が解けてマジで嬉しそうに笑う。

俺の右膝を枕にして寝てるオルトロスがいきなり目をかく。

で、左膝を枕にして白銀がすやすやと熟睡してる。

見た目だけは子供らしい顔して寝てるから、可愛いんだけどなあ。

実際滅茶苦茶年上だからな。

可愛いなんて言ったら殺されそうだな。

「やっと出来た！かれこれ五時間くらい悩んでたんだよね」

五時間かもかよ。まあ俺も悩んだけど。

「もう四時かぁ。零君、そろそろ心の準備始めといてね」

……………無理です。巫が脱出ゲームに夢中になってる横で、俺は膝を抱えてどよーん。

オルトロスが心配そうに見上げてくる。

で、白銀は無表情。

心の準備って言われたけど…………無理です。

だって幽霊ですよ？人の怨念が化け物になったんだよ？

ただの“オニ”よりよっぽど怖えよ！

【そうそう、奈央人君起きてる？】

【起きてるよ？】

胸からひょこつと出てくる。流石に慣れたな。

で、肩にしがみついてくる。肩は奈央人の定位置だな。

【今日はねえ、奈央人君白銀とお留守番してほしいんだ】

奈央人が首を傾げる。

【なんでだ？】

【奈央人君はなんだかんだ言ったも人魂だからね。相手は悪霊。悪霊に引きずり込まれる可能性があるんだよ】

【引きずり込まれるって？】

【つまり、悪霊の悪い気に晒され続けるとね、奈央人君が悪霊化する可能性があるんだよ。それは避けたいからね】

【俺の中にも駄目なのか？】

【零君を通じて奈央人君に伝わるんだよ。だから、お留守番】

【僕お留守番してる】

【じゃあ白銀、よろしくね】

【ウン】「さあて、そろそろいい時間だし、零君行こうか？」

巫がすつくと立ち上がって腰に手を当てながら、にんまりと笑う。
ひいひい……！悪魔の笑顔だ。優しそうに見えるけど、それは見かけだけでかかった獲物を地獄に引きずり込む悪魔の笑顔だ……！

「えつと……嫌って言ったら……？」

床に座ったままじりじりと後退る。

悪魔の笑顔を浮かべながら迫りくる巫。涙目で情けなく追いやられる俺。

「さあ、行、こ、う、か」

がっしりと首に腕を巻きつけられて引きずられる。
窓を開けて、飛び下り準備。

「いいいやああああっ！たーすーけーてーっ！」

叫び虚しく、連れ去られました。オルトロスが飛び下りてきたし！

【いつてらっしやゝい】

奈央人が笑顔で手を振ってきた。「……………」

目の前の光景に絶句する。どつしりと構える廃旅館。

不気味な音をさせながら吹き抜ける風。びよおおおっていつてます。

どこからか、何かが割れる音とか走り回る音が聴こえてきますね。

「俺……………帰る」

やだ。こんなところ入るなんて絶対やだ。

目の前に立ってるのさえやだ。

「ダメだよ零君。これは君の訓練でもあるんだから。さ、行くよ」

がつしりと首に腕を巻きつけられてずるずると引きずられる。

振りほどきてえのに、なんで振りほどけねえんだよおお！

うわ……。入り口から、めっちゃ嫌な気配する。

単なる直感だけど入ったら最後、悪霊を倒すまで出られねえ気がする。

「いやあああああつ！入りたくないよおおおおつ！無理い！
帰してえええええ！」

虚しく風に流される俺の叫び。

「はいはい。終わったら帰れるからね」

軽くあしらわれた。そのまま入り口の中に入る。

入り口が消えて、くすくすと笑う声が聴こえた。「……………」

巫に背を向けて、建物の隅で膝を抱えてガタガタ震える俺。

やだよ。さつきからくすくすって笑う声、マジで怖えんですけど。

「零くん？大丈夫？」

大丈夫な訳あるか。今にも気絶しそうだよ。

「大丈夫な訳あるかよ。入り口閉じちゃったじゃねえか……。どうせ悪霊倒さねえと出られねえんだろ？」

「そうだねえ。だから、零君も手伝って。二人の方がかどるし」

俺が手伝ってもはかどる気しねえけどな。

でも、ここで一人で待ってるのも超怖え。

巫が歩き出した。慌てて追いかける。で、勿論がっしりと腕を掴む。

「くれぐれも悪霊には気をつけてね。奴らは心に付け入るの得意だから。見た目や口車に乗せられて、騙されちゃ駄目だよ」「や、やっぱりと、取り憑かれたり、するのか……？」

ヤバいつす。もう身体ガチガチでヤバいつす。

動きがぎくしゃくしまくってるの分かるし。

オルトロスの尻尾が足に当たっただけで、叫びまくったし。

「取り憑くだけなら可愛いものだよ。命吸い取られて、魂まで吸収

されちゃうから」

んなこと笑顔で言うことじゃねえよ。

「た、魂吸い取られると、どうなの？」

「ん？そりゃあ悪霊とひとつになっちゃうから、そのまま消滅」

つまり、そのまま永遠に消えちゃうってことですか？

「ここの悪霊二匹ねー、人魂だろうが生きてる人間だろうが、挙げ句は弱い“オニ”なら余裕で食べちゃうんだよ。もしかしたら零君も喰おうとするかもだから、気をつけてね」

もうそれ、悪霊どこの話じゃねえじゃん……。
何？悪霊って取り憑いて、不幸にして、死に誘うだけじゃねえの？
俺……悪霊前にして戦える自信、ねえよ。

「零君？大丈夫？……！」

巫の表情が一変した。巫が見つめている方向を見る。

「……………ッ！」

もう無理。気絶してえ。泣きそう。涙目にはなってるけど。
なんなんだよ。ぐによぐによの身体に無数の顔。真ん中の一番でっけえ顔が、俺達を見てニタア、と笑う。
いきなり、突風が突き抜けた。

「巫…………？」

目を開けたら、巫だけがなくなった。「あれまゝ、引き離されちゃったか。でも、逆によかったかな」

頭を掻きながら、なんとも陽気な声を上げる。

その周りに、半透明の悪霊になり損ねた人魂達が群がる。

「零君、怖いのは分かるよ。ついこの間まで普通の学生だったんだから。本当なら、“人間”のまま生を終えるはずだったんだろうねでも、もう歯車は廻り始めたんだよ。狂ったまま」

笑顔が失せ、変わりに見る者を黙らせるほどの真剣な表情を覗かせる。

「廻り始めた歯車は止められない。零君が、零君自身の定められた運命に抗うしかないんだ。僕に出来ることは“その時”が来るまで、君を守るくらいしかないんだ」

一旦言葉を切り、目を閉じる。

人魂達が、巫に触れようと手を伸ばす。

「だから、これも、訓練なんだよ。ふざけた運命に抗うための」

人魂の手が、巫の腕に触れる。その途端、ジュツと音を立て人魂が消え失せる。

巫の手に霊符が握られており、その霊符には『浄化』と書かれている。

人魂が消えた空間を、巫はぞっとするほどの冷ややかな瞳で見る。

「零君、君は奴の生まれ変わりであるのと同時に、“鍵”でもある

んだよ。でも、だからってふざけた運命の犠牲になる必要なんてない。君は、君を生きるんだ」

触れようとした人魂が、また消え失せた。

「来るなら来い。死霊風情が僕を喰おうなんざ百万年早い。捻り潰してあげるよ」

ニヤリと、陽気な笑顔を浮かべた。「か、巫……？」

オルトロスを胸に抱えながら、恐る恐る前に進む。

今にも幽霊が出てきそうぞ、マジで怖えよ。

そういえば、さっきのぶによの幽霊、どこ行つたんだ？姿を隠して、怯えまくってる俺の姿を見て面白がってるのか？ちつくしよ、悔しいけど、怖いんだよ。

ひつ……ひつく……ふえつ……

さつきから子供の泣き声らしき音が聴こえてくるんだよね……。

あんな気持ち悪い幽霊見たくねえよ。

「つーか早くここから出てえ。」

調理室っぽい部屋を通り過ぎた時だった。

「ぎゃああああああああつ！」

くんつて！服の裾がくんつてええええええ！
腰を抜かして尻餅をついちまう。
よく見ると、着物を着た男の子。

【母様、どこ？】

【へ？】

さっきの泣き声はこいつか？泣きはらした目で見つめてくるし。

【母様、どこ？母様〜！】

うわ、泣き出した。

【あゝ泣くな泣くな。一緒に探してやるから】

【うん……】

男の子の手を引く。そしたら、オルトロスが男の子に向かって吠え出した。

【ちょ、落ち着けて！】

頭を撫でて落ち着かす。吠えなくなっただけ、威嚇が激しい。

男の子は俺の背中に隠れてる。男の子の手を引きながら、恐る恐る前に進む。

オルトロスが相変わらず不機嫌に唸ってるけど。

まさか、この子が悪霊とか？

いや、まさかな。どっちかつーと、さっきのが悪霊っぽいし。

でも、見た目と口車に騙されるなって言ってたな。

子供の姿をして油断させて、隙を見て喰っちゃおうとか？

ちらっと男の子を見る。

まだぐずってる。母親見つかるまでこうだろなあ。

てか、探してやるって言っちゃったけど、どう探せばいいんだ？

いたとしても、もう悪霊に喰われてんだろ。

ん……？なんでこの子は今まで無事だったんだ？

逃げるのが滅茶苦茶得意とか？

でも、ああいう風に泣いてたら、絶対見つかるよな？

やっぱり、この子が……。

恐る恐る、男の子を見る。

男の子が、真っ黒になった瞳で見つめてきて、にたあ、と笑う。

途端、身体が弾けるように広がった。

俺に、覆い被さってくる。見ると、オルトロスも押さえつけられている。

小さい身体で必死に抵抗してるけど、あまり意味ねえ。

【お兄ちゃん、気づくのおっそーい。一緒にいた被い師が言ってたよね。騙されるなって。お兄ちゃん甘すぎ】

あゝ、言ってたな。っーか気持ち悪い。

ぐによぐによの身体に、無数の顔。泣きてえ。

【お兄ちゃん、美味しそうだよね。そんな顔しないでよ。大丈夫、残り粕に最低限の自我を残して、仲間にしてあげるから】

いらねえ！こいつの一部になるとか絶対いらねえ！

とは言っても、どうしたらいいんだ……？

【いただきます】

そう言っつて、手のようなものが、俺の中に入ってきた。

【……………っ！】

なんだ？気持ち悪い。魂をまさぐられてるからか？
吐きそうになる。

何かを掴まれたような感触がした時だった。

「馬鹿かお前？何俺が目覚ますほどの深層まで入り込ましてんだよ？」

脳内に、声が響く。俺の知らない、でもなんだか俺とそっくりな、声が。

「ちつ。このままじゃお前だけ喰われるぞ。仕方ねえなあ。ちょい身体貸せ」

悪霊の身体が、左半分弾けた。【ア……………？】

悪霊の身体が左半分弾け飛ぶ。訳が分からねえって顔をする。
身体が勝手に動く。

「悪霊つてのはな、人魂と違って形も色もはつきりしてんだよ。そして気配が濃くて明らかに人魂と違う。覚えとけ」

言われてみれば確かに、奈央人と比べてみたら姿形はつきりしてるし、半透明じゃねえし、気配もはつきり感じられるな。

巫の野郎、そんなこと言っただけ……！

【お前、なんなんだ……！？被い師なのか？ただ力ばかりが強い“オニ”だと思ったのに……！】

【お前にや関係ねえよ。つかさつさと地獄に行け。お前、今まで三流の被い師しか相手したことなかったんだろ。あいつら、大した

実力もねえのに威張ってやがるからな。そんな抜い師ばかりだと思
うんじゃないよ】

腕を前に突き出す。掌から霊力が放出されるのが分かった。
放出された霊力が凝縮されて、形を成していく。
先端に澄んだ青い玉を埋め込んだ、杖。

【在るべき場所へ還れ。ここは、死者がいつまでも居ていい場所じ
やねえんだよ】

そう言つて、一気に間合いを詰める。
杖の先端を、顔のど真ん中に突き刺す。

【ひっ……】

【ひとつだけいいこと教えてやる。あの世に天国ってものは存在し
ねえぞ】

杖を引き抜いた途端、悪霊の身体が霧散する。

‘あんた、誰なんだ……？’

「ん？俺は狩真 蒼ってんだ。お前のご先祖様って訳。で、お前は
俺の生まれ変わりの訳よ」なんですと？狩真 蒼？俺のご先祖さ
んが俺の生まれ変わり！？
マジですか？

‘う、生まれ変わり……？’

「そうそう。本当なら俺が目覚めることはなかったんだけどな。お

前が食人鬼になったり、拳げ句は魂引きずり出されそうになったりするから、目が覚めちまったんだよ」

完璧俺のせいですか。なんかすみません。

「そういえば、さっきの天国は存在しねえって……？」

「あーあれな、地獄はあっても天国は存在しねえんだよ。天国なんざ宗教が作り出した空想だ。実際存在するのは、神さんと天使が暮らす神界しんかいだよ」

「え……じゃあ、死んだ人は皆地獄逝き？」

「地獄つつても、全ての死者がひで目に合う訳じゃねえよ。罪の度合いで、刑罰が変わる。実際全ての死者の面倒を見るのは、地獄の鬼達さ」

「天使は何すんの？」

「ん？ なーんにも。神さんの世話をするだけで、神さんも天使もこの世界に滅多に関わらねえよ。傍観者って訳さ。神さんのありがたのお言葉を信じてる奴が多いけど、あれも宗教が作り出した都合のいいもんだよ」

実際、全ては人間の空想って訳か。

「ん？」

「へっ？」

なんか、壁を突き破るような破壊音が聴こえてくるけど……。

【捕まえたあつ！】

巫の威勢のいい声が聴こえたかと思ったら、すぐ目の前の壁がぶっ飛んだ。「おおおっ！？」

二人（？）同時に叫ぶ。息びったし。
っーか砂埃がすげえ。

【ふふふ、捕まえたよ。全くちよこまかちよこまかと】

巫さんがニヤリと醜悪な笑顔を浮かべながら、悪霊を踏んづけてます。

あのごによくよの身体に、顔が無数ある悪霊踏んづけてるし。
っーか悪霊、至るところに殴られた痕っぽいがあるし。

てか、悪霊が泣いてる……？なるほど、悪霊が泣くほど酷え目に合
わしたんだな。

悪霊に容赦ねえな。俺にも容赦ねえけど。

【さあて、地獄に逝っておいで】

杖を真ん中の顔にぶっ刺して、引き抜く。

断末魔さえなく、霧散していく。

巫が俺を振り向く。

「と……零君じゃないね。まさか、狩真 蒼？」

「へえ、鋭いな。気づいたのか」

「それくらい気づかないと」

「つか、巫って俺が生まれ変わりだとか知ってたのか？」

「まあ、とりあえず俺は引っ込むわ……って、あれ？戻れねえ……？」

「なんですと！？」

「あれじゃない？ここの本当の主が邪魔してるとか」

「……………なんだって？悪霊二匹だけじゃねえの？悪霊二匹だけじゃねえの？そんなの聴いてねえよ！」

「なんかこいつが、そんなの聴いてねえよって喚いてるぞ？」

「あれ？そうだったけ？」

「この野郎……！いつぺん殴らせろ！」

「てめえの記憶には、いつ俺に悪霊二匹以外に何かいるって説明したことになるってんだ！」

「いつぺん殴らせろって言ってるぞ？」

「ひいひいひい……蒼さん何言っちゃってんの！？」

「そんなこと言っちゃったら俺が酷え目に合わされんじゃんか！」

「へえ。零君、分かってるよね？」

「怖え、巫の笑顔が怖えよ……！」

殴りてえなんて思ってますいせん！」

「すいません、だつてさ」

「殴ってきたら今度一人で悪霊の相手させてあげるから」

絶対嫌だ！それだけは勘弁……。

「とりあえず、お前何がいると思う？」

「ん？ペリュトンじゃない？」

ペリュトン？なんだそれ？「ペリュトン？なんだそれは？俺が知らないとなると、俺が死んだ後に日本に来たのか？」

へー……蒼さんにも知らない“オニ”がいるのか。

「まあ、あなたが知らないのも無理はないね。日本に来たの百年前くらいだから」

「百年前か。俺が知らなくても無理ないな。で、特徴は？」

「ペリュトンはね、青い鳥の身体と翼に、鹿の頭部と後肢を持つてるんだよ。影が人間の形をしてるんだ」

へー、個性的な“オニ”だな。影が人間って？

「影が人間ねえ。元は人間の魂か？」

「そう言われてるね。民間伝承では神に見捨てられた人間の霊らし

いよ。神の恩恵を取り戻すために人間を殺戮するんだって。ペリュトン人間を武器で倒すことは出来ないから、襲われたら人間は溜まりもないね」

「なるほどなあ。悪霊共が人間を捕まえてペリュトンに差し出して、悪霊共はそのおこぼれをもらってたつてところか」

うわぁ……悪霊に捕まって、訳の分かんねえ化け物に貪り喰われて、挙げ句が悪霊の一部とか最悪すぎる……。「ま、とりあえずはそいつを探さねえとな」

「その必要はないと思うよ？あっちから来たから」

巫が指差す方を見る。正確には、今身体を動かしてるのは蒼さんだけだな。

マジで鹿の頭をした鳥が来やがった。全身真っ青。

「うーか、なんであっちから来たんだ？」

畏にハマるのを待つとかなかったのか？

まあ、この二人相手に畏とか意味ねえと思うけど。

「ほーお、あいつか。俺が安眠しようとするのを邪魔するのは。消し炭にしてやるよ」

そう言つて杖をペリュトンに向ける。

【吹っ飛べ】

瞬間、炎が大爆発しました。

ええええっ！？ものすげえ大爆発ですよ！？ペリュトン一匹にこの大爆発はやり過ぎだろ！？

なんかいろいろぶっ飛んだぞ！

巫も流石に啞然として、引いてる。

「なるほど、豪快だね。 齊羅巍が呆れる訳だ」

「 齋羅巍かゝ、久しぶりだな。 あのじいさんまだ元気なんだな」

「そりゃあね。 ……………ん？」

巫が天井が見上げる。 蒼さんもつられて見上げる。
なんか、天井にヒビが広がってるのは気のせいか？
みしみしって、非常にヤバそうな音までするし。

「まずい！ 出口まで走って！」

巫が珍しく慌てた声を出した瞬間だった。

天井が崩落してきた。「ぶえ…………げほげほ…………」

瓦礫の中からなんとか這い出る。

ちよ、天井崩落とか酷え目に合ったし！

全身埃まみれ。 髪を触ったら埃がすげえ落ちるし。

周りを見渡すと、廃旅館全体が崩れてるし。

その中にペリウトンの死骸がちらほら。

一匹だけじゃなかったのか。 あの大爆発はペリウトンを一気に葬るためか？

それにしてもやり過ぎだろ。

「あれ？」

いつの間にか戻ってるし。 蒼さん、逃げたな。

「ふう、全く。あれほどの威力を出したら旅館が潰れるって、頭回らなかったのかな？随分廃れてるんだから、分かるだろうに」

巫も頭真っ白にして這い出てきた。

きつと潰れるって考えてなかったんだろな。多分。

「全く、齋羅巍から聴いた通りだし。そりゃあ母親にも怒られるよねえ。こんなこと繰り返してたら」

俺を見ながらニヤリと笑う。嫌みだ。絶対嫌みだ。わざと聴こえるように言ってたもん。嫌みだ。蒼さんが母親って聴いて縮み上がったのが分かった。なるほどな。母はいつの時代も恐るべしなんだな。

「ま、とりあえず帰ろうか」

巫が立ち上がる。

返事をしようとして、上を見上げた時だった。

「巫、あれ……」

青白い光が、いくつも空に登っていく。

「ああ、あれはペリユトンに喰われた魂だよ。ペリユトンが死んだから、解放されたんだ。元は生きてた魂だから、未練があるんだよ。家族とかいろいろ。気が済んだら、自分でいるべき場所に還るよ」

悪霊になっちまう魂は、未練が晴れなくてずるずると残ってるうちに、あんな風になっちまうのかな。

だとしたら悪霊も、悲しい魂だな。

あの子供も、最初は本当に母親を探してたのかもしれない……。でも見つからなくて、絶望しちまったのかな。

「さ、帰るよ」

「おー」「なあ、巫」

なあんか忘れてる気がしてたけど、やっと思い出した。

「なあに？」

「オルトロス忘れてた」

「……………」

何その無言。お前も明らかに忘れてただろ。

「ひでえ飼い主」

なんか小馬鹿にしたような言い草、めっちゃ腹立つ。実体があったら殴ってやるのに。

簡単に返り討ちに合ってこてんぱんにされるのがオチか。

「つーかオルトロスどこだ？」

「あそこ」

巫が指差す方を見ると、瓦礫の下がもぞもぞと動いてる。瓦礫をどかすと、埃塗れのオルトロスが出てきた。

【ウウウウ……】

抗議してくるように唸る。

【あー悪い悪い。帰ったら風呂入れてやる】

「零君置いてくよ〜？」

「ちょ、マジで置いてくな！」「ただいまっ」と

オルトロスを下ろして靴を脱ぐ。

【おかえり！】

奈央人が勢いよく抱きついてきた。

で、すぐさま火の玉になって俺の中に収まる。

俺の中、そんな安心出来るのか？

【スゴイ埃塗レダネ。二人共】

【うん、ちょっとね〜。とあるお馬鹿さんのおかげで建物全壊しちゃったんだ】

笑顔ですげえ嫌みたっぷりだな。

蒼さんは無視だけど。

とりあえず風呂入る。

巫に先に入ってもらって、その後に俺とオルトロスが入る。
あゝ、やっぱり一日の終わりは風呂だな。

オルトロスも気持ちよさそうに目を閉じてる。

オルトロス用の風呂桶を買ってきて、それに入れてる。
さてっと、上がるか。

頭を吹きながら部屋に戻る。

お？珍しく巫がソファに寝そべったまま寝てる。

まあ、朝起きたらどうせ隣にいるんだろな。

そういえば白銀はまた散歩か？

まあいいか。寝よ寝よ。

独り歩き 誤解と傲慢

思っんだ

“自分”を受け入れてやれないのは、認めてやれないのは、哀しい
どんな“自分”であれ、それは己を形作る一部なんだ

それを否定したら、自分が自分じゃなくなる「おーい。おーい起きろ」

顔をべしべしと叩かれる。

うゝ、もう少し寝かせてくれよ。

「起きろって」

また叩かれる。なんなんだよ。

あれ……？そっいえば、この声誰だ？巫じゃねえし……。

「起きろってんだよ」

「ぼふぁっ！？」

腹を抱えてうずくまる。手加減なしで蹴られたし……！

「何すんだよ！………って、あれ？」

漆黒の巫女装束に身を包んだ、俺にそっくりな人物。
蒼さん……だよな。

髪を胸くらいまで伸ばしてるけど、俺が髪を伸ばしたらこんな風になるんだろな。

それにしてもなんだよ、この真っ白な空間。夢か？

「夢に決まってるんだろ。あいつを気にせずに話すには夢の中が一番なんだよ」

あいつ……って誰だ？巫か？

「あいつが話さないなら俺が話す。お前にとっては食人鬼よりもシヨックだろうけどな。いいか、よく聴けよ。お前は“鍵”なんだよ」

「“鍵”……？」

「お前の存在は奴らにとっても、被い師にとっても、全ての“オニ”にとっても、とつともなく重要で危険な意味を持ってるんだよ」

言ってる意味が、分からない。

危険？俺が？なんで？

「お前が“人間”のまま埋もれていれば、“鍵”のお前を奴らに知られずに済んだかもしれないけどな。人間のまま死んで、“鍵”はどっかの誰かさんに転生してな。運命っていうモノは、ふざけたもんだよ」

なんなんだよ、“鍵”って。俺とどう関係あるんだよ。

「“鍵”って……なんなんだよ……？」

「鍵”は……」

‘零君！起きるんだ！’

巫の怒鳴り声で、夢から引き起こされる。目を覚ましたら、怒ったような悲しそうな顔をした巫が目の前にいた。胸ぐらを、掴まれてる。

「狩真 蒼……！余計なことを……！零君にはまだ、全てを受け入れる覚悟も、器も全然足りてないのに！」

口が勝手に動く。

「馬鹿かお前、何悠長なこと言ってるんだよ。そりゃあこいつのことだから傷つくだろうさ。でもな、真実を受け入れて後々の戦いに備える方がいいだろう。その時が来たらじゃ、受け入れるも糞もねえだろう。俺は引込む。二人で話し合え」

感覚が戻ってくる。巫が手を離して、頭を掻く。

「全く……本当余計なことしてくれたよ。僕の段取りってものがあるのに」

「なあ“鍵”ってなんなんだ？」

「はあ……仕方ないから言うよ。“鍵”は、地獄の最下層にある強大で凶悪な“オニ”達を幽閉する“扉”の唯一の鍵なんだ。“鍵”がなければ“扉”は決して開けない」

「“扉”って、どんな“オニ”が閉じ込められてんだ？」

「例えば、八岐大蛇とか」
やまたのおろち

八岐大蛇って、神話級の化け物が幽閉されてんのかよ。

「荒神の本体も、“扉”に幽閉されてるんだ。だから、奴らにとつて零君はとても大切な欠かせない存在なんだよ」

「でも、なんで俺に……」

「本来“鍵”は閻魔大王が持ってたんだよ。でも、奴らが“鍵”を奪おうと激しい戦いが巻き起こった。そして“鍵”は失われて、人間の魂の中に紛れて転生しながら、ひっそりと隠れてたんだ」

そして、今は俺が“鍵”なのか……。

「奴らに零君をみすみす奪われる訳にはいかないんだよ。勿論、奴らに荒神の本体を取り戻さない理由もある。でも、一番の理由は、奴らが“扉”を開けてしまったら、幽閉されていた“オニ”が全て地上に溢れ出すことになる。そうなったら、世界のバランスが崩れて破滅する」「零君勘違いしてるかもしれないけど、僕達被い師は人間を守ってる訳じゃないんだよ。被い師が守るのは、世界のバランスであって人間じゃない」

え……？ そうなの？

「世界自身がバランスを保っているけど、それだけじゃ足りないんだよ。人間も“オニ”も増えすぎてるから。冷たく聴こえるだろうけど、世界は自然災害を引き起こすことで、人間のバランスを取ってるんだ」

自然災害……じゃあこの前ニュースで見た竜巻で三十人死亡は、世界の意志って訳なのか？

「そして被い師は有害となり得る“オニ”を狩ることで、バランスを保ってる」

「じゃあ、もし“扉”が開いたら、どうなるんだ？」

「“扉”に幽閉されてた“オニ”が、全てを破壊し尽くすまで止まらないだろうね。人間も“オニ”も関係ない。全てを殺戮し尽くす。止められるとしたら、“鍵”である零君だけだ」

そうなたら止められるのは俺だけとか、重苦しい話だなあ……。

「一度開いた“扉”を再び閉じる時、“鍵”の命を必要とするんだ」

それってつまり、俺は死ぬってことか？

「だから、そうならないために、僕が守るから」

巫の瞳が、本気だと分かるほど真剣だった。「さて、重苦しい話は終わり！」

いきなりそう言うと、立ち上がってなぜか両手で頬を引っ張ってきた。

「……いひゃいんれすけど」

「気にしない気にしない」

気にするわ！っーかさっきまでの真剣な表情どこ行っただい！

「全く予定狂いまくり」。もう少し時間が経ってから話すつもりだったのに」

いや……そんな言われても……。

「まあいいや。言っても始まらないし」

パチンという音を立てて、やっと指を離す。痛いけど……。

「悩むより行動！避けては通れない戦いに向けて、零君も強くなってもらわないとね。今日も仕事だよ。久しぶりの依頼だけど」

「依頼？」

「そ、依頼。被い師は一般人からの依頼も請け負うんだよ」

「へえ……どんな依頼なんだ？」

「ん？ある女の子が夢で見た場所が必ず火事になるから、その原因を突き止めるんだよ」

俺も手伝わされるのかあ。巫といたら、ぐだぐだ悩む暇ないな。

それはそれで、よかったかも。うじうじ悩むより。今日は平日だけど、授業がひとつもないから事実上休みだ。

と、言う訳で早速依頼主の家に連れて行かされました。

「……と、言う訳なんです……。あの子、すごく怯えて二週間くら

い学校に行けなくなってるんです」

「分かりました。必ず僕と助手で解決します。しかし、我々被い師は本来は存在を知られてはなりません。この件が解決しましたら、関わった全ての人間の記憶を抹消しなければなりません。ご同意頂けますね？」

「はい。これが解決するなら」

「つか、この母ちゃんホントに娘のこと心配してんのか？
よそ行きの服着て、化粧して。」

「あの……私はこれから出かけなきゃいけないんですが、よろしいでしょうか？」

「どうぞ。娘さんにお話を訊くのはよろしいですね？」

「どうぞ。娘は二階にいますので。では失礼します」

そう言つとそそくさで行つちやつたし。

「零君、話訊きに二階行こうか」

「入りますよーっと」

ノックをしてドアを開ける。

腰まで伸びた長い髪をした女の子が、俺と巫を見る。しばらく黙つてた女の子が、いきなり口を開いた。

「……おじさん達なら、私を助けてくれるの？」

「おじさんじゃなくて、お兄さんね」

いや……見た目は若いけど、実年齢はかなりのおじいちゃんだろ。それ言ったら笑顔で殺されそうだけど。

「僕は巫、こっちは零っていうんだ。君の怖がらせるモノを僕達が必ず退治するって約束するよ」

自信満々な目をして堂々と言い放つ。

この表情だけを見てたら、頼もしいんだけどなあ……。巫が女の子に近づいて、しゃがむ。

「君の名前、教えて？」

「みなみの南野 ゆり百合」

「じゃあ百合ちゃん、最初の夢の内容覚えてる？」

女の子が膝を抱えて、俯きながら話す。

「最初の夢では……教室が燃えてた……。私が通ってた学校の、教室」

「どこの学校か覚えてる？クラスと」

「多分……長谷部小学校の二年三組」

「長谷部小学校ね。次の夢は？」

「……マンションが燃えてた。長野に引っ越した時に住んでた、マンション」

「ありがとう。今日はもういいよ。また話訊きに来るかもしれないけど、いいかな？」

女の子は無言で頷く。

「じゃあ零君、今日は帰るよ」なぜか今、図書館にいる。

漆黒の巫女服を着た巫はかなり目立つ。ちらちら見られてるし。本人は気にしてねえけど。

「さて零君、今回の事件には何が関係してるでしょうか？」

ここ一ヶ月分の新聞を片っ端から集めて、一部始終目を通しながら聴いてきた。

「えーと……火事になった場所があの子がいた学校とか、住んでた場所……？」

「正確。百合ちゃんのお母さんは気づかなかったみたいだけど、火事になった場所の全てが百合ちゃんに関係してるんだよ」

「なんか、思いついたのか？」

「んー、まあちょこつとね。ある場所を燃やしてくれたら、確信持てるんだけどな」

もうそこまで推理出来てんのかよ。俺なんてさっぱりだぞ。

「ある場所を燃やしてくれたら一気に解決だよ。お母さんも、百合ちゃん自身が気づいてないのが難点だなあ。さて、どうしようか」

一人、ぶつぶつと呟きながら新聞を読み続ける。「ふむふむ……なるほどねえ」

一人で何を納得してるのか、頷きながら呟く。

「なるほどねって、なんだよ」

「いやね、この放火犯、随分と優しいなあって」

「優しい？」

何が優しいんだ？さっぱり意味が分からねえ。

「ほら、だってさ、誰も殺してないし、傷つけてもない」

「へ？」

巫が指差す記事を見ていく。

ホントだ。どの火事も、死傷者ゼロ。

偶然じゃあ……ねえよな。

「これって、偶然じゃねえのか？」

「偶然じゃないと思うよ。意図的に、死傷者を出さなかったんだよ。誰も傷つけたくなかったんだろっね、あの子のために」

あの子？あの女の子のことか？

「僕の推理が正しければ、今の人間は“心”ってモノを無視しすぎだよ」

それがどういう意味なのか、俺には分からない。調べ物が終わって、図書館を出た。

つーか、ある場所を燃やしてくれたらって、そのある場所は燃やしていいんだな。

燃やされたとして、犠牲者は出ないって確信してるから？

巫は確かに頼りになる。経験だって豊富なのは分かってる。

けど、それでも間違うことはあるだろ？

そんな簡単に結論出していいのか？

「まあ、大丈夫じゃねえか？」

いきなり蒼さんの声がして、思わずびびる。

「ただ、後ろにいる奴を甘く見ない方がいいぞ。あいつは犯人をサミアドと踏んでるんだろうけどな、恐らくこれはそんな生易しいものじゃない」

サミアド？

「本来は海岸の砂中に棲むイギリスの妖精だよ。気に入った人間がいたら、毎日ひとつ願いを叶えてくれる妖精なんだ。けど、サミアドはあんな邪悪な気配はしてねえ。あの気配がなんなのか、俺にもまだ分かんねえけどな」「へーなるほどね。で、アイツは他に何か言ってた？」

蒼さんをアイツ呼ばわりだし。まあ……いろいろ恨みでもあんだな。うん。

てゆーか、巫も物食うんだな。当たり前だけど。今まで食うとこ見たことなかったからさ、てつきり食わなくても生きていけんのかと思ってたよ。

なぜかマクドだけど。

滅茶苦茶目立ってるけど。もういいや。気にしない気にしない。

「いや、それだけ」

「随分馬鹿にしてくれるもんだねえ。確かに最初はサミアドと思ったけど」

「どういうことだ？」

「ん？例えば、百合ちゃんの深層心理が望んでることをサミアドが叶えてたとかね。でも、違う。サミアドは確かに百合ちゃんの近くにいる。サミアドは被害者を出さないようにしてたんだよ」

サミアドはあの子の傍にいる？ますます分からなくなったぞ。

「事の始まりは恐らく、ドッペルゲンガーだよ」

ドッペルゲンガー？確か、ムツキさんの説明では異世界にいるもう一人の自分じゃなかったっけ？

「零君さ、ドッペルゲンガーはもう一人の自分で、会って死ぬって噂、聞いたことない？」

「ある……けど」

「あれはね、ホントなんだよ。正しくは遭遇して入り込まれたら、
だけど」……………入り込まれたら？

「どういう意味だ？」

「ん？ドッペルゲンガーはもう一人の自分でしょ？なんでドッペル
ゲンガーが生まれると思う？」

ドッペルゲンガーが生まれる理由？

「……………分かんねえ」

「ドッペルゲンガーはね、切り離されてしまった感情、魂なんだよ」

「切り離された？」

「つまりね、例えばとある子供の両親が共働きで、寂しさを常に抱
えてたとする。寂しさに耐えきれなくなった時、寂しさを感じない
一番手っ取り早い方法は切り離すか、別の自分を造り上げることな
んだよ」

別の自分を造り上げるって、つまり、多重人格ってことか？

「でも、そんな簡単に……………」

「出来るんだよ。人間は実に都合よく出来てるからね。本人が自覚
してないところで、辛い感情を切り離してしまうんだよ。それが、
ドッペルゲンガーと多重人格の原因」

一旦言葉を切った。

「ドッペルゲンガーはかつて自分の魂だった一部。でもね、一度離れてしまったら、それはもう自分じゃないんだよ。自分だけど、自分じゃない。でも、ドッペルゲンガーは還りたがる。でもそれは、違う魂同士がひとつになることと一緒になんだ。だから、肉体は耐えられずに死ぬんだよ」なんか、重い話になってきたな。

「原因はドッペルゲンガーであることは間違いないんだ。なのに、おかしい。分からない」

巫が分かんねえんじゃ、俺なんて分かる以前の問題だよ。

「何がおかしいんだよ？」

「ドッペルゲンガーがね、力を持つてるはずがないんだよ。ましてや、何かを破壊したり他人を傷つけるほどの強い力を持つてるはずがないんだ。なのに、百合ちゃんのドッペルゲンガーは力を持つてる。それとも、違う“オニ”が何かを企ててるのか……」

眉間にシワを寄せて、真剣に考えてる。

「まさか、百合ちゃんは無理矢理ドッペルゲンガーにされたのか？でも、そこまで人間の心を操るのに長けた“オニ”なんて……」

そこまで言つて、椅子にもたれて目を閉じる。

「どっちにしろ、今夜サミアドと百合ちゃんのドッペルゲンガーを見つけないと」

怒ってるような、悲しそうな顔をして、溜息を吐いた。「つかさ、見つけるって言うけどどうやって探すんだよ？」

「ん？百合ちゃんに関わりのある場所を徹底的に」

なんちゅう地道な作業。それを、俺もやるんだな。

「そっいえばさつき、何か心当たりあるような言い方しなかったか？」

「ん？何が？」

「さつき別の“オニ”が何か企てるって言った時、明らか何か心当たりある顔してたぞ」

「あー、まあ確かに心当たりはあるけど、それはあり得ないんだよ」

「……？なんで？」

「その“オニ”は絶滅したから」

「絶滅？」

“オニ”にも絶滅ってあんのかよ。

「その“オニ”は魂喰い（たまくい）って言ってね、魂を喰らうって書いて魂喰い。文字通り魂を喰らう“オニ”なんだよ。人間のね。魂喰いは人間の心を操るのに凄まじく長けた“オニ”なんだ」

「へえ……」

ホント、“オ二”っていろいろいるなあ。

「例えば織田信長の本能寺の変は、明智光秀の部下になりました魂喰いが明智光秀を誑かして起きたことだしね」

なんちゅうスケールのデカイ話だよ。飲んでたコーラ吹きそうになったじゃねえか。

歴史に“オ二”って意外と関わってるんだな……。 「じゃあさ、もし魂喰いが明智光秀を誑かしてなかったら、本能寺の変は起きてなくて、歴史は変わってた可能性ってあんの？」

例えば織田信長が死なずに天下を取ったとしたら、どんな世界になっただろう？

秀吉が天下を取ってなくて、徳川に滅ぼされてなかったら？
想像すんのめっちゃ楽しいんですけど。

「可能性としては十分あるだろうね。魂喰いはそれをただの悪戯感覚でやるんだから、質が悪いよ。相手はただの一般人じゃなくて、歴史に残る偉人なんだから」

確かになあ。織田信長なんて影響ありまくりだよなあ。

織田信長ってマザコンだったらしいよな……。

「まあ魂喰いは置いていて、百合ちゃんだよ」

「なあ、魂喰いが絶滅してなくて、生き残ってたって可能性はねえの？」

「それはないよ。葬ったのは僕達だもん」

「でもさ、心を操るのが得意中の得意なんだろ？巫だって騙されることがあるかもしれねえだろ？」

そういう絶対の自信は、勘を鈍らせて判断を間違った方向に導くことだってある。

巫だってそれは分かんねえだろ？

「うーん、そうだねえ。とりあえずはサミアドとドッペルゲンガーを見つけてるのが先だね」くんつと、「彼」は中指に結ばれた《糸》を引く。

《糸》の繋がる先は、人の深層心理。

“彼”は人の心と呼ばれるモノを意のままに誑かす。

深層心理に隠れた“心”を、心に引きずり出す。

“彼”の《糸》に囚われたら最後、“彼”の定めた“物語”を歩むことになる。

自分の人生を歩んでいるつもりで、操られた“人生”を歩んでいるのだ。

即ち、人形。

“彼”が飽きて一度《糸》^{ひとたひ}を切られてしまえば、廃人となり果てる。まるで、マリオネットのように。

そして人生を弄ばれた挙げ句、魂を喰われるのだ。

【ああ……面白くないですねえ……。ただか男に捨てられた程度で死を選ぶなど。弱いですねえ。楽しめなさそうなので、貴方はもういないです】

中指の《糸》が、切られる。

【おや……？】

小指の《糸》を引く。

【なんとまあ……母親の愛というものですかね。心を削除したのに、抗うとは。娘をこれ以上、私の玩具として弄ばれるのが嫌だったんですかねえ】

親指の《糸》を引く。

【ふふ……怯えてますねえ。自分のいた場所が次々と火災になるのは、きつと恐怖でしょうねえ。しかし……この親子の“筋書き”には、邪魔が入りすぎてますね……】

薬指の《糸》を、断ち切る。

【火災で犠牲を大勢出すつもりでしたのに、サミアドめ……。最大の敵は巫ですね……。そして、あの食人鬼。まあ、いいでしょう。余興として、楽しみましょう】

中指に、新たな《糸》が結ばれる。「あの……それで、なんのご用

でしょうか……？百合に何か……？」

「いえ、百合ちゃんは大丈夫です。ただ、こういう問題は様々な観点から探りを入れた方がいいんですよ」

無表情な母親に対して、巫は飄々とした笑顔だ。

「そうですか……。百合のこと、お願いします」

立ち上がって深々と頭を下げる。

「……………」

なんだろ……？なんか、引つかる。目、目……か？無表情なのに、たまに感情が戻るつつーのか……？
うーん……気になる。

「じゃあ、僕らもこれで失礼します。仕事にお邪魔しました」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「なあ、何を調べてんだ？」

調べるって、なんちゃ調べてなかったぞ。ただ、母親の仕事をちよつと見て母親から話を聴いただけ。

「んーちよつとね。いろいろと気になったから。零君にはお礼言わなきゃね。魂喰いの仕業としたら、全て辻褄が合うんだよ」

そう言つて、俺の方を振り向く。
指をパチンと鳴らした。

【結界よ、人を寄せつけるな】

なんとなく、匂いを嗅いでみたら、人間の匂いが遠退いていく。

【さあてと、ここには誰もいなくなつたよ？出てきたらどうだい、
かむなき
神薙】

【おやおや、バレてましたか】

現れたのは、スーツに身を包んだ黒髪のどこにでもいそうな男。

【まさか、あの炎の中を逃げ切つたとはねえ】

【ああ、あれは本当に死ぬと思ひましたよ。命からがら逃げました。
おかげで、力を回復させるために魂を喰い漁る羽目になりましたよ】
………っか、何？この状況？

ちよつと母親の仕事場も調べようかって言われて来てさ、何がなんだか分からねえうちにまさかの魂喰いつて……。
まさかホントに生きてると思わなかつたし。

【しかし、まだまだ足りません。もっと魂を喰わなければ】

【……と、言うことは、力は完全に戻ってないってことだね？】

【そういうことですねえ。今戦えと言われたら、逃げ切れる自信はないですねえ……。大分戻ってきましたが、全然足りませんよ。貴

方を喰らえば、別ですがねえ】

そう言つて俺を見る。

え……？俺、もしかして狙われてる？

【ですが、今の私じゃ貴方は喰えないですね。逆に私が吸収されます。完全に戻つてから検討するとしましょう。人間のままなら、尚よかつたのですが……。しかし、情けないですねえ……。これでも昔は神と崇められたのですが】

神さんとか……。心を操るつてことは、誰かを操つて他の人達も自分を崇めさせるつてことも、出来そうだな。

【昔も昔、大昔の話じゃないか】

【いやはや、滑稽な人間の姿を眺めるのは面白かったですよ？人生を操っているのは、自らが神と崇めている私だというのに。まあ、本物の神が、人間がいくら乞おつと応えるはありますが】

【村ひとつを滅ぼしたこともあるらしいね】

【私を殺して成り代わろうとする、傲慢な人間が多かったのですよ。ですので、遊びがてら滅ぼして、どのような影響があるのか眺めた訳です】

【楽しそうだねえ。楽しいかい？誰かを操るのは？】

【ええ、楽しいですよ。何せ、私は魂喰いですから。操り、遊び、捨て、喰らう。何よりの私の楽しみですよ】

唇に指を当てて、笑う。妖艶に。【君は変わらないねえ。さあて、ここら辺で死に直すのはどう？】

笑顔で杖の先を魂喰いに向ける。本当にここでやり始めそうな勢いだ。

いいのかよ……。ここ、人が沢山いるんだぞ。

【それは御免被りたいですねえ。貴方ならそう言うと思いましたので、この建物全体にちよつとした細工を施したのですよ】

【へえ、どんな？】

【この建物に私の《傀儡》を潜ませているんですよ。私の合図があれば自爆するように】

【へえ……。それは得意なハツタリ？それとも本当？】

いや、いやいやいや！

飄々と笑顔で話してるけど、攻撃するなら《傀儡》だかを爆発させて中にいる人間を殺すって脅されてんだぞ！？

この中で働いてる人全員が人質なんだぞ！？
本当だったらどうすんだよ！

【さあ、どうでしょうねえ？】

魂喰いも飄々とした笑顔で、巫を挑発する。

【巫……。《傀儡》って……】

こんな時に訊くことじゃないけど、知つていた方がいいかもしれないな

い。

【《傀儡》は……あいつに魂を喰われた人間の亡骸だよ。魂の抜け殻。魂がないから、いかようにも操れる人形になってしまっただよ】
操って弄んで、喰うだけじゃ飽き足らずに、更にその亡骸まで弄ぶのか？
どれだけ侮辱すれば気が済むんだ？

【さあ、どうします？ 穏便に済ませるか、犠牲を出すか。どうぞご自由に】しばらくの間、巫も魂喰いも黙り込む。
静寂が痛いくらいだ。

【そういえば、人間を特別守ってる訳ではなかったんですね。困りましたねえ。二百人くらいが死のうと、確かに裨い師には特別関係ないですよねえ……。確実に逃げるために、ここは爆発させちゃいましょうか】

そう言つて笑顔のまま、指を鳴らすために、指同士を擦り合わせようとした時だった。

脳に直線響く《音》が、俺達と魂喰いを襲う。
思わず、耳を押さえてうずくまる。

【くっ……、超音波ですか。しかし、やっと姿を現しましたね。随分搜しましたよ】

俺達の前に、全身茶色い毛に覆われてずんぐりとした胴体をした、カタツムリのような眼にコウモリのような耳をした“オニ”が、魂喰いを睨んでる。

【サミアド……】

へっ？あれがサミアド？

【さあ、貴方が守っている少女のドッペルゲンガーはどこです？】

【……教エナイ。俺ヲ、殺セ】

【分からないですねえ。なぜ、人間など守るんです？いくら貴方が想いを寄せていても、あの少女は決して気づかないのですよ？知っていたとしても、裏切られる。なぜです？】

なんだか、イラついた様子で話す。

【まあ、それはいいです。貴方をまだ殺す訳にはいかないのですよ。ドッペルゲンガーの居場所を吐かせるまでは】ドッペルゲンガーの居場所を吐かせるまでって……魂喰いは居場所を知らねえのか？じゃないとわざわざサミアドを捜さないか。

《傀儡》を自爆させるとか手の込んだことしてるけど、なんで魂喰いはあの子に執着してんだ？

こんなこと言ったらあれだけど、あの子に執着しなくても喰える魂はいっぱいあるんじゃないかねえのか？

【全く、ここまでしなければ現れないとは、とんだ頑固者ですね。一人を犠牲にするか、大勢を犠牲にするか、どうします？】

【……………】

魂喰いの挑発に、サミアドは睨んだまま答えない。

てか、爆発はホントか……？

【ねえ神薙。君はなんで百合ちゃんに執着するの？】

さりげなく、巫が聴いた。

【なぜ……ですか？教えてあげましょうか？】

【そうだねえ。ちょっと気になるな】

【あの娘は、かつて私を裏切った女の生まれ変わりなのですよ。なので、魂を滅ぼさないと気が済まないのです】

何かを思い出したのか、霊力が視認出来るほど濃く発散される。

【かつて、滅ぼしてやろうと女のところに行ったら、有能な祓い師に邪魔されてね。その時に私は力をほぼ失ったのですよ。力を取り戻す間に魂は転生してしまい見失いました。ですが、やっと見つけました。今度こそ、木っ端微塵に滅ぼしてやります】【へえ、喰うんじゃないで滅ぼすの？】

【ええ。喰うのではなく、滅ぼすのです】

……………喰うのと滅ぼすのと、どう違うんだ？

喰われるのも、滅びるのと一緒にような気がするけど。
魂喰いがサミアドを見る。

【なんで、ドッペルゲンガーにそこまで執着する訳？やっぱり、百合ちゃんの一部だから？】

【勿論じゃないですか。だからこそ、貴方達が邪魔で邪魔で仕方ないですよ。まあ、どうしようもないので、余興として楽しむことにしましたか】

目を閉じて、一旦言葉を切った。

再び目を開けた時、目の色が黒から紫に変わってて驚く。

【神薙、本気かい？本気で自爆させる気なのか？この場で何もしないなら、君を見逃す理由が出来る。けど、本気なら被わなきゃならなくなる。また繰り返しつもらいかい？】

【人間がいくら死のうと、私には関係のないことですよ。所詮、食糧でしかないのですから。私を敵として、最初に攻撃してきたのはどちらです？巫、貴方も聴いたことくらいあるでしょう？裏切ったのは人間の方です。私じゃない。私は、私の持てる力を尽くして守っていたのに】

話が、分からなくなってきた。

【もういいです。こうでもしないと、私の恨みは分からないでしょうね。好いた者に裏切られ、力を奪われた悲しみなど】

【神薙！】

巫が魂喰いに向かって走る。けど、もう無理だ。
魂喰いが、指を擦る。

轟音と地震のような衝撃が、襲った。【巫、術式でどうにかなんねえの！？】

魂喰いが起こしたからなのか、炎が異常な勢いで広がっていく。
これじゃあ、巻き込まれた人はもう……。爆発に巻き込まれた人は、
望みは限りなく薄いな……。

【無理だ！人間が認識した後じゃ結界は働かないんだよ！認識する
前に張らないと！この中だけじゃない！外の人間にもこの炎は認識
されてる！結界も他の術式も使えない！使ったって意味がない！】

【そんなの聴いてねえぞ！】

【術式も万能じゃないんだよ！術式にも弱点があって綻びがあるん
だ！冷たく聴こえるだろうけど、こうなったら僕達に出来ることは
ない！僕達にはもう助けられない！】

巫がサミアドを腕に抱えた。

【行くよ！】

俺の腕を掴んで、窓に向かって走る。

【何するつもりだよ！？】

【飛び下りるんだよ！】

飛び下りる！？ちょっと待て！ここ五階だぞ！？

反論する前に、ガラス窓を突き破って地面に落ちていく。

まるで生き物みたいにながら、建物を呑み込んでいく炎が見
えた。【綺麗に燃えてますねえ……。もっともつと燃え盛るのです。
人間など、骨も残さず燃やし尽くしてしまいなさい】

神籬の言葉に呼応するように、炎が爆発し舐めるように壁を滑る。炎の全く衰えぬ勢いを前に、ガラス窓は呆気なく音を立て砕け散る。その破片がまた、野次馬に降り注ぐ。

凶器と化したガラス破片は、容赦なく野次馬を襲う。

小さな破片は少し皮膚を掠める程度だが、大きな破片はそれだけで充分な凶器だ。

突き刺さり、あるいは切り裂く。

喉や頭を切り裂かれるか、突き刺さってしまえば、死、だ。

目の前に漂っていた魂を指で摘む。

漂ってきた方向からして、火災に巻き込まれた魂だろう。

魂を握り締める。

神籬は暴れる魂を冷やかな瞳で見つめ、力を込めると握り潰した。断末魔さえなく、魂の欠片が風に流され霧散していく。

ふと、過去の記憶がよぎる。

かつて、慕っていた少女の笑顔。

自らがまだ、土地神であり守り神であった時の、記憶。

何も知らずに人間を守っていた頃の、愚かな記憶。

魂喰いに身を堕としたのは、いつだったか。

記憶の中の“声”が、木霊する。

だから言ったであろう？人間を信じてもらくなことはないと。これほどまでに裏切られて、まだ信じるか？

拳を、ぎりぎりと握る。

【もう、信じませんよ。裏切られる悲しみも、痛いと言くのも、あんな思いをするのはもう懲り懲りです】

少女への想いは断ち切ったはずなのに、まだきりきりとどこかが痛

むのはなぜだろう、と彼は考える。

その頬に涙が流れたのを、彼自身は気づかない。【いって……】

なんとか無事に着地出来て安心する。

着地というか単なる落下だけ。

よく見ると腕にガラスの破片が突き刺さってる。

地面に落ちた時に激痛が走ったのはこれが……。

ガラスを抜く。すると、すぐに傷口が塞がった。

ふと、周りを見る。野次馬が沢山。

やべえ、治るとこ見られたし！てか、五階から落ちてきて無事とか、それこそ注目の的じゃんか！

でも……あれ？見られてるのは俺じゃない？

【零君？どうかした？】

【いや、五階からあんな盛大に落ちてきたのに騒がねえからなんでもなってる】

【そりゃあ僕達のことが見えないように結界を張ってるからね】

あ、なるほど。そりゃそうか。

それにしても、酷い光景だな……。

上を見ると衰えを知らない炎。下は下で大量のガラスの破片が降り注いだせいで、身体にガラスの破片が突き刺さったり切ったりした人が大勢いる。

ああ、くそ。血の匂いのせいでこんな状況なのに、食欲が煽られる。

【零君行こう。ここにいても僕達に出来ることは何もない】

【……分かった】

ここにいっても延々と食欲が煽られるだけだ。
巫の後について行く。「なあ巫」

「何？零君？」

「家でくつろいでいいのか？」

あの後、ごく普通に家に帰ってきた。サミアドも一緒に。
テレビを点けると、早くも速報で出てるし。情報早いな。

謎の爆発……か。原因ははっきり分からないままになりそうだな。
“オ二”の仕業だし。

「だから、出来ることはないんだよ。あの場で術式を使う方が危険だよ」

「なんで？」

「安易に行動して、“オ二”や僕達の存在を知られる訳にはいかな
いんだよ。人間がすんなり“オ二”の存在を認めると思う？それこ
そ戦争だよ」

まあ、言われてみればそうかもしれないけど……。

「それよりも神薙だよ」

「そういえば神として崇められてたって言ってたけど、神様つての
は人間に関わらないんじゃないかなかったのか？」

「ああ、神薙はね、本来は神は神でも土地神だからね。人間を守る

守り神なんだよ」

「……どう違うんだ？」

「零君が言ってるのは神話に出てくるような高位の神でしょ？土地神は人間の信仰心が生み出した、人間が生んだ神なんだよ。神薙にとって人間は守る対象であり、生みの親なんだよ」

「じゃああいつは、元々神さんなのか？」

「そういうこと」

「それが、なんで？」

「僕は聴いただけだから、本当のことは分からない。けど、誑かされたとは言え、自らの手で生み出した神を、自らの手で滅ぼしたんだよ。人間が、欲のために」

「……………」

「話、聴きたい？」

「……………まあ」

「じゃあ話してあげる。過去に完結してしまった、よくある哀しいお話だよ」今や高級住宅街となり果てているとある場所は、大昔は小さな村だった。

かつては森に囲まれた、とても小さな村。

自給自足の慎まじやかな生活を送る村人を守るのは、人の想いが生み出した神。

その神と直接意思疎通出来るのは、巫女である一人の少女だけ。
神と巫女は、お互いに惹かれ合っていた。
それが、悲劇を生むとも知らずに。

どこにでもある、誰もが聴いたことのあるような話だ。

事の発端は村にやって来た一人の男。

その男は自らを呪い師だと言った。まじないし

男はこの土地の神を生かしておいてはならない、と言った。
生かしておけば村に災いがやってくる、と。

かくして男の言葉通りとなった。

雨は降らず、作物は実らず。

衰弱死する者さえ現れた。

村人は男に助けを乞うた。

男は言った。

災いの元凶はこの土地の守り神。守り神の力の源である珠しゅを奪い、
殺せ。

さすれば災いは取り除かれよう。

村人は戦慄した。しかし、詰め寄る村人に男は言葉巧みに神殺しを
了承させるのだ。

巫女は最後まで神を守ろうと村人を説得したが、男の前では無力だ
った。

巫女はせめて神を逃がそうとしたが、男の力を前にどうすることも
出来なかった。

かくして、神殺しが行われる。神は最初、小さな小さな意識の集合

体だった。

形を持たない、微睡みの中に漂う吹けば流されて消えてしまいそうな、小さな意識。

その小さな意識を生み出したのは、森に蓄積された村に住む人々の想い。

小さな意識を神へと覚醒させたのも、人々の想い。

神への祈りが、神を神へと覚醒させたのだ。

神は如何なる時も人々を守ってきた。

祈りを捧げられれば雨を降らせ、作物を育み、時に巫女に言葉を託し、人々を見守った。

神にとって人々を見守り、人々と暮らすことが幸せだった。

ただ、人々を見守り続けられれば幸せだったのだ。

しかし、人々は神の想いを裏切った。

人々が自らを殺しに来ることを、神は知っていた。

しかし、神は信じていたのだ。優しい人々がそんなことをするはずないと。

森そのものが神の身体。広い森の中、逃げることは出来たのだ。

しかし、神は自ら人々の前に姿を現した。

逃げてしまえば男の言葉が真実となってしまう。自ら姿を現せば、人々は考えを改めてくれると。

しかし、姿を現した神を人々は羽交い締めにし、男に珠を奪わせたのだ。

男は奪った珠を、巫女の手握らせる。

それを見た神は、初めて涙を流した。

そして、姿を消した。

男も珠を持ち去り、いつの間にか姿を消していた。

神のいなくなった森は荒れ、守る神がいなくなった村は廃れることとなる。珠は神の力の源。故に、珠を奪われてしまえば神は神でなくなり、ただの意識へと戻り消え去ってしまう。神も、ただの意識へと戻り消え去る、はずだった。

神は生きていた。服は引き裂かれ土で汚れ、胸には珠を奪われた際に穿たれた穴が空きながら、それでも神は生きていた。

神は地面にうずくまり、ただ静かに嗚咽を漏らした。

神の嗚咽を聴くのは、森だけ。

木々が枝を揺らし葉を擦り合わせ、神をいたわる。

しかし、珠を奪われ神としての力をなくした神にはもはや、木々の声を聴くことが出来なくなっていた。

木々の声も、風の声も、植物達の声も、もはや何も聴こえない。

聴こうとしても、聴こえない。

今まで聴こえていたものが、聴こえない。

それが、更に神を悲しませた。

人々が苦しんでいるのを、神はただ見ていた訳ではない。

人々を救おうと、力を尽くしていたのだ。

しかし何者かに力を阻まれ、及ばなかったのだ。

突然神の後ろに音もなく、黒ずくめの男が現れた。

男は言う。

だから人間など信じるなど言っただのだ。これほどまでに裏切られて、まだ信じるのか？

神は答えない。男はそんな神の様子に飽きたのか、背を向け去っていく。

黒ずくめの男が、珠を奪った張本人であることに神は気づいていない。

やがて、神は悲鳴のような慟哭だけを残し、姿を消す。

そして神は自ら身を墮とす。

守る者から狩る者へ。

神から“オニ”へ。

“オニ”となった神は、かつて守っていた村を自らの手で滅ぼしたのだ。

そして、“彼”は探す。自らを裏切った少女を。

一度阻まれ、また見失ったがそれでも尚、ぼろぼろになりながら。

“彼”は止まらない。少女を滅ぼすまで。

自らを止めてくれる者が現れるまで。

“彼”は望む。最後には、自らの滅びを。「……………」

しばらく黙ったままにいる。

そんなの聴いちまったら、一概にあいつが悪いつて言えねえじゃねえか。

「でもさあ、その巫女ってホントに裏切ったのか？」

「巫女は裏切った訳じゃないんだよ。そう見えるように、陥れられただけ」

「全てを仕組んだのは、その男なんだろう？なんで、そんな相手を信じたんだ？」

姿を変えてたにしろ、神さんなら気配で分かるんじゃないのか？

「その男はね、元は有能な祓い師だったんだよ。でも、男は自らの力だけじゃ満足出来なかった。もっと大きな力を望んだんだよ」

祓い師でも、やっぱり人間なんだな。

「ねえ零君。君は神なんかになりたいって思う？」

「いや……なりたくねえな。人の上に立ちたいなんて思わねえし」

「人間でもね、神の力を手に入れることは出来るんだよ。神の珠を奪えば、簡単に神の力は手に入る。でも、力を手に入れるだけだ。本物の土地神になれる訳じゃない」

一旦言葉を切って、麦茶を飲む。

「人間が土地神になる方法はただひとつ。土地神を吸収して、自らの魂と同化させるんだ」「じゃあさ、そいつはなんで神薙……だったっけ、吸収しなかったんだ？」

「神を吸収して同化させるんだ。かなりのリスクを伴うんだよ。神を吸収するだけの力と器がないと、失敗したら魂が欠片も残さずに消滅するからね。だから、確実に神薙を吸収するために、男は力を蓄えてるんだよ」

確実にって、神薙はそれだけの力を持ってた神さんなのか？

「神薙はね、土地神の中でも神格の高い土地神なんだよ。珠を奪わ

れて力を失っても、ただの意識に還らなかつたくらいにね。神薙の神格はまだ完全に失われてない。恐らく完全に失う前に、神薙を吸収するつもりだ」

「神格が高いのと低いのと、何か違ってくるのか？」

「そりゃあね。神格が低いと、自然を思いのままに操るのに限界があるから。神薙はなんの制限もなく操れるから、それだけ神格が高いんだよ」

でも、そんな神格の高い神さんから珠を奪うって、その男もかなりの力持つてるってことだよな。
でも吸収しなかったのは、出来なかつたってことで……。

「神薙は多分、死ぬつもりだよ」

「へ？」

「百合ちゃんを殺して、自分も死ぬつもりなんだよ、きっと。自分の手で、全てに終止符を打つつもりなんだよ。神薙も全ての力クりに気づいてるはずなんだ。でも、意地を張ってるんだろねえ。今度こそ、終わらせてあげるよ」【さて、問題は君だよ】

巫がサミアドを見る。サミアドは微動だにしないけど。

【君さ、巫女に自分の魂を守ってほしいって言われたんじゃない？かなり長い間。そんなにすり減ってるんだもん。自分が消滅するまで、守るの？】

サミアドが初めて、巫を真っ直ぐ見た。

【才前、鋭イナ】

【勘が鋭いだけだよ】

【姫八後悔シテタ。巫女ナノ二神ヲ守レナカタコト。神二人間ヲ憎マセタコト。何ヨリ、愛シタアノ方ヲ裏切ッタツテ。神ガ巫女ノ魂ヲ壊シテ自分モ死ヌツモリダト知ツテ、オレニ言ツタンダ。アノ方カラ私ノ魂ヲ守ツテクダサイツテ】

【でもさ、これ以上無理をしたら、君は消滅しちゃうんだよ？今は“オニ”でも元々は神なんだ。そんな相手に魂を隠し続けるなんて君には荷が重すぎる】

【分力ッテル、オレハモウ長クナイ。ダカラ、才前達二頼ンデイイカ？】

縋るように、俺達を見てくる。

【何を？】

【二人ヲ助ケテクレ】

サミアドを見つめて、自信たっぷりに笑う。

【それじゃ、全力で二人を守りましょ。君の姫の魂は壊させない。神薙は死なせない、男に吸収させない。これでいい？】

【アア、スマナイ】

【ドッペルゲンガーのところに、案内してくれるね？】夜になった。
で、白銀も帰ってきた。
相変わらず無表情だけど、目がすげー輝いてる。
なるほど。いいもの見れたんだな。
どろどろした人間関係大好きだったよな。
すげえ満足そう。

……で、なぜにオルトロスは俺の顔をべろべろ舐めてくるんだ？
？しかも真ん中の顔だけ。
顔、洗いてえな……。

【零君、何遊んでんの？】

トイレに行ってた巫が帯を締め直しながら言ってきた。

【遊んでねえよ】

両手で引き離したら、吠え出した。

【ナンデ、地獄ノ魔犬ガペットニナッテルンダ？】

【いろいろあったんだよ】

っーかペットって。まあ、似たようなもんか。

【っーか巫！こいつどうかしてくれ！】

なんで俺の顔をそんなに舐めたがるんだよ！鼻息荒すぎ！

【やだよ】

【薄情者！くっそ、オルトロスおすわり！】

ちよ、言うこときかねえし！

【白銀、幻覚かけてくれよ！】

白銀が無表情でオルトロスを見つめる。

きゅーんって悲しそうに鳴いて、やっとおとなしくなった。

【賑ヤカダナ】

【でしょ？毎日飽きないよ。さて、行こうか】【悪イ。ソノ必要ハ
ナクナッタ】

【なんで？】

怪訝そうな顔で、サミアドを見る。

【姫ガココマデ来テクレタ】

コンコンと玄関がノックされる音がして、皆一斉に玄関を見る。

これがホラー映画なら、開けたら幽霊に襲われる場面だな。

巫が無言で俺に開けてこいつで目で促してくる。

仕方ないから玄関を開けたら、女の子が立ってた。

南野 百合そっくりの、というよりそのものだ。

【はじめましてじゃないですけど、はじめまして】

なんか、幽霊みたいに半透明を想像してたけどちゃんと実体があるし。

【なるほどねえ。ドッペルゲンガーに巫女の記憶が全て移ったんだ。はじめまして、巫女様？】

なんだ？巫の態度がちょっとピリピリしてる。

【とりあえず中に入ろうぜ？】

【そうだね】

巫女さんの中に入れる。正座するやいなや、頭を下げた。

【貴方方にはご迷惑をおかけします】

【いえいえ。それにしても、よくこんな危険を犯せたね。下手したら、男か神薙に見つかってたんだよ？】

【それは重々承知しております】

【君さ、ホントはもう神薙に滅ぼされてもいいと思ってるんじゃないの？】滅ぼされたい？でもそれって、サミアドの気持ちを無視することにならねえか？

【滅ぼされたりしたら男の思うツボだし、サミアドの努力は無駄になるんだ。こんな状態になるまで君を守ってきたのに、君を守るために命を減らしたんだよ。それを裏切るの？】

【……………】

巫に追求されて、巫女さんは俯いたまま黙る。

【こんなこともあるつかと、これを持っておいでよかったよ】

懷から虹色に輝くビー玉みたいな玉を出す。立ち上がって巫女さんの前に立つ。

ビー玉を巫女さんの前に翳して、

【魂よ、眠れ】

その瞬間、巫女さんの影が揺らいでビー玉の中に吸い込まれた。

【才前、姫二何ヲ……！】

【大丈夫だよ。この玉の中でちょっと眠ってもらってるだけだから。勝手な行動されて、消滅されたら困るから。君だって、大切な姫が死ぬのは嫌でしょ？】

【ソウカ、スマナイ】

いきなり、今まで何も言わなかった白銀が口を開いた。

【巫、ヒトツ情報ダヨ】

【何？】

【ソノ男、神殺シナンダヨネ？】

【そうだけど、どうかした？】

【街で見力ケタヨ、ソノ男。火事ノアツタビルノ近クデ。ナンダカ

スゴク焦ッセタ。早く取り込マナケレバ、トモ言ッテタ。近イウチニ行動起コスト思ウヨ】

【なるほどね、ありがと。あっちも随分焦ってるんだ。どっちにする今日は休もう】

相手は元神様と、その神殺し。

頑張るけど、俺に何が出来るんだろ。

独り歩き 諦めと傲慢

ひとつ分かったのは、神さんでも人間と同じように、喜んで怒って哀しんで楽しんで笑ったりすること

ひとつ思ったのは、神さんだからって特別なことは何もない

ただ、力があるだけ

ほんとは、俺達となんら変わりないんだと思う「……っー訳なんだよ」

「そうかぁ…… お前も大変だな。巫さんはその二人に勝つ自信、あるのか？」

「巫のことだからあるだろ。自信の塊だからな。それに、それだけの實力があるんだろ」

「でもさ、その神を助けたとして、喜ぶのか？助かったことを嘆く可能性もあるだろ？」

「それは、そんな時になってみねえと分かんねえよ」

祐司と二人で昼飯を食いながら話す。

あれから三日経ったけど、何も起こらない。

巫は何もなかったみたいで、被い師の仕事を淡々とこなす。

俺はそれを手伝う。

巫女さんの魂を眠らせてるあのビー玉は、しずだま静珠っていうらしい。

「よつ、狩真。ちよつとき、シクラメンのことで教えてほしいことあんのよ」

「またかよ」

同じ学科の原が話しかけてきた。

原はら 慧さとし。園芸が趣味のおかしな奴だ。

園芸が趣味なら、俺から聴くなよ。

まあ俺が、農業高校に行つてたからか。

「花なんだけどさ、この時期の花は抜いた方がよかったよな？」

「そりゃあ、この時期の花は病氣の元になるからな。もったいないけど、冬に備えて取らねえと」

シクラメンは冬の花のイメージだけど、花は一年中咲くんだ。

でも、夏に咲く花は病氣の元になりやすい。だから出来る限り抜く。

「そつかあ、ありがとな。また教えてくれ」

「はいよゝ、……………？」

なんだ？原が立った瞬間、青い鱗粉みたいなものが散つたような……？

「園芸とか、俺にはよく分かんねえわ」

「そりゃあ、高校は同じでも学科が違つからな。お前、介護だったじゃねえか。俺はなぜか草花専門に行つたけど」

薬剤師と園芸。全く関係ねえけど。

「まあ、いろいろやってみたかったからな」

「俺も。草花って意外と面白かったし」

高校の三年間は面白かったなあ。」「……………」

学校が終わって帰ってきたら、なぜか居候共が寝転がってた。白銀がオルトロスの腹を枕にして寝てる。

オルトロスは舌をだらーんと出してる。

巫に至ってはふんどし一丁。巫女服は畳まずに放置。つか、ふんどししてたんだな。

巫って、全体的に細いけど筋肉質な身体してんだな。

サミアドはどっか行ったのか？

「う……………」

巫が起きて、俺を見てくる。

「零君、何人の裸じろじろ見てんの？まさか、寝てる僕を襲おうとか？」

ニヤニヤ笑って俺を見つめてくる。キモい。

「んな訳あるか！何が悲しくて男を襲わなきゃなんねえんだよ！」

「じゃあ、女なら襲うの？女になつていたらよかった？」

「だから！女でも襲わねえよ！そこまで理性崩壊してねえわ！そも

「そも、お前を襲うか！」

「そういえば巫は半分九尾だったよな。最初はどんな術だと思って思ったけど、九尾なら納得。」

「てか、なんでふんどし一丁？」

「疲れたからー。ちょっと大掛かりな結界張ってきてね。神殺しを炙り出すために。その結界張って疲れたから、暑いし服脱いで寝たの。」

「だからって、ほぼ全裸で俺のベッドに寝るなよ。」

「いいじゃんか。」

「てか、結界ってなんだよ？」

「んーとね、神薙の気配を常に捉えつつ、神殺しに神薙の気配を捕らえさせない結界」「その結界で、おびき寄せられるのか？」

「大丈夫だよ。あつちは焦ってるんだ。気配を追えなくなったら、必ず姿を現す」

「自信に満ち溢れた表情。巫らしい表情だな。」

「ただ、ふんどしだからちょっと笑える。」

「ふんどし一丁で自信満々の笑顔。笑ったら何されるか分からねえから笑えねえけど。」

「でもさ、なんで焦ってるんだ？」

「考えられる可能性はひとつ。身体が朽ち始めた」

身体が朽ちる……？神さんの力を手に入れてるのに？

「神さんの力手にしてるのにか？」

「あくまで神の力を手にしてるだけ、だからね。神になった訳じゃない。あくまで、肉体は人間のままだ。土地神を沢山殺して、珠を奪って力を手に入れてやっとな肉体を形成してたんだよ。それが崩れ始めたんだ。元は人間の肉体だ。神の力を以てしても、もうどうにもならないところまで来たんだよ。むしろ、よく今まで持ったよ」

なるほどなあ……。自分が死にそうになってるから、慌て始めたのか。

で、手っ取り早く吸収出来そうな神薙を狙ってるのか。

「でもさ、どうやって見つけんの？」

「ん？結界張ってるからね。神薙の気配を探るために結界を破ったら、僕に居場所と気配の質が伝わるようにしてる。後は、神殺しが結界を破るのを待っただけ」後は結界が破られるのを待っただけか……。いきなり巫が起き上がって、窓の外を凝視する。

「……………」とか言ってる間に、早速破ったみたいだよ。結界のカラーに気づかないくらい、焦ってるんだねえ」

え？もう！？展開早っ！

帰ってきてから十分も経ってねえよ！

「さて、服着なきや。零君、この二人起こして」

「はいはい……」

巫が巫女服を着始める。

白銀とオルトロスを揺すって起こす。

【おーい、起きろ。仕事だぞー】

【ウゝ、案外早イネ……】

【文句なら敵さんに言ってくれ。おい、オルトロス起きろ！】

むにやむにや言いながらこつち向いたと思ったら、噛んできた。
肘までがつぷり。

【いでえ！噛むな！起きろ！】

「零君、何遊んでんの？」

「遊んでねえよ！」「たく……がつぷりいきやがつて……」

なんか、きつちり歯形ついてるし。まあ、すぐに治って歯形が見えなくなっただけ。

唾液のベトベトは、洗わないとどうしようもねえけど。

【クーン】

懐いてくれるのはいいけど、限度つてもんがあるだろ。
尻を噛みながら大喜びで尻尾振んなよ。

なんで尻噛んでんだよ。甘噛みだからそこまで痛くねえけどよ。
白銀が笑ってるし！

【笑うなよ！】

【ダッテ……ネエ？】

そこで大爆笑すんなよ！そこまで大爆笑することか！？

【笑う前にこいつ離してくれよ！】

【全く零君、遊んでる暇ないんだからさ】

とか言いながらお前も笑うな！オルトロスを離してくれたのはありがたいけど！

【こら、噛んじゃ駄目】

巫が実にゆるーい感じでオルトロスを諭す。きゅーんって言いながら、ぶすーっと俺におとなしく抱かれる。
なんで巫の言うことは聴くんだよ。

【ま、それだけ零君が大好きなんだよ】

そうなのか？とんだ愛情表現だな……。

【そういえば、サミアドは？】

【あ……まあ、好きなようにさせてやって。ホントにもう、長くないんだ。自然消滅しても、おかしくないんだよ】

【そんなに酷いのか？】

【酷いもんじゃないよ。よく、今まで生きてたもんだよ。気力だけで生きてたもんだろうね。これが解決したら、張り詰めてた物がなくなってしまうから、きっと消滅するよ】消滅か……。てか、死ぬのとどう違うんだろ。

【てか消滅って、死ぬのと何か違うのか？】

【同じだよ。ただ、何も残さないだけ】

【……………？】

さっぱり意味が分からねえ。

【妖精や精霊はね、魂を持たない種族が多いんだよ。サミアドもそう。人間には魂があるから、死んだとしても何かは残せる。でも、彼らは死んだらそれまで。魂がないから。完璧な消滅が待ってるだけなんだよ。完全無欠の消滅がね】

じゃあ、死んだとしても何かを残せる俺達は、まだ幸せなのか……？

【さて、感傷に浸ってる暇はないよ。感傷に浸る前に、行動だよ】

【そう……だな】

杖を取り出して、床に打ち鳴らす。
ちよっと慣れてきた白い光と、浮遊感。

【……………】

彼は木の枝に座りながら、風や木の葉が擦れる音に耳を傾けていた。耳を澄ませば微かに聴こえる、風や木々の歌。

自身がまだ、神格を完全に失っていないことの証。自然の声を直接聴くことが出来るのは、神だけ。

しかし、彼にとっては残っている我が身がなぜかおかしくて、彼は笑う。未練がましく神格が残っている我が身がなぜかおかしくて、彼は笑う。

俯き、滴が落ちそうな瞳を隠しながら。

【……………そんなところで何をしているのです？】

あるひとつの木を見つめ、口を開く。

【バレタカ】

木の影から姿を現したのは、サミアド。

【分からないと置いていたのですか？そんな気配を隠さずにいて、気づかない馬鹿はいませんよ】

【ソリヤソウダナ】

【しかし、そんな状態でよく私の前にこのこと現れましたね。消されたいのですか？】

【才前ガヤラナクテモ、スグ消エル。ソレニ、才前ガ本気デ俺ヲ消スツモリナラ、今頃俺ハ消エテル。本当ハ、消スツモリナンカナインダロ。本当ハ、自分ガ消エルノヲ待ツテンダロ】

【確かに私がやらなくとも、自然消滅するでしょうけど。持って後、

五分くらいですか】

サミアドの、徐々に薄れつつある身体を見つめながら言う。
その瞳に悲哀を宿しながら。

【才前、本当素直ジャナイナ】

【ほっときなさい。しかし、消えてしまおうとは、緊張の糸が切れてしまったのですか？……雫を守りきらずに消えるなど】

【アイツハ姫ヲ守ツテクレル。才前モ助ケテクレル。絶対ニ。死ヲ
間際ニシタ奴ノ勘ダ】

【……貴方をこのこ死なせるのに？】

【アイツハ俺ノ好きナヨウニヤラセテクレタンダ】

【……そうですか】

【最後ニ才前ノ気持ちモ分カツタシ、モウ未練ハナイ】

透明になりゆく身体。空に昇る光が消えた時、サミアドはどこにも
いなくなった。

【……さようなら。貴方こそ、素直じゃないですよ。未練はないな
ど、嘘のくせに】「いで！」

なぜか地面より、五メートルくらい高い位置で落とされて、うまく
着地出来ずに尻を打ちつけた。
地味に痛い……。

「零君、いつまで経っても着地下手だね」

「まさか地面より高い場所から落とされるなんて、思わねえだろ！」

「ごめんごめん。ちょっと手元が狂っちゃった」

へらへら笑いながら頭掻くなよ。

本当……俺の扱い適当だな。

「でも、目的地にはちゃん到着いたよ」

「へっ？」

巫が上を向く。つられて俺も見ろ。

神薙が、木の枝に座ってた。

【やあ、サミアドはもう消えたんだね】

【ええ。実に穏やかな顔をして逝きましたよ】

【そっかぁ……】

【それで、あなた達は何をしに来たのですか？】

【分からない？君を死なせないために来たんだよ】

巫が腰に手を当てて、自信満々に答える。

それが、神薙の気に障ったのか、不機嫌そうに目を細める。

【余計なお世話です。私はもう、どうなってもいいんですよ】

【君を陥れた神殺しに喰われたとしても？】

【もう……………どうでもいいですよ。なら、貴方が私を消してくれると言うのですか？】

【それはしない。約束だからね】

【なら、仕方ないですね】

神薙の瞳が紫に変わる。

恐ろしいほどの重力が、のしかかってきた。【神……薙……！何考えて……！】

巫も重力に負けて、地面に這いつくばるような格好になってる。指一本さえ動かせない。

神薙が、俺達の前に下りてくる。

【こうでもしないと、貴方は戦わないでしょう！貴方は被い師に向いてない。他の被い師は“オニ”という理由だけで、問答無用で攻撃してくるというのに。なぜ貴方は、自ら傷つくようなことばかりするのです？落ちぶれた私など、ひと思いに消してしまえばいいでしょう？その食人鬼もそうです。自我があるうが消してしまえば、貴方が心を痛める必要はなかったでしょう！？】

なんで、神薙が泣くんだろ。巫のために？

【流石は元神様だね。お見通しか。でもね、僕は好きでやってるんだ。傷つこうが関係ない。この子のことだって、分かっててやって

るんだ。どんなに少ない可能性でも、明るい世界に、僕は賭けるよ】

【貴方は、いつでもそうですね……。そうしてまた、結果に裏切られるのでしょうかね】

【それでもいいさ。僕の自己満だから】

【……………貴方は、なんて弱いのでしょうか……………】

涙を流す神薙。巫が必死に指を動かして、地面に奇怪な文字と模様を書いていく。

【それが僕だからね。土は土に、風は風に！】

巫が唱えた瞬間陣が輝き、込められた霊力が視認出来るほど渦巻いていく。

バンツと、ガラスが割れるような音が響いた瞬間、のしかかっていた重力が微塵もなくなった。

巫が立ち上がって、懷から杖を取り出す。

【さあて、素直になれないひねくれ者には、おいたが必要だね。人の会話を盗み聴きするような悪い子にもね。出て来ないと、首をちょん切るぞ】

木の影から黒い男が出てきた。

巫がいつものように杖を構えて、不敵に笑う。なんなんだ……あの黒い男。実体を感じられない。

顔があると分かるのに、分からない。

ひたすら、黒。

【さあゝて、役者が揃ったところだし、派手にいきましょか】

巫がにやりと笑う。不気味だ、ひたすら不気味な黒い笑顔だ。何するか分かんねえ。俺、こっそり避難してていいかな……。

巫が杖の先を自分に向けると、なんと腹にぶっ刺した。

これには神薙も黒い男もたじろいだ。

なんで神薙は、これはマジでヤバい、みたいな顔してんだろ……。嫌な予感しかしねえ。

【姿を変えよ】

杖が、まるで粒子のように分解して、巫の両手に再び集まる。

【零……】

白銀が見せたことのないような、不安げな顔で見上げてきた。

【なんだ？】

【巫、カナリヤバイヨ。本気出シスギダヨ。アレガ完成シタラ、トニカク逃ゲルンダヨ】

【へっ？】

言ってるうちに、それが完成して巫の両手に握られる。

アメリカとかの映画に出るような、デカくてド派手なマシンガン。

いや、もうそれあれだろ。被うとか関係ねえだろ。

強制的にあの世逝きだろ。

【さあ青臭え死に損ない共覚悟しな！巫様が直々にてめえらの脳味噌

「噂、叩き直してやるからよ！」

「いや、ちょ、人格変わってますよ？」

「完璧、凶悪殺人犯みたいな顔してるよ！？」

「あいつにマシンガンなんて握らせちゃ駄目だ！」

「もう遅えけど！」

【ぎゃあああああああ！！】

「敵味方関係なく撃ってきたあああ！【白銀！なんなんだよあいつ！完璧別人じゃねえか！】」

「凶悪な笑顔で撃ちまくってるよ！しかも走りながら追いかけてるし。マシンガンを持った凶悪殺人犯のような笑顔を浮かべた巫女服を着た男が追いかけてくる。かなりのホラーだ……。」

「流石の神薙も黒い男も逃げてるし。」

「巫は笑顔で、【待てやこらあ！ここで死ねや！腹にドデカい風穴空けてやるから、おとなしくひれ伏せやがれ！】とか言ってるし。怖え……巫さん怖えよ……。」

【「ダカラ言ッタジャン！銃器ヲ持タセタラナゼカ、アアナルンダヨ！」】

「よく見ると、弾が全く減ってない。」

「巫の靈力を喰って姿を変えるんだよな……。じゃあ弾は靈力が形を成してるってことだよな。」

「……………巫の靈力がなくなると、あのマシンガン杖に戻らねえんじゃない……。」

【「零、逃ゲルヨ！」】

【へっ？】

すぐ横を黒い男が突っ切って行った。

マシングンを構えた巫が、俺を蹴倒して右足を腹に乗せたまま、マシングンの銃口を胸に当てる。

【てめえもてめえだ！いつまでもピーピー泣いてんじゃねえよ！男なら根性見せろ！てめえのその小せえ肝っ玉じゃ、本当にいつか死ぬぞ？それかてめえの大切な誰かがな。辛い思いをしないように、今ここで殺してやるうか？二回目の死を味わわせてやるぞ？】

【ごめんなさい！頑張るから！】

【ふん。その言葉忘れるなよ？後悔しないようにな】

やっと足を退かしてもらえて、ほっとする。

マジで怖かった……。殺されるかと思ったし……。【ちっ、神殺しに神薙め。ちょこまかちょこまかと。白銀！】

巫の口調が一向に元に戻りません。

っーか、こっちの方が本来の巫なんじゃ……。

どっちにしても、怖え。

【アイヨ。何？】

木の枝から飛び下りて、巫の横に着地する。

【準備はいいか？】

【勿論】

【よし。じゃあ、頼む】

白銀が目を閉じて地面に両手をつく。

目を再び開いた瞬間、白銀の身体が霧散した。

まさに風に吹かれて消えていく、霧みたいに。

そして、白に蝕まれていく森。

空が、白に覆われていく。

完全に覆われた時、地面に潜り込んでいた神殺しが地面から弾き出されて、姿を消していた神薙さえも強制的といった感じで、姿を現した。

【華鬼の完全無欠にして難攻不落の幻影世界だ。いかに元土地神だろうが神殺しだろうが、破るのは手間取るぞ？】

巫さん……笑顔が凶悪すぎて怖えよ。

俺とオルトロス……いる意味なくね？

オルトロスなんて、存在忘れられてるだろ。可哀想に、木の上でガタガタ震えて。

【さあ、こっから本番と行こうじゃねえか？白銀の幻影は天下一品だ。泣くなよ？】

銃口を、二人に向ける。【残念。こっちだ！】

神殺しが腕を変形させて貫いた巫は幻影で、攻撃された途端霧散したのと同時に本物の巫が背後から凄まじい回し蹴りを食らわせた。うん。普通の人間だったら死ぬな、あれ。

巫に散々撃ち抜かれてるせいか、服がズタボロになってきてる。

その下から見える、腐敗しかけてる身体。

肉がこそげ落ち、骨が見えてる箇所もある。

どう見ても長く保ちそうにない。

巫が起き上がろうとした神殺しの胸を踏んづけて、銃口を頭にグリ
グリとなすりつける。

【全く、人間風情が神になろうなんぞ、傲慢すぎんだよ。てめえの器が神に相應しい器か？てめえは犯してはならない領域を犯しすぎた。知らない訳じゃねえだろ？土地神といえど、神の末端だ。本物の神の眷属。神を殺した大罪人は、天使の手によって魂は引き裂かれ塵にされる。てめえの魂は塵も残さず消えると思え】

【あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ】

神殺しが突然奇声を上げて、巫を喰らおうと身体を変形させた。巫は顔色ひとつ変えずに、恐ろしいほど感情の込もってない瞳で、引き金を引く。

【数多の土地神を殺し、数多の土地を死なせ、裃い師でありながら欲に驅られ、自らその身を墮とした愚かな裃い師よ。今こそ報いを受ける】

弾が、神殺しの頭を木っ端微塵に破壊する。【あちらは、そろそろ片づきそうですね】

言いながら、俺に近づいてくる神薙。

俺なんかを、相手にしてどうしたいんだ。

【な、なんだよ？】

【貴方を吸収しようと思ひまして】

ちよ、俺まだ死にたくねえし！

【吸収されると分かれれば、逆に私を吸収しようと思ひ貴方の闘争本能が働くはずです。貴方の方が力は上ですからね。跡形もなく吸収され、私は消えるでしょう】

【……そこまでして、死にたいのか？】

【私もあの男も、死ぬべきだったのです。それを、今やるだけです
よ】

じゃあ、なんでお前は悲しそうな顔をしてんだよ？

今にも泣きそうな、寂しそうな顔。

本当は死にたくねえんじゃねえのか？

【とんだ嘔吐きだな】

【……やはり、被い師の家系なだけありますね。ですが、止める術^{すべ}を知らなければ意味がない】

止める術なら知ってる。さっきから怒濤の嵐のように流れ込んでくる、術式の知識。

蒼さんの、豊富な知識。

その中から、ぴったりの術式を選ぶ。

地面に足で、簡単な陣を描く。

本来ならちゃんと陣を描くべきなんだろうけど、軽く足止めをしたらいいだから簡単な陣で十分だろ。

俺の周りに、黒い靄の形をした精霊がわんさかと集まりだした。

あり？ここまで喚んだ覚えねえぞ。まあ、大丈夫か。

【暗き闇よ、我が定めた者の力を喰らえ！】

精霊がひとつになって、巨大な虎のような形になると、口を大きく開けて神薙に飛びかかった。この精霊に実体はない。意識はこつちにあるけど、実体は別の場所において、霊力だけを貸してもらってる状態だ。

霊力の塊。

本来は、自分を喚ぶに相応しいと判断した契約相手にしか、召喚されない精霊。

狩眞の血筋には、無条件で喚ばれてくれる。

口を大きく開けた精霊が、神薙の心臓の位置でガキンツと音が響くほどの勢いで口を閉じて、神薙の身体をすり抜ける。

虎の形から黒い靄に戻った精霊は、動けないように神薙を縛る。

‘ほゝ、やれば出来んじゃん。ただ、霊力をもちつと制御出来るようにならねえと駄目だな’

蒼さんの声が頭に響く。

霊力制御が簡単に出来たら楽だよな。俺はそんなに込めたつもりねえのに、あんなに集まったもんなあ。

‘狩眞の血は“オニ”に好かれやすいんだよ。良くも悪くも。狩眞の血筋の人間は、厳密に言くと人間じゃねえからな。気をつけねえと、大変だぞ？’

人間じゃない？どういう意味だ？

‘まあ、説明は後だ’

.....
 気になるけど、確かに今は神薙のことが先決だな。

その時だった。

【ヴ、
ヴウ……あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
!!】

神殺しが突然奇声を上げて巫の拘束を破ると、神薙に向かって突進してきた。

精霊が状況を察して拘束を解いてくれたけど、間に合わない。

【零君！】

あーあ、何やってんだろ俺。

神薙を突き飛ばして、神殺しの前に出るなんて。

黒が覆い被さってくる。零に覆い被さる神殺し。零の身体は一瞬で呑み込まれ、噛み砕くかのように神殺しの身体は変形を続ける。

【くそ……油断したばかりに……！】

いつの間にかマシンガンを杖に戻していた巫が、悔しげに呟く。

【あの少年が取り込まれて、よほど都合の悪い事情があるのですか？】

【ありまくりだよ！狩眞の血の秘密、古の土地神なら知ってるだろ
う？】

【ああ、なるほど。そういうことですか……。貴方、よく狩真を知ってましたね】

【最近知ったんだよ。それに、あの子は同時に食人鬼の王族で、しかも“鍵”なんだ】

【“鍵”……？まさか、“扉”の“鍵”のことですか？】

それまで無表情だった神薙が、険しいものへと表情を一変させる。

【何か知ってるのか？】

【あの少年が“鍵”のなら、早く助け出さないと大変ですよ。“鍵”が目覚める前に引き離さなければ。私も手伝います。“鍵”を目覚めさせるくらいなら、私の事情などちっぴけなものですよ】

【君は、何を知ってるんだい？】

【ここでは話せません。“鍵”が聴いているかもしれないから。今言えるのは、“鍵”は“オニ”であり、自らの立場を踏まえずにあることを成し遂げようとしたために、意思を封じられたことくらいです】「おい、起きろ」

ぺしぺしと頬を叩かれる。目を開けると、蒼さんがしゃがんで俺を見下ろしてた。

「やっと起きたか」

「ここ、神殺しの中？」

黒い、ただひたすらに黒い空間。
その中に、苦痛に歪んだ顔がいくつも浮かび上がって見えるのは、
気のせいじゃない。

「そ、神殺しに取り込まれたんだよ。全く、お前が事態悪化させて
どうする」

「……………悪い」

「ま、しょうがねえけどさ」

ガリガリと頭を掻きながら、俺を見てくる。

「なあお前、あの元土地神を許す気あんのか？」

「……………？許すって……………」

「あいつは殺しすぎた。本来はあいつを抜うべきだ、抜い師として
はな。俺の知識を与えたのは、お前の選択を見たかったからだよ」

「俺の選択……………」

「お前の力を以てすれば、あいつを殺すことは出来たんだ。それを
しなかったのは、なんでだ？」

「……………」

「それでいいんだよ。お前はそれでいい。お前は、奴らに染まるな。
いや、染まっちゃいけない。大切なものがあるんなら、お前はお前

のままでいろ」

「……………なんで、このまま吸収されて死ぬかもしれねえこの状況で、そんなこと言うんだろ。」

「ま、戯れ言だと思って流してくれ」

なんで、そんな複雑そうな瞳で見るんだ？

「なあ、どうして本家は狩眞を滅ぼしたかったんだと思う？」どうして狩眞を滅ぼしたかったなんて、いきなり言われても分かんねえよ。

「……………えっと、思想とかやり方とか、あまりにも本家のやり方と違ってたからとか……………」

「…か、それくらいしか思いつかねえし。」

「そりゃあ違ってたさ。“オ二”を必要じゃない限り被わないなんて、当時としても今でも本来ならあり得ないからな」

「じゃあ、それで？」

「違うさ。いくらなんでもやり方が気に入らないだけで、滅ぼしたりしない。被い師はいつの時代も足りてねえんだからな」

ますます、分からなくなってきた。

「俺が狩眞の血筋の人間は、厳密に言うとな人間じゃないって言ったの覚えてるか？」

「う、うん？」

「狩眞の一代目は、“オニ”なんだよ。“オニ”が被い師のやり方に疑問を持って、だったら“オニ”である自分達が“オニ”のために被い師をやってやろうって、同じ志を持った奴らが集まって結成されたのが狩眞なんだ」

「“オニ”が被い師って、そんなこと出来るのか？」

「それだけの力を持ってたんだよ。人間の血が狩眞に入ったのは、後からだ。俺達の血は人間より“オニ”の血の方が濃いんだよ。様々な“オニ”の血がな。血は薄れることなく末裔のお前まで受け継がれてる」

「じゃあ、滅ぼしたかったのって……」

「そ、本家から見たら俺達は“オニ”だからだよ」

「じゃあそれって、俺は食人鬼に噛まれなくても、最初から“オニ”だったってことか？」

「ショックか？自分も“オニ”で？」

「別に、そんなことねえよ」

「言っていいか迷ったけど、お前の母ちゃんだって実は“オニ”だぞ？」

「……………へっ？」何その大カミングアウト。しかもなんでこんな

場所で!?

母ちゃん人間じゃなかったの!?

「血は争えねえつつーか、俺の母ちゃんも九尾な訳よ。お前の母ちゃんも九尾。九尾は怖いぞ」。怒らせたら」

あ、確かに母ちゃん怒らせたら怖……じゃなくて!

「血が薄れてなくて、しかも母ちゃんが“オニ”ってことは、被い師としての狩眞は滅びてなかったってことだろ?なんで、滅びたってことになってんだ?」

「そりゃあバレないようにしてたからに決まってるんだろ。狩眞の痕跡を徹底的にな。狩眞は結構な大所帯だから大変だけどな」

「……大所帯?」

「様々な“オニ”の血が濃く受け継がれてるせいで、狩眞の人間はすんげえ長生きなんだよ。だから、必然的に大家族になるんだよ。俺の可愛い息子だって、まだ生きてると思うぞ」

なんちゅー長生きだ。とんでもなさすぎる。でも、人間と一緒になったら先立たれちまうから、寂しくなりそうだな。

「でも、それならなんで蒼さん達は死んだんだ?隠せるなら、死ぬ必要ないんじゃないのか?」

「その時の狩眞の当主は俺だったからな。本家は狩眞の秘密を知らない。まざりものは本来、人間と同じ寿命しかないからな。だから俺達が死ねば、狩眞は滅びたということになる。家を離れて被い師

をやつてる先祖さん達まで狩られることはない。だから、俺達は死ぬことにしたんだよ」

「……じゃあ、俺はなんで、家のことを何ひとつ知らねえんだ？」

ホントに何ひとつ知らない。自分のことも、母ちゃんや父ちゃんのことも。

「言えない理由があつたんだよ。お前を危険に晒すことが出来なかつたんだ。時期が来るまで、お前を普通の人間として生きさせることにしたんだ」

はつとして、胸を押さえる。

「まさか、“鍵”……？」蒼さんが俺の胸に、人差し指を当ててくる。

「そ。そいつが曲者なんだよ。そいつが何をしようとしてるのかは知らねえけど、分かつてるのは、そいつを目覚めさせたら災厄が訪れるってことだ」

「災厄……？」

つか、“鍵”が“扉”を開けた時点で既に災厄だろ。

それ以上の災厄なんてあるのか？

「“鍵”は本来、封印術に長けた鬼だったらしい。“扉”を造り上げ、自らを“鍵”にして、封印を完成させたんだ。そして反逆を起こして、力と意思を封印されて閻魔大王の管轄の下、厳重に保管されてたんだ」

「自らを“鍵”につて……なんで？」

「本来は閻魔大王に忠実な鬼だったらしい。だから、その当時はその鬼自身を“鍵”にした方が安全だったんだろ」

「じゃあ、それがなんで人間の中を転移してるんだ？」

黄泉の国の王が保管してたんなら、なんで。

「あいつが言っただろ？ 奴らのせいで“鍵”を見失ったんだ。そして人間の中という絶好の隠れ場所を見つけたんだ」

「でも、閻魔大王ならなんとか出来るんじゃない……」

「それがだな、手出し出来ねえんだよ。閻魔や地獄の鬼が“鍵”に触れたら、“扉”が開くようになってんだ」

なんちゅー巧妙な細工……。

「だから、“鍵”は閻魔大王と被い師が協力して監視してきたんだ。なのに、また見失った。お前という最高の器が見つかったからだ。そして、“鍵”を目覚めさせるもうひとつの要因が、お前の身の危険だ」

「俺の？」

「お前という器が滅びの危険に晒された時、器を守るために“鍵”は目覚めるんだよ。お前は“鍵”にとつてまたとない器だからな。必ず守ろうと目覚めるだろうよ。例えば今みたいな状況とか」

……………それって滅茶苦茶やべえじゃん！

「てか、蒼さんはなんでそんなこと知ってたんだ？」

「地獄でお前に転生するのを待ってた間、当時のことをよく知ってる鬼に聞いたんだよ。今頃、神薙とあいつが奮闘してんじゃねえかな。こっちも、本気出してやるか」

「本気って？」

「ん？内側からぶち破ってやんのよ」

蒼さんが、不敵ににやりと笑う。【くっそ……！】

突然の激しい力の奔流に、二人共飛び退く。

巫が悔しげに齒軋りをする。

攻撃が悉く弾かれ、激しい力の奔流に為す術がない。

これだけの力を放出しているのだ。

取り込んだ神殺しそのものが力に吞まれてしまっているのだ。

このまま力を放出していれば、力の源である零が取り込まれたまま消滅したとしてもおかしくはない。

【白銀！どれくらい保ちそう？】

【後……………二十分ガ限界】

【分かった】

その時だった。神薙が、自らも取り込まれてしまつかもしれないの

に、神殺しの内側に、手を突き刺した。

【神薙！？】

激しい力の奔流が、神薙の身体を容赦なく傷つける。

【見つけましたよ。貴方の負けです】

腕を勢いよく抜く。《糸》で繋いだ零も一緒に。視界が黒から、白に変わる。

【あゝ……あゝ……】

神殺しが俺に向かって、手を伸ばしてくるのが見えた。

巫がとめとばかりに霊符で動きを封じる。

誰かが受け止めてくれたのか、衝撃を全く感じずに地面に落ちた。

「ぶえ……げぼげぼっ」

なんだ……この、百メートルを全力疾走した後みたいな疲労感。

‘仕方ねえだろ。あんだだけの霊力を一気に放出したんだからな。でも、うまくいっただろ？’

まあ、確かにうまくいったけどさ……。

しばらく抜けそうにねえな、この疲労感。

【……………いつまで私の上に寝転んでるつもりなのです？】

【へ？うわっ、なんで下にいんの！】

【私が貴方を引きずり出してあげたというのに、その言い草はないでしょう？】

引きずり出してあげたって、俺をさっきは殺す気満々だっただろ。まあ、助けてもらったのはありがたいけど。

【あ、ありがと？】

【それより、貴方にどう落とし前つけてもらいましょうかね？】

【……………へっ？】

落とし前って、何？なんで、そんな不気味に笑ってんの？

【まあ、説明は後です。天使が来たようですから】

神薙が空を見上げる。俺も見上げてみる。

【あれが、天使？】

【そうです。あれが、本物の天使ですよ】

二人の天使が黒い翼を広げ、手に燃え盛る剣と鞭を持って、音もなく舞い降りた。天使って、白い翼じゃねえの？

黒い翼って、堕天使か悪魔だろ。

‘天使にもいろいろいるんだよ白い翼を持つてるのは、神さんの世話する天使だけだ。黒い翼の天使は戦闘員。神に仇なす存在を容赦なくぶちのめすんだよ。まあ、土地神に関しては積極的じゃねえけ

ど、

天使が、鞭を神殺しに巻きつけて燃やし始める。
鼻が抜れそうな異様な匂いが、充満する。
聴くに耐えない断末魔。

もう一人の天使が、燃え盛る剣を突き刺した。
何度も何度も、原型を留めなくなるまで。

【うっ……】

気持ち悪い。あれが天使のやり方？

情け容赦もクソもねえ。何が清くて慈愛に満ちてんだよ。

あんなの、狂気じみてるじゃねえか。

天使が、微笑みながら殺すなんて。

最後に、本当に小さくなった神殺しが恐怖の眼差しで天使を見上げる。

そこに、天使は微笑みを浮かべて剣を突き刺した。

断末魔もなく、跡形もなく消え失せる。

神殺しが完璧に消え失せた途端、天使は何事もなかったみたいに翼を広げて舞い上がっていった。

【天使も神も嫌いだよ】

巫が帰っていく天使を見上げながら呟く。

【信じる者は救われるなんて、嘘っぱちだ。信じる者も信じない者も、平等に奪うくせに。そのくせ、娯楽のための贄だけは捧げさせて】
【……娯楽？】

【神は生贄を捧げさせるでしょ。あれは娯楽のため。飽きるまで踊

らせて歌わせるんだ。飽きたら呆気なく捨てるけど。そしてまた次の生贄を捧げさせる。神だから偉いかもしれないけど、嫌いだよ】俺なんてこれっぽっちも信じたことなかったけど。

【神は傲慢なんだよ。人々の信仰があつてこそ、廃れずに存在出来るくせに。確かに世界を創ったのは神だろうさ。でも、信仰されないと廃れるのは土地神と一緒になんだよ。人の想いから生み出された、それくらいの違いなのに】

へえ、人間世界に滅多に関わらないって言うからてつきり信仰とか関係ないのかと思つたけど、やっぱり信仰されないといけねえのか。

【そういえば……さっき言つてた落とし前つて……何？】

【なぜ巫の背中に隠れるのです？心配しなくともって食いやしませんよ】

いや……助けてくれたけど、さっきまでぶちのめす気満々だったじやんか。

【貴方を引きずり出すために《糸》を繋いだのが間違いでした】

あ………そういえば何かに触られた感触は確かにあつたな。

【貴方の魂に《糸》が触れた瞬間、契約など交わしてないというのに、私は貴方の“式”にされたのですよ？】

うつそーん……。マジかよ？あいつが俺の“式”？

【私は貴方の“式”になりました。さて、貴方は私をどうします？ お好きにどうぞ】いや……お好きなようにって言われても……困る。どうしたらいいんだよ？ あいつはさっきまで死ぬ気満々だったけど、今は何かが吹っ切れたみたいな顔してるし……。

少なくともさっきまでの悲壮感はねえけど。

【なあ巫……】

【自分で決めてね】

うわ、軽！めっちゃ軽いノリで言われたし！

【零君が勝手に“式”にしちゃったんだから、このまま“式”としてこき使うなり、今この場で被うなり、零君が決めなきゃ】

そんなこと言われたって、俺に被う勇氣なんかないって分かっているくせに。

へらへらしてるくせに、見てるとこはちゃんと見てるんだよな、巫は。

【零君は神薙の主なんだよ。決めるのは零君じゃないと。被えないなら、分かるでしょ？】

【このまま“式”にする……】

だって、そうするしかねえじゃん。

【そうですか。よろしく願いしますよ、主様。私は休ませてもらいます。疲れました】

そう言つて俺に近づいてくる。

俺の影を踏むと、そのまま影に沈み込むように消えた。
てか、主様って……。

なんとなく空を見ると、いつの間にか元に戻つてて巫の隣に白銀がいた。

無表情だけど、疲れてそうだな。

【とりあえず、帰ろうか】薄暗い空間の中、ふたつの影が対峙する。

【なんとまあ、上手く入り込んだもんですな】

【貴方こそ、恰好の器を見つけたものですな。神無月の満月の夜に生まれた、神の加護を全く受けずに産まれてしまった忌み子。しかも狩眞の血筋。抜い師にも“オ二”にも精通する血筋。これ以上ない器でしょうね】

神薙の前に対峙する影。胸まで伸びた銀の髪が美しく、耳の上から角が生えている。

【よう知ってますなあ。当時から生きてますのか？】

【いいえ。そこまで長く生きてませんよ。土地神には貴方に関する知識が備わってるのです】

【なるほどなあ。大地は地獄と密接に関係してますもんなあ。ま、わたしにや関係ありませんな】

【自信おありのようで】

眉間に皺を寄せながら、鬼を睨む。

正確には“鍵”を。

【そりやそうですわな。わたしの力、そして最高の器。合わされば敵なんざありやしませんで】

【なぜ、貴方は世界を滅ぼしたいのです？愛し、守ろうとした世界でしょう？】

【わたしの愛し守ろうとした世界は、もうありやしません。昔は人間も綺麗だった。しかしですな時代が進むにつれ、人間は穢れ、世界も穢されてもった。わたしや神も嫌いですね。世界が穢れていくのを、ただ傍観しとるだけですやろ】

神薙は、答えない。

【創ったくせに放棄ですかい。だから、神にも人間にも“オニ”にも、全てに喧嘩を売ろうと思いましてな。前回は大失敗してもうたさかい、次は成功させますで】【……私が言えたことじゃありませんが、全てを葬って、どうするのです？】

【そりや分かりませんわ。わたしの勝手に今ある世界を滅ぼすさかい、星が許しやせんかもしれませんなあ。わたしを殺すかもしれませんで？】

眉間に皺を寄せながら睨む神薙に対し、全く緊張感がない様子で笑う鬼。

【それなのに、やるのですか？】

【ええ、やりますわな。滅ぼすのは世界であって、星ではありやしません。星が活着している限り、世界はまた続く】

【愛したからこそ、今ある世界を滅ぼしたいのですか？】

【あんさんなら、言わなくとも分かりますやろ？己の正義のために、わたしや動くんですわ。閻魔さんも一族にも悪いと思つてますで。裏切つたことは紛れもない事実さかい】

懐かしげに、鬼は目を細める。

【朋友を裏切つてでも、貴方は……】

【決まつてますやろ。正義の形が途中で違つてしまつただけですわ。閻魔さんには閻魔さんの正義があり、わたしにはわたしの正義がある】

神薙に背を向け、おもむろに、鬼は両腕を広げる。

【見て見なされ、人間だけの都合のいいように作り替えられ、穢されていく世界を。昔の、美しい世界はほとんど失われてしもつた。このまま行けば、人間は世界どころか星でさえ殺してしまうに決まつとる。そうなる前に、今ある世界を滅ぼすのですわ】

微笑みながら、神薙を振り返る。

【目的のためには、この星にとって敵である存在でさえ利用させてもらいわすわな。奴はわたしを利用してゐるつもりなんやろうけど、逆に利用してやりますで】

【…………貴方を、狩眞は許すでしょうか……。いえ、真実を知れば、悲しむでしょうね。ですが、貴方と戦うでしょう。愛する全てを守るために】

【懐かしいですなあ。わたしが狩眞だった頃は、李炎りえんと呼ばれてましたなあ】「本当にありがとうございます！百合もあれから笑うようになったくて」

あれから二日経つ。

明るく笑う女の子の母親。俺の後ろに立った神薙の姿は、勿論見えない。

神薙が術を解いたから、母親は本来の母親に戻った。よく笑う人だったんだな。

「じゃあ、もう心配ありませんね。僕達はこれでおいとまします」

女の子の家を後にして、神薙が破壊したビルの前にいる。

神薙が見たいって言ってきたから、来た。

ビルは修復されながら、無事な部分はそのまま使われてる。

あれだけの人が死んでも、何も変わってない。

【…………私が引き起こしたとはいえ、あれだけのことが起きたというのに、人間は忘れられるのですね…………】

【そんなものだよ。人間だから】

人間だから…………か。

【さて、ちょっと付き合ってね】巫、ここになんの用事があるんだ？
この前の、サミアドが消えて神殺しが死んだ森。

【ねえ神薙。ここ、かつて守護してた村があつた場所でしょ？】

【……………そうですよ。この森だけ、あの頃のまま…………。無様でしょう？未練がましくて】

【どうしてそうなるかなあ。ひねくれ者め】

【ひねくれ者で結構です】

腕を組んで、巫に背を向ける。

【それで、そんなことを確認するために来たのですか？】

【いんや。百合ちゃんのドッペルゲンガーを雷往にね】

懷から静珠を取り出した。
無色透明の、綺麗なビー玉。

【ドッペルゲンガーに、新しい人生をくれるって】

【そう…………ですか。私はもう寝ます】

【見送らなくていいの？】

【いいんです。これで】

そう言って、俺の影に沈んだ。

なんか、清々しい笑顔だったけど、何かあったのか？

巫の前に、真っ黒い穴が現れた。

そこから、二メートル以上あるドデカい鬼が這い上ってくる。
雷往だな。

【すまん。遅くなった】

【いいよ。僕達も今来たし。で、よろしくね】

ビー玉を雷往の手に渡す。

雷往がビー玉を光に翳して、見つめる。

【ふむ。綺麗な魂よ。普通トッペルゲンガーの魂は濁っているものだがな。未練が全くない。この分なら、次の生は充実したものになるう】

【そっか。なら、よかった】【では、我は行く。また会おう】

【うん。次は酒でも飲み交わそうか】

【はっは！そりゃいいのう！零よ、その時はお主も来い！】

ばしばしと背中を叩かれる。

俺もかよ。なんか、この二人が酔ったら凄まじく面倒なことになる気がする……。

そりゃ酒は好きだけどさ……てか、巫も酒飲むんだな。

【零よ、お主は様々な業を背負ったものだな】

【へっ？】

【我でさえ初めて閻魔様から全てを明かされた。狩眞の負の遺産が、お主に降りかかることになるのやもしれんな】

いや、そんな壮大なフラグ立てんのやめて。

一族を背負うとか、そんなこと俺に出来っこない。
ん？てか、負の遺産って何？

【はっは！そう怖じ気づくな！なるようにしかならんだ。しかし、抗うことは出来よう。今は、盛大な楽しみ】

それだけ言って、穴に飛び込んで地獄に帰った。
地獄の鬼って、皆あなののか？

「これで終わったね。一人、欠けちゃったけど」
でも、あいつだって責めたりしないだろ。

「帰ろっか」

「そだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7754w/>

俺さあ、人間じゃなくなったみたいなんだ

2012年1月7日02時48分発行